佛教大系

正法眼藏第四

（上）

特2-8
325

始

特 258
325

佛敎大系刊行會編纂

佛敎大系

正法眼藏第四

佛敎大系刊行會藏版

正法眼藏註解全書第四卷目次

大悟……一
題釋……一
述贊　聞解　私記
文釋……二
聞解　私記　御抄　辨註　那一實
御聽書抄……四二
卷末……四九
參註……四九
涉典錄……五九
涉典續貂……六〇
坐禪箴……六五
題釋……六五
御抄　述贊　聞解　那一實
文釋……六六

聞解　私記　御抄　辨註　那一寶……一六六
御聽書抄……一八五
卷末……一八五
參註……一八五
涉典錄……二一一
涉典續貂……二一三
佛向上事……二一七
題釋……二一七
義雲頌著　述贊　聞解　那一寶
文釋……二一七
聞解　私記　御抄　辨註　那一寶
御聽書抄……二六四
卷末……二七三
參註……二七三
涉典錄……二八〇
涉典續貂……二八一
恁麼……二八五
題釋……二八五
義雲頌著　述贊　聞解　那一寶
文釋……二八五
聞解　私記　御抄　辨註　那一寶
御聽書抄……三二四
卷末……三三一
參註……三三一
涉典錄……三三九
涉典續貂……三四五
行持（上）……三五一
題釋……三五一
義雲頌著　述贊　聞解　那一寶
文釋……三五二
聞解　私記　御抄　辨註　那一寶
行持（下）……四〇三
文釋……四〇三

閑解　私記　御抄　那一寶……四五三
御聽書抄……四六一
卷末……四六一
參註……五〇七
渉典錄……五一六
渉典續貂……五四三
海印三昧……五四三
題釋……五四三
義雲頌著　述贊　閑解　辨註　那一寶
文釋……五四四
閑解　私記　御抄　辨註　那一寶
御聽書抄……六〇二
卷末……六一五
參註……六一五
渉典錄……六三〇
渉典續貂……六三二

正法眼藏註解全書第四巻目次終

正法眼藏註解全書第四巻

神保如天
安藤文英　共編

正法眼藏大悟

大悟

【面山述贊】　第十大悟　述云、小迷之翻也稱之大悟、大悟之覆也稱之卻迷、祖偈所謂悟了同未悟者也、僧問臨濟、如何是劒刃上事、濟云、禍事禍事、是故般若利劒常應納鞘、祖訓之妙密如是耳、贊言　將軍撥塞外、天子穩寰中、喻之吾密旨、功位全圓融、非色非心非行業、竪三横十忽廓通。

【閑解】　正法眼藏大悟卷閑解　大悟は修行本起經曰、明星出時廓然大悟と、此卷は具は大悟却迷と云ふべきなり、本意は却迷の處を明す、迷に衆生の小迷をひきかへしたを大悟と云、大悟の手を覆ひふせたを却迷と稱す、悟了同未悟の行李なり、昔臨濟に僧ありて問ふ、如何是般若の利劒の上をわたるの事と、臨濟の答に、般若の利劒を常に持つて居るは危い禍ひなことじやと、かうした道理じやから、般若劒は、平生鞘に納て鋒を藏すがよい、吾祖師之敎訓綿密なる宗旨如是耳、見般若被般若縛故

△辨、那、ず下
割云、ルアリ
△辨、那、常下
割云、ノ功業
大道

に、大悟も持て居ればあぶないから、却迷せねばならぬ。

【私記】 佛祖の骨髓なり、吾人の命脈なり、蹉過することなかれ」

佛佛の大道、つたはれて綿密なり、祖祖の功業、あらはれて平展なり、このゆゑに大悟現成し、不悟至道し、省悟弄悟し、失悟放行す。これ佛祖家常なり

【聞解】 佛々……果位圓滿の上についていへば、佛々の大道傳續して不レ斷、因行圓滿の祖々の上についていへば、功勳作業が圓滿してある因行を修する故に、圓滿するなり、佛々祖々になしとも、因も果も圓滿で同一佛祖なり、今日の行李は、皆如レ是佛々の大道は外のことで無い、三世常住あらはれて、其間が綿密にして、水も不レ漏、風も不レ通、間斷が無い、それを取て行ふ、祖々の手前では、功勳作業とあらはれて、平等に展整してあるなり、大道は功業によりてあらはれ、功業は大道を行によりて得る、影略互見の文法なり○このゆゑに……祖師門では、大悟現じて轉レ迷云二大悟一、悟を轉ずるを不悟と云、省二自己一悟もあり、又弄しもてあそぶ悟もある、失悟は不悟と同意、悟邊離却の行履なり○これみな佛々祖々の大道功業の傳はりつゝく常の暮し方なり。

【私記】 とは　大悟にあらざれば、佛祖なきをもて、綿密なり平展なりといへり、つたはれて綿密とは、間斷なきなり、參本いはく、須知打圓相也、と」是なり、あらはれて平展なりとは、高下なく、難易なく、そのことそれなるなり、これ大悟の觸處生涯をきこえんとして、佛祖を擧げて例諸するなり、しかあるがゆゑに大悟現成、不悟至道、省悟弄悟、失悟放行、これ佛祖の家常なり、これみな綿密平展にして、急に速かなるなり」

【御抄】 佛々の大道とは、佛は能行にて、所行の行の別にあるやうに聞ゆるを、今は佛々をやがて、

△辨、那、擧上
割云、是ヲ
△辨、那、り下
割云、是ヲ

大道と談ずる也、故に能行所行不可各別。

是は大悟の上の不悟省悟弄悟失悟放行なり、大悟不悟は會不會なるべし、打任ては失悟はあしき詞ときこゆ、大悟の上の失悟善惡にかゝはるべからざる歟。

【辨註】 辨曰、綿綿は不斷の義なり、密密は親密の義なり、平展は平常展整の義なり、頭頭上物物地、歴歴たる佛の大道、祖の功業是互顯の詞なり、諸佛大道の功業祖師功業の大道なり、是を因地果上の二義に分析して見るは不可なり。

【那一寶】 大悟　那一寶曰、大は無也無邊際也、悟は轉機無性空也、無盡藏也、一塵起大地現成なり、綿々は不斷の義、密々は親密の義、平展は平常展整の義なり、頭々上物々地、歴々たる佛の大道、祖の功業、是互顯の詞なり、諸佛大道の功業、諸祖功業の大道なり、是を因地果上の二義に分析して見るは不可なり。

擧拈する使得十二時あり。拋却する被使十二時あり、さらにこの關棙子を跳出する弄泥團もあり、弄精魂もあり

【聞解】 其家常には、大悟不悟等を擧起拈得して、使得十二時の境界あり、又大悟省悟等を拋却するは十二時に使得せらるゝなり。これは常の使はるゝとは違ふ、悟了同未悟の行李を使はるゝなりに使はれて今日の凡夫と同じて、凡聖を超へた境界なり○さらに……上に云、一切悟邊の關棙子、でふまひを躍り出て迷悟を論せず、作佛を圖らず、かうした弄泥團の人もあり、弄精魂の人もある、弄泥團は人と云ふ程のこと迷悟を超越し、昔と同じ、泥團を弄する樣な境界になりたるなり。

【私記】 とは　擧拈拋却得被使みな十二時なり、ゆゑに關棙子といふ、跳出をもて關棙子をつくるが

△師、那、準。下大字アリ

△師、那、祖。下割云、ノ佛祖ナル

△師、際。下割云、俱舎智品邊際定釋曰増ノ至ニ究竟一故名ニ邊際一如レ說ニ涅槃名爲ニ實際一顯ニ極義一也

△師、那、悟。下割云、ノ大悟ナル

ゆゑに、關棬子を跳出するといへり、跳出は關棬子のつがへなきなり、ゆゑに弄泥團、弄精魂なり、參本いはく、弄者猶レ言レ左ニ右之一と自由にわがものにとりまはすなり、泥團とは、諸法のいろいろをいへり、そのいろいろなる諸法を手にいれて、ひきまはすなり、弄精魂とは、五臟六腑をわがものとするをいへり、これ泥團精魂の舊見脫落なるをもて弄とはいへり、關棬子を跳出するといふゆゑんなり」

【御抄】　擧拈は大悟にあつ、大悟現成のときは、不悟省悟等はかくるべし、このかくるゝ所を、題拋却とは仕なり、十二時とは解脫の詞也、十二時を仕ひ、十二時に仕るゝたゞ同事也。

是はこの關棬子のときは、大悟不悟省悟等にかぎらず、いかなる詞もいでくべきいはれなり。

【辨註】　辨曰、十二時を使ひ得る被使と云をいかんと見よ、使ふもの被使ものありや否と趙州に問取せよ、恐くは趙州も開口不得ならん、是辨道の樣子なり。

【那一寶】　大悟不悟乃至失悟放行と、詞は替れども皆是佛祖家常の功業にして、使得は悟人なり、被使は不悟人なりと擬思するは不可なり、且く十二時を使得ると云ひ、被使と云ふ、如何と看よ、使ふもの使はるゝものありや否やと趙州に問取せば、恐くは趙州も開口不得ならん、是辨道の樣子なり。

師家の拈拄杖、竪拂子、揚眉瞬目等は是弄精魂の作用なり。

大悟より佛祖かならず恁麽現成する參學を究竟すといへども、大悟の渾悟を佛祖とせるにはあらず、佛祖の渾佛祖を渾大悟なりとにはあらざるなり、佛祖は大悟の邊際を跳出し、大悟は佛祖より向上に跳出する面目なり

【聞解】　大悟より佛祖は恁麽如レ是弄ニ泥團一行履を現成する參學を究竟とするといへども、大悟の渾とはまろりと全たい悟りで、全體の佛祖とはせぬ、なぜには、佛祖は大悟の邊際を超脫し、此中の無悟、何處著レ迷と云ふが、佛祖の渾全なる堺なり○故に佛祖の眞箇に渾佛祖なるは、渾大悟を要とせず、大悟の眞實大悟底なるは、佛祖を要せぬ、目は横鼻は竪て○大悟は佛邊祖邊を跳出した向上の面目なり。

【私記】　とは　大悟にあらざれは、弄精魂等の道理を得るによしなきをもて、大悟よりかならず恁麽現成する參學を究竟すといへども、と、いへり、參本いはく、恁麽現成者、弄精魂等、不染汚三昧是也と」是なり、混は混同の義にて、大悟の混悟とは、大悟と佛祖の混同し合體する、すがたをしばらく混とはいへるなり、鉢盂に混せ佛などとあるとはおなじからざるなり、ただ大悟の至極佛祖の至極を混大悟混佛祖といへるものなり、これは、佛祖と大悟の人法をこねあはせまじきことといへる語勢なり、影室いはく、大悟の混悟を佛祖とせるにはあらず、佛祖の混佛祖を混大悟なりとにはあらずとは、ただ大悟は大悟、佛祖は佛祖にてあるべし、大悟より佛祖は現成すと、ひきしろひでいはずとも、ありなむといふ義なり、と」みるべし、その人法脫洒のすがたを佛祖は大悟の邊際を跳出し、大悟は佛祖より向上に跳出する面目なりと結せらるゝなり」

【御抄】　大悟より佛祖の現成する事は勿論也、しかれども大悟の渾悟を佛祖とせるにはあらず、佛祖の渾佛祖渾大悟なりとにはあらずとは、たゞ大悟は大悟、佛祖は佛祖にてあるべし、必大悟より、佛祖は現成すとひきしろいて云はずともありなむと云義也、是則一方を證すれば、一方はくらき義歟。

佛祖の大悟なる條不及子細、然而佛祖は大悟也と云事をしばらく云はじ、佛祖は佛祖の大悟は大悟にて置むの一とをりの義也、佛祖の談の時も、衆生是衆生、佛性是佛性と云しだけなり。

【辨註】　辨曰、渾は渾然の義無圭角也、韻會圓貌又全也、今玆に言は大悟の渾然とまどかなる渾大悟

△辨、那、ば下下割云、是儒家ノ生而知ノ語ヲカルト云ヘドモ意旨ハ別ナリ

△辨、學下割云、シ修行

△那、し下割云、修行シ

△辨、す下割云、學ト云ヒ修行スト

△那、る下割云、修行スト

を渾佛祖とせるにはあらず、又佛祖の渾然たる渾佛祖を渾大悟なりとせるにはあらずとなり。

【那一寶】　此章の宗旨は唯大悟の邊際にも、佛祖位中にも曾て滯礙なきことを示誨し玉ふなり○渾は韻會圓貌、又全也、然れば全體と云ふほどの義なり。

しかあるに人根に多般あり、いはく生知、これは生じて生を透脫するなり、いはゆるは生の初中後際に體究なり

【聞解】　しかあるに……生じて生を透脫するは、生の初中後際を究め盡すこれを生れながらの知とす。

【私記】　とは　體究は、究の重言なり、これ生の獨立なり、初中後みな生なるを生の初中後際に體究なりと、いへり」

【御抄】　此人根に多般ありと云は、生知佛知者、學知無師知等をさすなり、生じて生を透脫すとは全機の生の事也、ゆへに生の初中後際に體究也と云なり。

【辨註】　辨曰、生の初中後際に體究し知る生生の知、皆一生一念の知にして別生知にあらず、例如一念成佛、無量劫只是一念の成佛なり。

いはく學而知、これは學して自己を究竟す、いはゆるは學の皮肉骨髓を體究するなり

【聞解】　學而知……佛道では三學より、八萬の法門を學す、走して自己を空竟するには、八萬四千の法門の學の、全體骨髓を究め盡すなり。

【私記】　とは　これ學の超越なり、ゆゑに自己を究竟すといへり、外なきを自己といへり、生死去來

云ヒ學ト云フ

△辨、那、ず下割云、非ノ謂ニ徒ニ待レ悟底學

△辨、り下割云、非ニ徒ニ坐罪待レ悟底學

△辨、那、佗下割云、知

△辨、那、の下割云、邊

△辨、に下割云、於テ

△辨、那、拘下割云、滯

△辨、に下割云、モ

△辨、自下割云、己

△辨、那、ず下割云、顯生ノ鼻孔ニシテ

△辨、那、互下割云、轉換

あに自己にあらざらんや、皮肉骨髓ことごとく學なるを學の皮肉骨髓を體究するなりといへり」

【御抄】　是は學して知となり、此學も盡十方界の上の學なり、故學の皮肉骨髓を體究すと云也。

いはく佛知者あり、これは生知にあらず、學知にあらず、自佗の際を超越して、遮裏に無端なり、自佗知に無拘なり

【聞解】　佛知者あり……人根多般ある中には、四佛知見あり、これは生知にあらず○學知に非ず自知他知の邊際を超越して遮裡人々の脚跟下に無裡端なり、自他知に拘束せず。

【私記】　とは　佛知は深固幽遠なれば、自佗の測度およばざれば、無端なり、無拘なり」

【御抄】　これ生知學知にあらず、遮裏に無端也、自他知に無端也、如文。

いはく無師知者あり、善知識によらず、經卷によらず、性によらず、相によらず、自を撥轉せず、佗を回互せざれども、露堂堂なり

【聞解】　いはく……その上に無師知あり、これは一切によらず、自己を撥轉して向へうつすで無い、又他を此方へ回互し、入れ、違へるでなし、四句を離れ、百非を絶した境界、つれものなしに、露堂堂あらはれて、のつしりと、けだかい、見る儘聞く儘にあらはるゝなり。

【私記】　とは　善知識經卷性相、自他、ことごとく露堂堂なり、ゆゑによらず、よらず等といへり、已上の四知ともに大悟の全皮渾髓なり」

【御抄】　無師知者とあれば、善知識にも、經卷にもよらずとあり、然而專經卷知識に隨を如此云也、其故は經卷を自已と不知のゆへに、隨はあしく、自さとるを解脫とす、今は經卷これ自己なる道理を

△辨、那、も下割云、見マヽ、聞クマヽ、一切處無量碍ニシテ

△辨、那、般下割云、ノ中

△辨、なり下割云、一ツ二ツト云數ニカギラズ、只此中ノ一ツヲ以テ知ヲ利トシ、二ツヲ以テ知ヲ鈍トスルニアラズ

參學するうへは、したがはぬ道理あきらけし、ゆへに如此云なり、露堂堂と魏々堂々なむど云程の詞也、うるはしく、たゞしき義歟。

これらの數般、ひとつを利と認じ、ふたつを鈍と認ぜざるなり、多般ともに多般の功業を現成するなり

【聞解】 これらの數般……上に云ふ通りでは、かづ〳〵品が分れて、上下がある樣なれども、この中をひとつを取て利根と見定めるで無く、二つをとり、これは鈍根と認ずることでなし、二つを取るとは、二つめをとると云心で、一つを取てあとはみな鈍とすることでないと云ふこと○なぜかう云ふなれば、多般ともにどれもどれも生智の功動作業あり、無師知は無師知の功業ありて、大道あらはれて綿密にすき間無い道理。

【私記】 とは　利鈍ともに取捨にわたらざる宗旨なり、ゆゑに多般ともに多般の功業を現成するなりといへり、いづれも一騎當千なり」

【御抄】 利鈍の二をたつるに、學而知は鈍、生知佛知者無師知等は利にあつ、この大悟の道理の上は、利鈍の取捨する事なかれと云也、數般とは上の生知學知無師知等をさすなり、多般ともに多般の功業を現成するとは、この數般の一つに多般の功あるべしと云心地なり。

【辨註】 辨曰、生知學知俱是一自心本具の諸知にして、別心異知にあらず、假令劫劫生生億億思想あるも、第二念なきことを知れ、一多を論ずべからず。

【那一實】 生の初中後際學の皮肉骨髓を體究し、知る處の生知學知俱是一自心本具の諸知にして、生生一生別心異知あることなし、假令劫々生々億々の思想あるも無第二念ことを知るべし、不可論一多、暫く利鈍を云ふといへども利鈍を認ずるに非ず、一とつ二たつと云つて數の論に非ず、一を利とし一を鈍とせず、多般ともに多般の功業を現成するなり○邊際字俱舍智品邊際定釋曰、增至究竟故名邊際如說涅槃名爲實際顯極義也。

△辨、情下割云、情性動處無情不動之處非曰草木土石等

△辨、し下割云、悟ノ字ハ備一自心ノ本覺ヲサス△那、割云、悟

しかあればいづれの情無情か生知にあらざらんと參學すべし、生知あれば生悟あり、生證明あり、生修行あり

【聞解】 しかあれば……多般に多般の功業あり、故に何の情無情か生知にあらざらん、生知の不具無し、生知あれば生悟の不從經卷知識生にして得悟するなり、又生にして證契發明するもある、生修行もあり、こゝを華嚴には、我觀一切衆生普具如來智慧德相と說くなり。

【私記】 とは　これ生知の究盡なり、ゆゑにいづれの情非情か生知にあらざらんと參學すべしといへり、生悟あり生證明あり等、これ究盡の語づかひなり」

【御抄】 生知と云へば、生れつきより物をしると心得たり、今の生知其義にあらず、全機の生なるがゆへに生知の上に、生悟も生證明も生修行も、無盡の詞あるべし、學而知の上には學悟學證明學修行乃至佛知者の上には佛悟、佛證明、佛修行等、面々此道理あるべき也。

しかあれば佛祖、すでに調御丈夫なる、これを生悟と稱しきたれり、悟を拈來せる生なるがゆゑにかくのごとし。參飽大悟する生悟なるべし、拈悟の學なるゆゑにかくのごとし

【聞解】 しかあれば佛祖すでに……上に云ふ大道功業ある、佛々祖々は已にもはや　化他門の調御師

トハ汝ガ自身ノ本覺ヲサスナリ

で一切衆生を利鈍相應に使ふて、三根應じて法を知らしむ、又自覺して、佛性あることを知る丈夫なり、自己の丈夫を覺知し、化他の調御を覺悟して、覺行圓滿なるを、生悟と云、本より迷はぬと知覺するなり○悟を拈來せる……今日の境界は、本證の妙修で迷はぬ本覺を拈來せる故に如レ是○飽參……一切の經知識に參飽して大悟する生悟なり、手前に生知なければ、誰に參じても悟ることはあらぬ○或師說一念迷はぬこの處をとつくりと參學するを、飽參と云、必ず甚大久遠を歷たことゝ思ふな○拈悟の……今日の參學は、本證の悟を拈來せる妙修なる故に經卷知識によるも生悟なり。

【私記】　とは　影室いはく、佛祖の功德をとりあつめたる、是を生悟といふと、是なり、生も學も悟も拈來せるをもてしかなり、かくのごとし、かくのごしとは、皆上の句をことはる語勢なり、餘義しるべし」

【御抄】　佛祖の功德を取あつめたる是を生悟と云、人の思たる生知の道理には非ず、此生は實にも悟を拈來せる生也、是全機の生也、參飽大悟とあり、生つきの知とは難云、參學の姿を大悟する生悟なるべしとなり。

しかあればすなはち三界を拈じて大悟す、百艸を拈じて大悟す、四大を拈じて大悟す、佛祖を拈じて大悟す、公案を拈じて大悟す、みなともに大悟を拈來して、さらに大悟するなり、その正當恁麼時は而今なり

【聞解】　三界を拈じて……これから廣くおほせらる、佛の三界の詮議しめさるゝをきいて悟もあり、百草萬法を拈じて明々百草頭を祖意として大悟するもあり○四大を拈じて朝より暮至る、三千八百汝が自心活潑々なり、なんでも是は爲ると、これは爲ぬことゝ嫌ふものはなし、何でも拈來して見よ、一つも不是なるものはない、佛祖を拈じての我今盧舍那と拈來して本より不迷と拈ずるなり、公案を拈じて柏樹子麻三斤等を拈じて悟るあり、みなこれ手前の大悟を拈じて大悟するなり、外のもので無い、玉の玉を照す如しとの道より、分け上りても同じ雲井の月を見る道理で、悟りの月を見るは同一なり○その正當……其拈悟し、大悟するは正當は、而今なり、今日此刻にある餘所見するなよ、辨道話に今日を始めと思はんやとある意なり。

【私記】　とは　大悟にあらざる三界なく、百草なければ、大悟を拈來して、さらに大悟するなりといへり、しかあるがゆゑに、正當恁麼時といへり、ここをもて而今なり、而今これ正當恁麼時なるがゆゑに」

【御抄】　三界を拈じて大悟す、乃至百草四大佛祖等をへぬしとして、是より大悟がつたはりて發明するやうに心得ぬべし、非其義に三界則大悟也、百草則大悟也、乃至四大佛祖等、皆是大悟也、ゆへに如此云也、又公按を拈じて、大悟す、皆共大悟を拈來して、さらに大悟する也とあり、而近來の禪僧と稱する族ら、只公按を額に懸て疑ひたればさとり來と、多分云歟、今の義には違せり、不可の用義也、公按を拈ずる義、大悟を拈來して、大悟する道理なり。

是は大悟を而今とは指なり。

【辨註】　辨曰、此而今なりの語を實參盡せよ、汝が自心の而今にして別時にあらざるなり。

【那一寶】　無情に生知あるべからずと思ふは心境對待の情見なり、佛祖は不二に體達す、故にいづれの情無情か生知にあらざらんと可レ二參學一となり、百草を拈じて大悟す、四大を拈じて大悟すと云ふも同意なり、盡十方世界無外の大悟なる故に、大悟を拈來して更に大悟するなり、その正當恁麼時は而今

△辨、那、脈ヲ條ニ作ル是脳本作レ足
△辨、己下割云、ノ△那、割云、ノ活
△辨、那、リ下割云、此語著眼看セヨ、シカアルエエニ
△辨、裏下割云、自己ノ眼睛裏△那、割云、眼睛裏
△辨、リ下割云、健處ニ求ムベカラズ眼睛裏ニ樂寬セ
△辨、那、昨下割云、セ
△辨、那、今下割云、ノ
△辨、自ヲ他ニ作リ、其下割云、異本作レ自寫誤ナリ
△辨、ず下割云、乃至
△辨、のヲに作ル

なりとは親しく自己に結歸するなり、此而今なりの語を實に參盡せよ、自心の而今にして非二別時一也。

臨濟院慧照大師云、大唐國裏、覔一人不悟者難得

【聞解】臨濟院……覔二一人不悟者一難レ得とは、甚大久遠迷はぬ、皆大悟を拈來せる境界なり。

【私記】とは　參本いはく、此一則者、單刀直入と」覔一人不悟者、難得は、大唐國裡なり」

いま慧照大師の道取するところ、正脈しきたれる皮肉骨髓なり、不是あるべからず、大唐國裏といふは、自己眼睛裏なり、盡界にかかはれず、塵刹にとどまらず

【聞解】慧照大師の道取は達磨の皮肉より正傳し來れるなり、故に達磨の皮肉が死肉にならず、今日に至り暖なり、故この道取は不是なし、大唐國裏と云は遠いことでもない、餘所見するな手前の眼睛裏のことじや、盡十方界自己の眼睛裏なる故に、眼睛裏とは何れの處ぞ、盡十方界に不レ拘と云ひ、又廣いと計り思ふな、塵刹にもとどまらぬぞ。

【私記】とは　自己眼睛裡は、面前なるか、背後なるか、さらに前後にあまれる一處あるか、まことに方所あるべからず、ゆゑに盡界にかかはれず、塵刹にはとどまらずといへり、正脈し來れる皮肉骨髓なり、不是あるべからずとは、許可するなり」

【御抄】是は慧照大師の詞を被讃なり。

遮裏に不悟者の一人をもとむるに難得なり、自己の昨自己も不悟者にあらず、佗己の今自己も不悟者にあらず、山人水人の古今もとめて不悟を要するに

いまだえざるべし、學人かくのごとく臨濟の道を參學せん、虛度光陰なるべからず

【聞解】遮裏……この眼睛裏には不悟者一人もなし、なぜに本より不迷、故に、不レ悟、故に不レ迷、迷悟超えたものなり○自己の昨自己も……昨の自己は昨……不悟者にあらず、今自己は今の不悟者にあらず、他己も向じや、昨今自他を互顯して云ふ○昨といへば、人々迷ふと思ふて居るが、走でなし、故に山人の樵夫も水に住む漁者でも、古今に一人も不悟者なし、學人如レ是臨濟の道取を合點せば參學を空くせず、光陰を虛く度らぬなり。

【私記】とは　影室いはく、自己の昨自己も不悟者にあらず、他己の今自己も不悟者にあらずと云は、自己も、他己も、昨も今も、皆悟なり、不悟者一人も不レ可レ有と、しかあれば、山人水人の古今も、またしかあるべし、かくのごとく參學せん、まことに光陰むなしくわたらざるの鐵漢なるべし」

【御抄】大唐國裏と云へば、打任ては唐土の內に一人も不悟者をもとむるに難得也と云へば皆悟たるもの許ありと聞たり、大方も此詞おぼつかなし、爭大唐國中に皆得法悟道の物許あるべきと、難心得、而如御釋者、自己眼睛裏を以て、大唐國とは可心得、然者實に盡界にかゝはらず、塵刹にとどまらざるべき道理必然なり、自己の昨自己も不悟者にあらず、他己の今自己も不悟者にあらずと云は、自己も他己も、昨も今も皆悟なり、不悟者一人も不可有、又山人水人の山水の詞は不用也、只一人の不悟者をもとむるに、難得也とある詞の、人の詞をとらむ料にいできたる、山水也と可心得。

【辨註】辨曰、臨濟の所謂不悟者とは三目か八臂か是何物ぞ、大唐國裡は且置、盡世界に有べきか、

△辨、那、惱。難ヲ德業ニ作ル、其下割云、繁辭上傳云、可久則賢人之德、可大則賢人之業

△抄、し下割云、是ハ方丈ノ御割也

有べからざるか、大唐國裡覔不迷人難得亦復爾、不悟者不迷者畢竟是阿誰、工夫參究せよ、只不迷者佛祖なり、不悟者衆生なりと思ふは愚昧の妄見なり、須知不悟故不迷不迷故不悟、尙以下公案參究之。

【那一寶】 臨濟の所謂不悟者とは三目か八臂か、是何物ぞ、大唐國裡は且置、盡世界に有べきか有べからざるか、覔其不迷人難得亦復爾、不悟者不迷者畢竟是阿誰、功夫參究せよ、但不迷者は佛祖なり、不悟者は衆生なりと思ふは愚昧の情見なり、須知不悟故不迷不迷故不悟、尙以下公案參究之。

しかもかくのごとくなりといへども、さらに祖宗の懷業を參學すべし

【私記】 とは 參本いはく、懷業一本改作德業、未知諸經要集中有懷業兩字者耳、彼等十九卷祭祠緣下頌云、高堂信逆旅、懷業理常牽、云云、往檢、謂、懷抱道業省略語耳、これ諸經要集を引證すといへども適從しがたし、按ずるに、懷業理常に牽とは、業感ののがれがたきをいふならん、予おもへらく、懷業はなほ意業のごとし、ただ祖宗のおぼしめしといへる語ならん、懷は懷抱の懷なり、祖宗深密の意旨をいふ」

【御抄】 是は無別子細、祖師の如本意可參學と也。

いはく、しばらく臨濟に問すべし。不悟者難得のみをしりて、悟者難得をしらずば、未足爲是なり、不悟者難得をも參究せるといひがたし、たとひ一人の不悟者をもとむるには難得なりとも、半人の不悟者ありて面目雍容巍巍堂堂なる、相見しきたるやいまだしや

【聞解】 かうはかうなれども臨濟ただ不悟者難得の悟つた方計りにかた落ちて、悟者難得を知らず、本より不迷なる故に、悟者も難得なり、これを臨濟は、こゝをいはぬ、不悟者難得の故に、不迷者も難得、臨濟と表裏にして一枚也、迷悟を論せば十萬八千、悟りとは何を云ふぞ悟るべきなきを知るのみ、これで公案が圓になる、臨濟の時は悟者計りにかたつく、今不悟者難得で、そこを轉破した○或說に不悟不迷と云つて、定性は無い佛性にも定法は無いぞ、故に五祖も嶺南人無佛性といはれた、法にも定法は無い、佛は一切衆生悉有佛性とおほせられた○半人不悟者あり……此に半人の不悟者あり、面目やはらかに、堂々と氣高く、のつしりとして居る、是は不迷者の故に、不悟者なり、臨濟はこの人に相見するや。

【私記】 とは 參本いはく、半人不悟者者、亦如是面孔乎、と」是なり、これ悟者難得、不悟者難得、ともに克家之子なれば、知不知の兩頭も、あにそれ截流之義にあらざらんや、悟者不悟者、一人半人、盛大尊高の面目なれば、相見しきたるやいまだしや、と、いへるなり」

【御抄】 是は臨濟を被不審御詞也、不悟者難得の詞許を知て、悟者難得をしらずば、未足爲是也と、被嫌なり、悟者難得の道理あるべくは、不悟者難得の理も、今すこしつよく親切なるべしとなり、悟者難得不悟者難得は、會不會程の理也。

一人の不悟者と云に付て、半人と云詞は、出きたり、餘に委被釋之時、半人の不悟者と云道理も出くるなり、是は半人と云へば、半なる人があるべきに非ず、今は一人を半人と心得、乃至悟者を半人とも可心得、かゝる半人の不悟者ありて、面目嶷々堂々なるをば慧照大師は相見するか、未だしきかと被不審也、是等はいかさまにも詞ごとに、臨濟の詞を被疑ゆるされざる心地歟。

【辨註】 辨曰、不悟者難得なれば悟者亦難得、不迷者難得なれば迷者亦難得、諸人者若此悟者不悟者、

迷者不迷者語を依文解義せば十萬八千ならん、當ㇾ知悟者於ㇾ無ニ法之可ㇾ悟而悟ニ無ㇾ可ㇾ迷之法一、是故悟者難得、迷者於ㇾ無ニ法之可ㇾ迷、而迷ニ無ㇾ可ㇾ悟之法一、是故迷者難得、悟者不悟者、迷者不迷者、須ㇾ了ㇾ有ニ語脈裡轉身一。

辨曰、臨濟所ㇾ謂覓ニ一人不悟者一難ㇾ得、且問、不悟者不迷者俱求而可ㇾ得乎、檢點看、不ㇾ悟者は誰そ、不ㇾ迷者は誰そ、不ㇾ悟者なり、何故不ㇾ悟故不ㇾ迷なり、不ㇾ了ニ此道理一則此段意旨不ㇾ可ニ曉得一、若又不悟者不迷者の定性あらば佛法にはあらず、故に臨濟を點檢して學人參學の方路を示し玉ふ、徹困の慈悲なり、不具眼類不ㇾ知ニ此義一、謂ニ古佛故抑ニ下臨濟一、痛哉正法眼藏中如ㇾ此慈敎頗多矣、莫ㇾ將ニ井蛙見一擬ㇾ佛祖大海ㇾ好。

【那一寶】　不悟者難得なれば悟者亦難得、不迷者難得なれば迷者亦難得、若此悟者、不悟者迷者不迷者の語を依文解義せば十萬八千ならん、當ㇾ知悟者於ㇾ無ニ法之可ㇾ悟、而悟ニ無ㇾ可ㇾ迷之法一、是故悟者難得、迷者於ㇾ無ニ法之可ㇾ迷、而迷ニ無ㇾ可ㇾ悟之法一、是故迷者難得、是以悟者不悟者、迷者不迷者、須ㇾ了ㇾ有ニ語脈裡轉身一。

且問、不悟者不迷者、俱求而可ㇾ得乎、不ㇾ可ㇾ得乎、檢點看、不ㇾ悟者は誰そ、不ㇾ迷者なり、何故、不ㇾ迷故不ㇾ悟なり、不ㇾ迷者は誰そ、不ㇾ悟者なり、何故不ㇾ悟故不ㇾ迷なり、不ㇾ了ニ此道理一則此段意旨不ㇾ可ニ曉得一、若又不悟者不迷者の定性あらば佛法には非ず、故に臨濟を點檢して學人參學方路を示し玉ふ、徹困の慈悲なり、不具眼類不ㇾ知ニ此義一、謂ニ古佛故抑ニ下臨濟一、莫ㇾ將ニ井蛙見一擬ㇾ佛祖大海ㇾ好。

たとひ大唐國裏に一人の不悟者をもとむるに難得なるを究竟とすることなかれ、一人半人のなかに兩三箇の大唐國をもとめこころみるべし、難得なり

△詩、べし下制云、不ㇾ然則縱臨濟不ㇾ可ㇾ那ニ其人一也古佛明師正好著ㇾ眼ㇾ

黒本無ニ難得なり・や難得にあらずや二句一

や、難得にあらずや、この眼目をそなへんとき參飽の佛祖なりとゆるすべし。

【聞解】　この半人不悟者に相見せねば究竟とはせぬ、なぜには○一人半人の中に……この一人半人なる中に、兩三箇の大唐なる眼睛裏には、悟者不悟者と云ふ迷悟は著けぬ、此迷悟を超えた眼睛を開く時、參飽の佛祖なりとゆるす、こゝに或師說に、汝等が目玉はどこに在るぞ、三千世界を求めてみよ、どこらに在る、苦々しきこと、鼻上に在れどもあきらめくらじや、故に見ることがならぬ、目あいて見やれ。

【私記】　とは　たとひ大唐國裡に一人の不悟者をもとむるに難得なりとも、これのみを究竟とすることなかれとなり、語勢すこしく見がたし、一人半人を擧して大唐國を參究せしむる人境通融の道理しるべし、難得なりや、難得にあらずやとは、參本いはく、謝答話と、是なり」

【御抄】　是は臨濟の詞の、大唐國裏に覓一人不悟者難得也の詞を、是許は究竟とする事なかれ一人半人の中に兩三箇の大唐國を覓、心見るべしと云道理もありと也、臨濟は大唐國裡に一人の不悟者を覓るに難得也とあり、方丈の御詞には一人半人の中に、兩三箇の大唐國を覓べしとあり、水火の詞と聞えたり、大唐國と云へば、猶住所と聞えたり、兩三箇の大唐國を一人半人の中に覓め、心みよとあれば、悟不悟の道理もあらはれ、大唐國と一人とのあはひも被解脫、日來の舊見は破なり、佛法は如此親切に談せねば、見解の樣もきこえず、いかにも親切なる理があらはれぬなり。

是は臨濟を被不審御詞なり、六祖已下の祖師等の詞を擧て、其道理のひゃく所を、方丈取てさま〳〵詞を付て被釋之、是は彼祖師等の理のなきにはあらず、彼詞のあまれる所を被釋事多し、然者此臨濟の詞も、如此心得ば何不是あるべき、其上不足あるべからず正脈し來なむど被許上は、彌此道理必然なるべきを、臨濟の詞、いかなる子細の有やらむ、方丈不被許之、仍所々に臨濟德山の非所及と被遙

之間、こゝの御釋も暫許さるゝ面はあれども、いかにも有子細と可心得なり、隨奥御詞にも此眼目そなえむとき參飽佛祖也とゆるすべし、なむどうけられたる也。

【辨註】 辨曰、大唐國裡に一人の不悟者を求むる尙難得、況や一人半人の中に兩三箇の大唐國を求めんは最も難からずや、老僧更道、一人半人の中に一箇の大唐國を求むるに尙不可得、況や兩三箇の大唐國を三千世界の中に求とも可ㇾ得者ならんや、如ニ前在一、大唐國裡は眼睛裡なり、大唐國內に一人の不悟者を求るに難得なるは且置、汝近く今日自己の眼睛を盡界盡地に求むとも得べけんや、此道理を辨取せよ、凡如ㇾ是公案商量、從上來之祖師亦所ㇾ未ニ嘗說破一也。

【那一實】 大唐國裡竟ニ一人不悟者一尙難ㇾ得、況や一人半人中求ニ兩三箇大唐國一最不ㇾ難、更道一人半人中求ニ一箇大唐國一、尙不ㇾ可ㇾ得、況や爾三箇の大唐國を三千世界の中に求とも可ㇾ得者ならんや、前所ㇾ謂大唐國裡は眼睛裡なり、大唐國內に一人の不悟者を求るに難得なるは且置、汝卽今自己の眼睛を盡十方界に求とも得べけんや、此道理を辨取せよ、凡如ㇾ是公案商量、從上來之祖師亦所ㇾ未ニ嘗說破一也。

若不ㇾ然則縱臨濟不ㇾ可ㇾ稱ニ其人一也、如ㇾ是示誨正好著ㇾ眼。

京兆華嚴寺寶智太師嗣洞山諱休靜因僧問、大悟底人却迷時如何、師曰、破鏡不ニ重照一、落華難ㇾ上ㇾ樹　いまの問處は、問處なりといへども示衆のごとし、華嚴の會にあらざれば開演せず、洞山の嫡子にあらざれば、加被すべからず、まことにこれ參飽佛祖の方席なるべし

△抄、辨、那、師下割云、嗣洞山、諱休靜、幕本云樹、長本作ㇾ枝

△辨、那、樹ヲ枝ニ作リ、其下割云、傳燈作ㇾ大悟人爲ニ甚麼一都迷ㇾ甚不可也

△辨、那、ば下割云、如是ノ問處

△辨、那、れば下割云、如是ノ答處

△辨、那、す下割云、問處答處弄ニ尋常一也

【聞解】 京兆……大悟底人却迷時如何……大悟は金剛般若の智劍、これを持て居れば、入頭の邊量で手を切り足を切る、故に其刀を鞘におさめるを却迷時と云ふ○師云破鏡……大悟底の人は、破鏡の重て不ㇾ照如く、一たび悟てからは迷はぬと云ふことゝ、世間で云ふけれども、左にあらざるなり、落花も世界では不迷の義に取るけれども左にあらず、破鏡と云は、却迷の時節を答るなり、これは靈雲勤禪師、混沌未分話に、如何是眞常流注、師云似ニ鏡長明一、進云向上還有ㇾ事也無、師云有、僧云如何是向上事、師云打ニ破鏡一來與ㇾ汝相見とある、この意で、今の破鏡不重照の句を見るべし、鏡の長明を持て居る間は、是非とも一びは曇る、故に打破せねばならぬ、大悟も持て居てはならぬから却迷せねばならぬ○落花難ㇾ上ㇾ枝、これは古人の示衆に、大事未ㇾ明如ㇾ喪ニ考妣一、大事既明も如ㇾ喪ニ考妣一とあるを、會元六に、鳳翔府、齊峯傳楚禪師、僧問大事已明爲ニ甚麼一如ㇾ喪ニ考妣一、師云不ㇾ得ニ春風一花不ㇾ開、及ㇾ至ニ花開一又吹落と、この意で見るべし○示衆の如しは、師家の言葉の如し、華嚴休靜の會下は、師が善なれば、集る賓も善なり、故に如ㇾ是開演あり、洞山の子で無くては、かうした法力の加被することはない。

【私記】 とは　加被は、上より下にかふぶるなり、方席は、參本いはく、方席者、猶ㇾ言ニ公界道場一也、と」

【御抄】 先今の大悟底人却迷時如何の詞不審也、大悟の人の又迷事爭か、さる事あるべき、不可有盡期、還作衆生の者ありやと、敎に談ずる事あるか、是は此義あるべからず、但今の大悟却迷の詞、これは遮は現成公按に、諸法佛法の時節に迷あり悟ありと云ふ、近は今の草子のはじめに、大悟現成し、不悟至道し、省悟弄悟し、失悟放行すとあり、此道理をわするゝ時、此迷悟の詞に迷なり、始て非可

△鉢、ず下割云、外ニ大悟ヲ蓄ヘテ卻迷ヲ造作スルニアラズ餘外トハ台教所謂入重玄門ノ菩薩化衆生ノ爲ニ且ク悟ヲ餘外ニ蓄クワエテ輪回道ニ迷ヲ同ウスル類ヲ大悟卻迷ト云ニアラズトナリ

△鉢、邪、見。下割云、シ大悟

△鉢、邪、ら。ず下割云、公界トハ聖界不曾藏ノ處ナリ

△鉢、邪、ず。下割云、更ニ大悟却迷アルナリ

△鉢、邪、鉢。下割云、ヲ養フ

△鉢、邪、て。下割云、迷ヲトナリテ聖胎長養ノ工夫ヲナスナド、迷ヲヲコシラヘテ

△鉢、ず下割云、迷字ナラ

驚、故に今の問所は示衆の如しとあるなり、大悟與迷の道理を示衆するなりと可心得●百千破鏡不重照事、一度の破鏡も百千の破鏡と何事か有相違乎、大悟底人却迷事と有返答なれば破鏡不重照と云、時に大悟底人は又迷事あるまじき答歟と覺る所に不然、大悟底人又迷不迷の事を答するに非ず、破たる鏡もたゝわれと一をあげ、落花難上樹もわれ一の事をいふ、さらにさとりの人も又迷は又迷になるといはぬごとく心得ぬる時に、今又百千破鏡不重照とある、甚不心得、然而百千破鏡とは盡界悉破鏡なる事をあかす詞也、破鏡と云ては盡界破鏡と可心得也（● 印ある三字原本に作る）

是は寶智大師を被讃御詞也。

いはゆる大悟底人は、もとより大悟なりとにはあらず、餘外に大悟してたくはふるにあらず。大悟は公界におけるを、末上の老年に相見するにあらず。自己より強爲して牽挽出來するにあらざれども、かならず大悟するなり、不迷なるを大悟とするにあらず。大悟の種艸のためにはじめて迷者とならんと擬すべきにもあらず

【聞解】 いはゆる……大悟の人は、本より天然自然に大悟と云ふで無く、又餘外に大悟をこしらへたくはへて置いて持てきたで無く、公界のおもて向きに悟て於てそれを末上の老年に持來たにも非ず○自己に強爲しむりに牽挽し引出すでも無いけれども、佛出世祖師西來より已來大悟と云ことあるなり○不迷者……不迷者斗りを大悟とするに非ず、手を離れて合點せよ○大悟の種草……一度悟て、山抔に入り、悟り熟して出て、人の爲にならんと、迷者と成て、悟りをしばらく長養すると擬するにも非ず。

【私記】 とは もとより大悟といはゝ、物なるべし、またよそに大悟してありしを、こなたへたくはへんといはゝ、これもまた物なるべし、また大悟は、公界のものにて、たやすくしるべきにあらざるを、わかきうちにはみざりけるを、老年にをよびてやうやうみたりといはゝ、これまたものなるべし、末上老年とは、なほ末後老年といはんがごとし、また自己よりなしがたきことをしひてなして、ひきいだし來りて大悟ならしむるといはゝこれまた物なり、かならず大悟するなりの句は、すべて上の四句にかゝるなり、上にいへるがごとくならばみなこれ物にして大悟にはあらざるなり、大悟は、まことに什麼物にて、一物にてはあらざるなり、こゝをもて一物まことに什麼物の宗をしるべし、後は大悟になさんとて、したごしらへのために迷とならんとせるにもあらず、こゝをもて大悟の種艸のためにはじめて迷者とならんと擬すべきにもあらずといへり、これみな情謂をはらふ語なり」

【御抄】 抑今の大悟の姿、何樣なるべきぞ、能々可思惟事也、大悟もとより大悟なりつる物を、大悟したるにてもなし、又外にありつる大悟を、今たくはふるにもあらず、又大悟はをほやけ物にてあるを、老年等有て相見するにもあらず、又自己より强爲してうる物にてなけれども、大悟する也と云は、所詮大悟人さらに大悟す、大迷人さらに大悟すと云義に落居するなり、大迷人大悟すの詞にてしりぬべし、迷悟不可各別條顯然にあきらけし。

【那一寶】 本より大悟とは敎乘の本覺など丶云の義、餘外とは台敎所謂入重玄門の菩薩、爲化衆生且く悟を餘外に蓄へをき、衆生輪回道の迷に同ずる類の大悟にも非ずと云の義なり、本文難上枝次下共に難上樹に作る本もあり。

大悟人さらに大悟す、大迷人さらに大悟す。大悟人あるがごとく、大悟佛あ

ン恐寫誤乎大悟ハ大悟人アリ御迷御迷人アリ△那、割云、悟字恐ハ迷字ナラン、寫誤セルカ、大悟ハ大悟人ナリ大迷ハ大迷人ナリ、悟字ニテモ非ズ不ル通

△辨、悟下、の字アリ、空以下十一字ナシ

△辨、那、リ下割云、是故ニ

△辨、那、は下割云、被讃落花ノ答話

り、大悟地水火風空あり、大悟露柱燈籠あり、いまは大悟底人と問取するなり

【聞解】 大悟人さらに……大悟も大迷もともに親切じや、取ることも、捨ることもない、法報應……大迷もあり、生死去來の大迷もあり、等妙二覺の大迷もあり○大悟人あるが如く人が大悟の人なれば、佛も大悟の佛なり、犬が大悟の犬なれば、猫も大悟の猫なり、故に人が大悟人なれば、五大の地水等も大悟なり、身心世界一枚なる故に、露柱もやはり世界の物で大悟人が用れば大悟なり。

【私記】 とは 大悟は、迷悟の區別なく、みな大悟なるをもて、大悟人さらに大悟す、大迷人さらに大悟すといへり、大悟人以下しるべし」

【御抄】 是は大悟人と云詞の如く、大悟の詞の下には、佛も地水火風空も、露柱燈籠も、萬物皆如此いはるゝ道理、あるべきなりと云也、此理なる故に、今は題大悟底人と、問取する也と云。

【辨註】 辨曰、老僧は道ん、大悟佛、大悟地水火風空、大悟露柱燈籠あるのみにあらず、大悟の地獄、大悟の畜生、大悟の餓鬼、大悟の外道、天魔あることを知るべし、而今汝們是を聞て悶絶躃地せんのみ。

【那一寶】 更に大悟佛、大悟地水火風空、大悟露柱燈籠あるのみに非ず、大悟地獄餓鬼畜生、大悟外道天魔あることを可知、而今恁麼に道を聞かは、多人悶絶躃地せんのみ。

大悟底人却迷時如何の問取まことに問取すべきを問取するなり、華嚴きらは、蓑席に慕古す、佛祖の勳業なるべきなり

アルヲ以テイマ

△辨、那、す下割云、ル公案トナルソ因レ之

△辨、なるヲかならふニ作リ、其下割云、ならふノ三字異本ニ作ニなるべきなり扁本作ニべし

△辨、那、は下割云、尋常

△辨、那、人下割云、ノ迷ヒ

△辨、底下の字アリ

△辨、那、人下割云、ノ

△辨、那、て下割云、其上ニ

△辨、那、に下割云、大悟

【聞解】 この僧は問取すべき道理を問取し來た故に、華嚴もきらはず、蓑席に慕古して、答ふべき道理を答られた○問も答も佛々祖々の大道功業なり。

【私記】 とは 影室いはく、是は無ニ別仔細ニ大悟底人の詞を被レ讃なりと、きらはずとは、すぐれたる義なり、なほさまたげずといはんがごとし、佛祖のなすべきわざなれば、佛祖の勳業なるべきなりといへり、勳業は、慕古蓑席をさすか、これ問答ともに讃せらるるなり」

【御抄】 是は無別子細、大悟底人の詞の被讃也。

しばらく功夫すべし、大悟底人の却迷は、不悟底人と一等なるべしや、大悟底人却迷の時節は、大悟を拈來して迷を造作するか佗那裏より迷を拈來して大悟を蓋覆して却迷するか、また大悟底人は一人にして大悟をやぶらずといへども、さらに却迷を參ずるか、また大悟底人の却迷といふは、さらに一枚の大悟を拈來するを却迷とするかと、かたがた參究すべきなり、また大悟也一隻手なり、却迷也一隻手なるか、いかやうにても大悟底人の却迷ありと、聽取するを、參來の究徹なりとしるべし、却迷を親曾ならしむる大悟ありとしるべきなり

【聞解】 不悟底人の尋常の迷者と一等なるか、又大悟を拈來して、迷を造作し、大悟が再び迷となるか、古人も迷レ悟非レ悟と云ふ○大悟を蓋ひかくして置いて、迷とするか○大悟の人は、一人にして、

ノ上ニナシ
△辨、那、なヲあるかいとニ作ル
△辨、那、な下割云、ハナメズ
△辨、拈下割云、シ
△辨、來下割云、テ執△那、割云、レテ執
△辨、那、か下割云、迷悟金剛ナラザルカ
△辨、那、る。な下割云、稍曾家
△辨、那、曾。下割云、曾同レ增

大悟を破らず、其儘でおいて、却迷をのせるか○大悟の上に更に一枚の大悟を拈來して迷とするか○かたかた究め盡してみよ、究盡すれば大悟も大迷も無い程に○大悟も一隻手却迷も一隻手大悟却迷で兩手完全の境界なり、故にいかやうにても、大悟底人却迷ありと知れるを、參學の究徹とするなり○却迷を親曾……今日の却迷を親切にならしむる、昔の大悟あり、大悟をしまふて、却迷の同未悟するが、親切の處なり、迷も悟も心、倒るも地、起るも地、大地に爰が起る地、爰が倒る地と二つはない、故に迷を憂る、はずもなく、悟を喜ぶこともなし、本と二つ物なき故に。

【私記】　とは　大悟底人の却迷はといふより、かたがたに參究すべきなりといふに至て、迷悟の偏頗なきをあかすなり、影室いはく、か、か、とある詞例の皆此道理共あるべき處を如レ此被述なり、と」大悟をやぶらずといへども、さらに却迷を參ずるかとは、大悟にきずをつげず、そつくりと、もちきたりて、却迷とするか、となり、大悟や、却迷や、ともに一隻手なり、影室いはく、互に勝劣なく、同じきことを云なり、と却迷は、大悟底人の却迷にして、さらに別の面孔にあらざれば、いかやうにても、大悟底人の却迷ありと聽取するを參來の究徹なりとしるべしといへり、聽取とは、ゆるす義なり、却迷を大悟の骨髓とするをもて却迷を親曾ならしむる大悟ありとしるべきなり、と、いへり」

【御抄】　打任は悟與迷、大に相違の法也、今の大悟底人却迷時如何の迷悟は相違の法にあらず、如今云大悟底人の却迷は、不悟底人と一等なるべしと可心得所を、如此云なり、又大悟をもて來て悟を造作するかと云は、迷與悟無差別物なるゆへに、大悟の道理を拈來して、迷を造作すと云義もあるべし、又他那裏より迷を拈來して大悟を蓋覆して却迷するかとは外より迷をもてきたりて、ある時は大悟はをほひかくされて、迷許にて、大悟はかくるゝかと云義もあるべし、迷を稱する時悟はかくると云べ

△辨、那、却迷ヲ大悟ニ作ル
△辨、迷下割云、異本作ニ却迷ニ寫誤也△那、割云、作却迷本アリ共通
△辨、リ下割云、是互換ノ語ゾ認子爲子大悟ナリ認賊爲賊却迷ナリ

し、又大悟底人は、一人にして、大悟をやぶらすと云へども、さらに却迷を參ずるかと云は、大悟は大悟に大悟をやぶらで、却迷と云歟とは、大悟も大悟にて、はたらかさでをき、却迷も却迷にて共にをかむと云心也、又大悟底人の却迷と云は、さらに一枚の大悟を拈來するを、却迷とするかと云は、大悟一枚をもてきたりて、今却迷とするかと云也、所詮無盡の詞多けれども、只迷與悟却非各別物、親切なる道理を裏面になして、如此被釋なり、か、か、とある詞例の皆此道理共あるべき所を、如此被述なり、是等の道理を、かたゞ可參究也とは云なり。

是は大悟も一隻手をいだし、却迷も一隻手をいだす、互に勝劣なく同じき事を云なり。

是は大悟底人と許云へばよき、大悟許を談じて、あしき却迷と云詞をば、よせつけじとしたるやうに覺ゆ、此條取捨善惡の法にかゝはるべし、佛祖の所談の迷悟の本意にあらず、大悟底人の道理の下にはかならず却迷の道理ある事をしるべし、其を親曾ならしむる大悟ありと可知なりとは云也、會不會、見不見、聞不聞の道理なるゆへなり、大唐國裏に一人不悟者を求むるに難得也と云て、悟者難得なる事をしらずと、ゆるされざるも此心地也。

しかあれば認賊爲子を却迷とするにあらず、認子爲賊を迷却とするにあらず、
大悟は認賊爲賊なるべし、却迷は認子爲子なり。多處添些子を大悟とす、少處減些子これ迷却なり

【聞解】　認レ賊爲レ子……六塵の賊を直に正覺とする大悟に非ず○迷と云て本覺本知の實子を、六塵の賊とあやまるに非ず○大悟は、認レ賊爲レ賊見そこなわぬ、賊は賊と慥に見る儘に見るなり、子は子と

見る儘に見て、不レ取不レ捨なり、却迷も其通りなり、賊子迷悟互顯の句法に見るべし○多き處……大悟と云は、物の多き處へ些子すこし計りを添へて、すこしも添へめは見へぬ、悟たとて物が餘るでもない、却迷も少き處へ少し減じた樣なもので、減目は見へぬ、迷つたとて缺る法でなし、多處少處は一枚虛空の喩で知れる、虛空は一致少い針の穴にも一杯、一致多い天地にも一杯、增しても減じても目には見へぬ。

【私記】　とは　認賊爲子、認子爲賊、これなりちがへたることなれば、却迷ならんと情謂すれども、しかにはあらざるなり、これは却迷の絕遮欄なれば、却迷とするにあらずといへるなり、絕遮のゆゑをもて、認賊爲賊なるべし、認子爲子なりといへり、ものみな不動著なれば、多處添、少處減、直至入場なり、嗚呼、希夷冲莫なるかな」

【御抄】　是は認賊爲子認子爲賊なむど云へば、猶各別に聞ゆ、認賊爲賊認子爲子なるべしとは、大悟與却迷のあはひ、認子爲子認賊爲賊ほどに可心得と云なり。

多所には物をそへ、少き所には物を減ずと云、多は多にてとをり、少は少にてはつる也、是を大悟却迷にあてたる也、是則大悟は大悟にて、盡法界、却迷は却迷にて盡法界義也、只一筋にてまじる物なき道理をあかさるゝ也。

【辨註】　辨曰、多處添二些子一添二這什麼一耶、少處減二些子一減二這什麼一耶、多處添二些子一而不レ見二其有一添之物一、少處減二些子一而不レ見二其有一減之物一、雖二然如一是箇々人々但見二錐頭利一、未レ知二鑿頭方一、多處添二些子一則彌多、少處減二些子一則彌少、是什麼物恁麼來、古佛雖レ有二如レ是明誨一、自心證據なき人は了達不レ得、老僧四十年來以二這話一試二驗學者一、終無二參透得者一、今時向レ稱二知識一人ょ參二請此公案一看、只恐眼目動定口似二匾擔一、大凡勘二檢師學一、無レ若二此公案一、或般は瞪レ目怒レ聲、或般は手脚忙亂作レ模作レ樣、或般は以著語云、紛かし人を惑弄して、他の問著を沙塞するもあり、若し著語にて通ずべくば賴に華嚴永平兩古佛の答話あり、誰か儞が閑語を要せん、夫著語は震旦尋常の說話にして、彼土の人は理義易レ通、於二和國人一爲レ語所レ隔、其理遠不レ達、只和國生得の和語を用ゆる時は無量の理義自在に道盡す、然吾國師學　動　以二異域言語一商量、點檢來皆是無眼子所爲也、請擇二出自己眼睛一、莫レ入二這般閑鬼隊一好。

【那一寶】　多處添二些子一添二這什麼一耶、添二些子一則彌多、少處減二些子一減二這什麼一耶、減二些子一則彌少、添而不レ見二其有一添之物一、減而不レ見二其有一減之物一、是什麼物恁麼來、宜二著レ眼看一、人々箇々但見二一利一、未レ知二二鈍一、迷悟者衲僧命根、向二什麼處一透得、不レ登レ山爭逢二猛虎一、入レ水便能見二長人一。

△那、定下割云、レ

しかあれば却迷者を摸著して、把定了に大悟底人に相逢すべし、而今の自己、これ却迷なるか、不迷なるか、檢點將來すべし、これを參見佛祖とす、

【聞解】　しかあれば……先づ却迷者を如何と模著して走して大悟底人に相逢してみょ第二人は無いぞ○而今……今日人々自己は迷か不迷か吟味して見よ。

【私記】　とは　把定了とは、すなはち把捉なり、却迷者にあはざれば、大悟底人喪身す、まことに出入同門に行李する、光陰莫虛度なるなり、迷不迷勞弃使棒なるをもて、檢點爲來といへるなり、檢點分明の義なり、しかあるがゆゑに參見佛祖なり、參見佛祖の正當時は吾我の邊際を離却するなり、汝是誰」

△樹、那、樹ヲ枝ニ作ル

【御抄】 是はたとへば却迷者の姿を取さだめて、大悟底人に相逢すべしとなり、却迷者與大悟底人相あはすべしと云は、大悟底人と却迷とが、同じたけなる所をあらはさむ詞なり。是も迷不迷同たけなる所を云なり。

【辨註】 辨曰、此段有ニ寫誤一乎義理叵レ通、如ニ老僧解一之則却迷者を模著し把定して、了了に大悟底の人に相逢すべしと有て宜也、決して是寫誤也、看者詳レ之。

辨曰、此話在ニ此篇一如レ此苦苦に提誨あり、又語錄の中にも擧揚し玉ふ、是參學の緊要なる故なり、今時の師學共に恁麼の道理、未ニ曾夢見一在、痛哉屬者或師稱ニ古佛廣錄一、搜ニ求眞實未判之書一、鏤ニ于梓一流ニ行于世一、借問一卷語錄約而太レ無ニ厭于汝參學一耶、十卷廣錄博而飽ニ不一飢于汝辨道一耶、一卷語錄置而不レ論、其中明ニ得此一則公案一、非ニ但一生參學事畢一、要傳燈一千七百則有ニ什麼難レ通處一、徒名聞彫僞の人情を以て、言句多きに矜誇するのみ、蓋し古佛の宗乘を明らめざることは毫も實參の志氣なき故なり、古佛大叢林小叢林の慈誨例知すべし、一言半句といへども一大藏敎中說不出なる妙旨あること あり、俱胝一指頭禪、一生受用不盡、所以圓明曰、寒時普天普地寒、熱時普天普地熱、當レ知宗門之事不レ因ニ言語一多寡一矣。

【那一寶】 模著し把定了にとは、却迷者とは何物なりと把定し了得する直下大悟底人相逢なるべし、却迷なるか、不迷なるか、檢點將來るべし、と苦々丁寧の親示誨、實々に可ニ徹證一。

師云、破鏡不重照、落華難上樹。

り、しかあるを未破鏡の時節にこころをつかはして、しかも破鏡のことばを

△樹、那、樹ヲ枝ニ作ル
△樹、那、ど

參學するは、不是なり

【開解】 破鏡正當……却迷の正當を道取せられたらん、しかあるを未破鏡の悟の處へ心をつかはして却迷しても、悟は持て居る、一たび悟れば重ねて迷ふことはないと云ふ言葉と參學するは不是なり。

【私記】 とは　正當恁麼時は、子丑も正當恁麼時なり、空劫今時も正當恁麼時なり、中邊もまたしかり、しかあれば、未破鏡もままだぬかれず、正當恁麼時の究盡なるなり、文處しるべし」

【御抄】 破鏡と云詞に付てはいかにも、未破鏡の時節を、心に懸るなり、是示衆は、全破鏡の正當恁麼時を、道取するを、未破鏡の時節を心にかけて、しかも破鏡の詞を、參學するは不是也と被嫌なり。

【辨註】 辨曰、破鏡の正當恁麼の時を道取するとは、是大悟卻迷底の時節なり、這箇時節十二時の外にあるにあらず、しかあるを師學未破鏡未落花の時節に心をつかわして、此の破鏡落花の詞を參學せんは、いすかの鵤すりちがふたことぞ、破鏡のことは靈雲混沌未分の商量をも尋るべし、如レ此言句無ニ眞參志氣一者不レ可レ通也、且く破鏡の時節と未破鏡の時節とを參究せよ。

【那一寶】 破鏡の正當恁麼時を道取するとは是大悟却迷底の時節なり、這箇の時節十二時の外にあるに非ず、しかあるを未破鏡未落花の時節に心をつかはして、破鏡落花の詞を參學するはいすかの鵤すりちがふたことぞ、如レ此言句無ニ實參志氣一者不レ可レ通也、且く破鏡の時節と未破鏡の時節とを參究せよ、破鏡のこと靈雲混沌未分商量、併照看せよ。

いま華嚴道の破鏡不重照、落華難上樹の宗旨は、大悟底人不重照といひ、大悟底人難上樹といひて、大悟底人さらに却迷せずと道取すると會取しつべ

下割云、多少ノ人皆如此會ス

△鉾、那、ぱ。下割云、此僧モ

△鉾、那、べ。し下割云、華嚴禪師モ

△鉾、那、有。ヲ無ニ作ル鉾、其下割云、異本多作レ有

△鉾、に下割云、如今叢林多少ノ師學共ニ

し。しかあれども恁麽の參學にあらず、人のおもふがごとくならば、大悟底人家常如何とを問取すべし。これを答語せんに有却迷時とらいはん、而今の因緣しかにはあらず、大悟底人却迷時如何と問取するがゆゑに、正當却迷時を未審するなり

【聞解】 今華嚴の心は大悟底人不重照……悟てらちあいたから、重て悟ること無く、又一度悟に、花が咲てしまふたから重て枝に上り悟ることはいらぬ、故に大悟の人は、さらに却迷せずと、華嚴の言葉を會取するで有るべし、然れども走では無い、若し其通りであらば、この僧も大悟の人の家常暮し方は、如何と問ひ、答語も大悟の人は無ニ却迷時一と云ひ走なものなり○正當却迷時……却迷の時が入用ゆゑに、こゝが未審と問取し來る。

【私記】 とは 家常は、平常のごとし、よのつねといはんがごとし、有却迷時は、却迷の時あらんやとなり、反語にみるべし、却迷時なしといふなり、正當却迷は、却迷時の正當なるなり」

【御抄】 是は破鏡不重照、落花難上樹の宗旨は、大悟人却迷せずゆへに、此破鏡不重照、落花難上樹と答話せらるゝと會取しつべしとなり、ゆへに恁麽の參學にあらずと被嫌なり。

打任て此大悟底人の詞を、人の心得たる樣ならば、大悟底人家常は如何ぞと問すべし、其を答へむずるやうは、有却迷時とら云はむとは、又迷時ありと云はむと也、この時破鏡不重照、落花難上樹と答られたらば、さては大悟の人は、又迷事はあるまじきと、被示と心得ぬべし、今の因緣しかにはあらずと被嫌也、實にも大悟底人、却迷時如何とあるときに、大悟の人却迷事あり、なむやともいはず、

△鉾、那、樹。ヲ柱ニ作ル

是はすぐに大悟底却迷時如何と云時に、却迷時とすでにひしと治定したる時に、只打任たる詞には、不似歟、此迷悟の詞心を付けて能々可參學なり。

【辨註】 辨曰、諸本に無字を作レ有は寫誤なり、蓋今時の人師思わくは、一度大悟後不レ可ニ復迷一、譬如破鏡不ニ重照一落花難上枝、是們は古佛の玄旨夢也未レ知在、夫悟後不レ迷乍入叢林、稱僧亦所レ云也、且悟不レ作レ迷、圓覺楞嚴に金鑛灰木等の喩あり、起信に水波の喩あり、雖然皆是一乘の極談にあらず、却て聲聞灰心滅智の義となる、此經論中有ニ深玄密意一、子細に工夫せよ、不悟不迷の根源を識得せずんば眞實參究にあらず、現成公案篇の薪の灰となり、灰の薪とならざる道理、又春の夏とならざる等の義、併見るべし。

【那一寶】 此因緣庸流の思はくは一度大悟後不レ可ニ復迷一、譬如破鏡不ニ重照一落花難上枝、是們は古佛の玄旨夢也未レ知在、夫悟後不レ迷乍入叢林稱僧亦所レ云也、且悟不レ作レ迷、圓覺楞嚴金鑛灰木等の喩あり、起信論に水波の喩あり、雖レ然皆是一乘の極談に非ず、却て聲聞灰心滅智の義となる此經論中有ニ深玄密意一、子細可ニ功夫一、不悟不迷の根源を識得せずんば實參實究に非ず、現成公案篇の薪の灰となり、灰の薪とならざる道理、又春の夏とならざる等の義可ニ併見一。

恁麽時節の道取現成は、破鏡不重照なり、落華難上樹なり、落華のまさしく落華なるときは、百尺の竿頭に昇進するとも、なほこれ落華なり、破鏡の正當破鏡なるゆゑに、そこばくの活計見成すれども、おなじくこれ不重照の照なるべし、破鏡と道取し落華と道取する宗旨を拈來して、大悟底人却迷時の

時節を參取すべきなり

【聞解】 恁麼却迷の時節の道取現成は破鏡……なり○落花のまさしく……百尺竿頭のほとり、許多の花が咲たとても、落花は落花なり、落花の時せつにさへ逢へば、いかやうに咲ても落花の後は、落花なり、法尙應捨の時にさへ逢へば、捨レ法た處から現成する故にどの樣に、活計が現じても、落花で案じなし、破鏡も其通り、照し盡た後は、體無依で、そこばくの活計があらわるゝとも、不重照の照で依ること無し、通身合ニ大道一なり、石頭はこゝを吾這裡針劄不入と云、藥山は吾が這裡石上栽レ花と云ふ、どの樣にしても、根は付て石上の住居なり。

【私記】 とは　破鏡落華は、恁麼時節の道取現成なり、難上樹は、落華の片片なり、不重照は、破鏡の正面なり、ゆゑに百尺の竿頭、これ落華なるべく、そこばくの活計、これ破鏡なるべし、破鏡も落華もひとしく大悟底人却迷時の時節を參取するなり」

【御抄】 是は破鏡不重照と談せむときは、いづくまでも破鏡不重照也、落花難上樹といはむ時は、盡界皆落花難上樹の時節なるべしとなり、百尺の竿頭に昇晉すとは、古き詞なり、いか程たかきさをに昇も、下も横竪共にさを也と云心地也、落花と談ずる時は、落花ならぬ所なく、破鏡と談時は破鏡の外なる物なき所に、此詞を被引也。

是は如文、破鏡といひ、落花と云ふ、宗旨を以て、大悟底人の詞と却迷時の時節とを、參取せよとは、破鏡の詞落花の詞の如く、大悟底人却迷時の詞をも參取すべしとなり。

【辨註】 辨曰、古佛商量殷勤明白、雖レ然諸人不レ通ニ其宗乘一、以ニ自己無ニ實信一也、老僧於レ是不レ辭ニ爲ニ言一、只恐承レ言不レ會レ宗、終無ニ自己分一、所レ謂不レ憤不レ啓、不レ悱不レ發、切知ニ慚愧一勤レ誇。

△辨、那、ら。下割云教人等ノ

△辨、那、り。下割云、從本垂迹ト云フハ

△辨、那、ふ。下割云、今所云却迷ハ不レ悟やぶるると

△辨、那、り。下割云、文子曰天圓而無端枚不可覩也列

【那一寶】 破鏡と道取し落花と道取する宗旨雖ニ未會有商量一也、無ニ實信一者不レ通ニ其宗乘一、承レ言不レ會レ宗、終無ニ自己分一、切知ニ慚愧一、憤發來て如何看。

これは大悟は作佛のごとし、却迷は衆生のごとし、還作衆生といひ、從本垂迹とらいふがごとく學すべきにはあらざるなり。かれは大覺をやぶりて衆生となるがごとくいふ、これは大悟やぶるるといはず、大悟うせぬるといはず、迷きたるといはざるなり、かれらにひとしむべからず

【聞解】 これは……ごとし、却迷は、大悟は佛の如く、却迷は衆生の如く、還て本と大悟作佛の境界なれども、還て作ニ衆生一、或は菩薩の衆生の迷を救ふ爲に、跡を垂ると一樣に學するな○と云心は、迷悟生佛の隔を見る、却迷では無いと云ふこと、かれ菩薩の垂跡は、大覺位の悟りを、衆生……迷となり來るが如し○これは……この却迷は、大悟を破らず、失はず、亦迷ひ來るに非ず。

【私記】 とは　文義しるべし、大悟却迷の移易なきをもて、やぶるといはず、うせぬるといはず、きたるといはざるなり、といへり」

【御抄】 是は常に人の思たる心地を、是は被釋なり、不可用義なりゆへに可學にあらずと被嫌也。

實此大悟の談ずる姿如此也、如文。

まことに大悟無端なり、却迷無端なり。大悟を罣礙する迷あらず、大悟三枚を拈來して小迷半枚をつくるなり。

于注無端無始也

△辨、那、なり。下割云、大悟小迷三枚半ヲ枚是什麼把得看。

△辨、那、ず。下割云、然也ノ

【聞解】 故に大悟にも却迷にも無端なり、始め終りはない、却迷時、大悟が外へ行くでも無く、大悟の時、迷が外へ去て、悟が新に來るでなし○大悟を……却迷と云ても、前波の大悟を礙へず大悟を外へのけず、やはり大悟に三枚を拈來して、小迷を作る、然れば大悟心、却迷心、二つ無し、鞘に納て居と、出して使ふとの違のみ。

【私記】 とは　これまたしるべし、迷悟ともに無端なり、無端は大海の邊際なきがごとし、ここをもて死屍をつけざるなり、なんの迷悟の墨礙すべきかあらん、迷悟聾なり、影室いはく、大悟をもつて小迷をつくるとは、大悟與二却迷一只同物なる道理を如レ此云なり、と」

【御抄】 大悟又迷無邊際道理を如此云也、大悟を墨礙する迷實不可有、迷をも又墨礙する大悟あるべからず。

是は大悟與却迷、至て親き時如此云はるゝ也、大悟三枚を持て少迷半枚を作るとは、大悟を以て少迷を作るなり、大悟與却迷只同物なる道理を、如此云也、三枚と云詞は、大悟を三枚と仕ふ、少迷半枚も迷を半枚と仕ふ、迷悟たがひに一物なる道理分明なり、作と云も非造作義大悟與却迷のあはひを作とも云なり。

ここをもて雪山の雪山のために大悟するあり、木石は木石をかりて大悟す、諸佛の大悟は、衆生のために大悟す、衆生の大悟は、諸佛の大悟を大悟す。前後にかかはれざるべし

【聞解】 雪山の雪山……二つ無きを明す、雪山が二つ有るで無し、手前が手前の爲に大悟するなり、木は木の爲、石は石の爲に大悟す、物が二つ並ばぬ○前後にかゝわれざるべし……諸佛は衆生の爲に大悟し衆生は諸佛の大悟した處を大悟して、有心無心、迷悟大小、久近生佛の隔別は無い、手放て見よ。

△辨、も下割云、不レ知二其雪理一故

△那、なり。下割云、見則背

△辨、り下割云、自己ノ分ナシ△那、割云、自己ノ分ナシ 然他是誑去ル處處

【私記】 とは　まことに日中の摩尼珠なり、夜半の摩尼珠なり、ただ大悟の活計のみ現成するなり、不染汚の宗をあらはすとて、雪山の雪山のために、木石は木石をかりてといへるなり、雪山木石、いづれのところにかある、すみやかにいへ、諸佛の大悟は、衆生のために大悟す、等、これ心佛衆生、三無差別なり、ゆゑに前後にかかはれざるべしといへり」

【御抄】 雪山の雪山の爲にとは、大悟は大悟の爲にと云程の義也、雪山は喩大涅槃たとふべきを喩と云、今の雪山と云は大悟を指也、木石の詞も同之、諸佛の大悟は衆生の爲大悟すとは、今の衆生と云は大悟也、諸佛の大悟は大悟の爲に大悟すと云程の義也、何樣にも大悟と云へば、人の上に大悟をば持たせて思ならはしたり、今の所談、全非其義に、衆生の大悟は諸佛の大悟を大悟す、前後にかゝはらざるべしと云々只同事をち打かへて被釋同理也、前後にかゝはらざる義なり。

而今の大悟は、自己にあらず佗己にあらず、きたるにあらざれども塡溝塞壑なり、さるにあらざれども切忌隨佗覓なり、なにとしてか恁麽なる、いはゆる隨佗去なり。

【聞解】 而今の……却迷の大は、自他にあらず、又外より來るにあらざれども、塡溝塞壑一切處にすき間が無い、不悟者を求るに難得なり○さるにあらざれども……却迷になりても、大悟が外へ去るに非ず、大悟の外に却迷があるでない大悟をやはり却迷にして用るなり、故に切に忌む隨他覓なり、

却迷を大悟の外の他に隨て覓ることを忌なり、なにとして、走いふことなれば、いはゆる隨他去で、自己の分無い故に、大悟の外に、却迷を覓ることなかれ。

【私記】　とは　自佗去來に蹤迹なほのこらず、あに形段のみるべきあらんや、ここをもて塡溝塞壑といへり、影室いはく、塡溝塞壑とは、滿足したる姿、充足の義なりと、またいはく、大悟の上の切忌隨佗覓、大悟の上の隨他去なり」

【御抄】　過去現在未來を置て、過去已に過ぬ、未來いまだ不來、ゆへに現在の而今とさすと心得ぬべし、今の而今とは大悟を指也、自己他己に非れどもと云、尤有其謂、來に非れども塡塞溝壑也とは滿足したるすがた、充足の義也、去に非れども、切忌隨他覓也とは、隨他で覓る事をいむと云也、隨他覓と云は、打任て人に隨樣には不可心得所詮大悟に隨也、何として如此なると云へば、こゝには又隨他去也と云、是は替たる詞に似たれども只同詞也、其故は切忌隨他覓も大悟也、隨他去也も大悟也、ゆへに詞は違すれども只同心とは云也、大悟の上の切忌、隨他覓大悟の上の隨他去也。

【辨曰】　雪山の大悟、木石の大悟、諸佛衆生の大悟、所謂大悟語、切須辨取、只恐分疎不下。

【那一寶】　雪山木石の大悟、諸佛衆生の大悟、所謂大悟語作麼生、切忌隨他覓、隨他去、他是何人ぞ、模索鼻孔看。

京兆米胡和尚令僧問仰山今時人還假悟否、仰山云、悟卽不無、爭奈落第二頭何、僧廻舉似米胡、胡深冥之　いはくの今時は、人人の而今なり、令我念過去未來現在、いく千萬なりとも今時なり、而今なり、人の分上はかならず今時なり、あるひは眼睛を今時とせるあり、あるひは鼻孔を今時とせるあり。

△詩、あり下例云、其這處卽今時也△鄉、例云、其這處卽今時ナリ何レノ時カ鄉ニ今時ニ

【聞解】　京兆米胡……假悟否とは、本意は悟を假らぬ筈と云ふ心なり、然れども、先づ試に假否と云でござると問ふ○假は當分のこと一度は還すなり○仰山曰悟は不無、あるけれども、悟第二頭なり、第一頭には、迷が無いから、悟も無い○二頭は、大論に、二頭三年とある、有るもので無いを云ふ、今も、悟は假りもので、本より有るもので無い、それを持て居れば、頭が二つになる、氣の毒なものと云ふ心なり○いはく……米胡いはれる○ある故に三世は云に不及いく千萬ありとも○今時は、人々手前手前の今なり、其今と云は、其時々々に有る今じやから、今我憶過去未來現在なり、三世ともにある故に、三世は云に不及、いく千萬ありとも、今時なり、過去でいへば、過去の今時、未來でいへば未の今時なり、一念普觀無量劫、無量事只是今なる道理なり○人々……人々分上知見に通ずるが今時なり、今なり○眼睛鼻孔を今時とするとは、當人當念にある、鼻孔の上のこと、眼睛裏のこと、餘所見するなと云ふこと。

【私記】　とは　いはく今の時は人人の而今なりとは、はなはだ分明なり、三世は而今のわれなるをもて、今我念三世なり、眼睛鼻孔あに別の面目ならんや」

【御抄】　いはくの今時は人々の而今也と云は、今時人の人のごとし、過去現在未來等いく千萬也とも、今時也、而今也と云なり、詮は三世を今時とも、而今ともさす、この三世今時而今共に大悟也、人の分上は必今時也と云、この又今時人の人也。

△辭、邪、道。下倒云、取△辭、邪、し下倒云、不ノ顧二衆身失命一

人の詞に仰て、或眼睛鼻孔等を今時とせるありと云なり、今の今時人の上に眼睛をも今時とし、鼻孔をも今時と談べし。

還假悟否、この道をしづかに參究して、胸襟にも換却すべし、頂顙にも換却すべし。

【聞解】胸襟にも換却すべし……胸襟にも、頂顙にも、換へる程に、參學するがよい、修證不ノ無、悟りは假りぬばならぬ、假り物は一度は還す、染汚すること不ノ得なり、爰が頂顙にも換へて、參學する大悟却迷の場なり。

【私記】とは　文のごとし」

【御抄】人與悟をいかにも各別にをきて心得、此還假悟否の詞を、しづかに參究して、したしくむねにもいたゞきにもかへて心得べしと云なり、頂胸なむど云何事か覺たれども、是は至て親き詞也、悟別の物にあらざる道理をのぶる詞なり。

近日大宋國禿子等いはく、悟道是本期、かくのごとくいひていたづらに待悟す、しかあれども佛祖の光明にてらされざるがごとし、ただ眞善知識に參取すべきを、懶惰にして蹉過するなり、古佛の出世にも度脫せざりぬべし

【聞解】近日大宋國の禿子等は、大悟の道を本期、元より心掛の期として、いたづらに猫の鼠をねらふ樣に待悟する、走して佛光明にも、我と遠り眞善知識に參するに、ものうく無狀にして居る、これらは古佛の出世でも、度脫の手が及ばぬ。

【私記】とは　悟道是本期とは、もと悟をあてて修行せるものなれば、悟道さへすれば、それですむといへる破落戸なり、餘義しるべし」

【御抄】如文可心得無子細。

いまの還假悟否の道取は、さとりなしといはず、ありといはず、きたるといはず、かるやいなやといふ、今時人のさとりは、いかにしてさとれるぞと道取せんがごとし、たとへばさとりをうといはば、ひごろはなかりつるかとおぼゆ、さとりきたれりといはば、ひごろはそのさとりいづれのところにありけるぞとおぼゆ、さとりとなれりといはば、さとりはじめありとおぼゆ、かくのごとくいはず、かくのごとくならずといへども、さとりのありやうをいふときに、さとりをかるやとはいふなり

【聞解】還假悟否……悟りなしとはいはず、有りといはず、只假否と云こと、假り物と知れば、強て苦にもならず、たとへば、米胡の問ふ心は、仰山のさとりをうるといはゞ、日頃は無きかと覺ふ、今始て來るなら、ひごろはどこへゆいてありし、又今の心が新に悟になると云ふは、始めあるなり、始あるものは終りある、今は其樣なことをいはぬ、けれども悟りは無いで無い、悟りの有りやうを云ふには、假悟やと云ふなり。

【私記】とは　なしといはず、ありといはず、きたるといはず、とは、大悟の頭正尾正なるなり、かる

△辨、えチに作リ其下割云、に字異本作ニえ字、いひや一本作ニいふや、

やいなやととふ、まことにさとりのありやうなり、いかにしてさとれるぞとは、問處にあらずと參學すべきなり、有にしてさとれるか、無にして悟れるか、乃至不有不無にしてさとれるかといはんがごとし、さとりをうといはゞより下は、大悟の不變異なり、うといひ、きたれりなどいはゞ、人と悟と別ものなるべし、かくのごとくいはず、かくのごとくならずとは、上を決する詞なり、さとりをかるやとは、これ中的不犯なり」

【御抄】 已上如文。

しかあるをさとりといふは第二頭。えおつるをいかんがすべきといひつれば、第二頭もさとりなりといふなり、第二頭といふは、さとりになりぬるといひや、さとりをうといひや、さとりきたれりといはんがごとし、なりぬといふも、きたれりといふも、さとりなりといふなり

【聞解】 第二頭も悟りなりといふなり、たとひ悟りを得と云ふ、悟來れりと云ひ、たとひどふなりても、第二頭では悟りとなり、然れば第二頭をいたみながら、第二頭なからしむるなり、悟りを第二頭とすれば、第二頭なし。

【私記】 とは　文義分明なり」

【辨註】 辨曰、悟は無きにあらず、悟れば第二頭に落ると云へば悟は第二頭、蓋し第二頭は悟の場なり。

【那一寶】 悟は無きにあらず、悟れば第二頭へ落るといへば第二頭も悟の場なり、然あれば昨日の黑頭も大悟、今日の白頭も大悟、大悟時作麼生、却迷時作麼生、我近日東語西語、今日勞倦せり、不ノ道

△辨、那、を下割云、動著セズシテ第二頭ノ悟リ悟ノ第二頭ナレバ第二頭ハオノヅカラ

△辨、那、ながら一本作ニなら、

△辨、那、し下割云、シカレドモ

△辨、那、り下割云、更ニ二三四五アルニ非ズ

△辨、那、なり下割云、昨日ノ我モ今日ノ我モ無量劫ノ前後ノ我モ我ナリ

△辨、那、大下悟字ナシ、割云、却迷乎恐是爲ニ難識ニ

△那、り下割

不ノ道。

しかあれば第二頭におつることをいたみながら、第二頭をなからしむるがごとし。さとりのなれらん第二頭は、またまことの第二頭なりともおぼゆ、しかあればたとひ第二頭なりとも、たとひ百千頭なりともさとりなるべし、第二頭あれば、これよりかみに第一頭のあるを、のこせるにはあらぬなり。たとへば昨日のわれをわれとすれども、昨日はけふを第二人といはんがごとし、而今のさとり昨日にあらずといはず、いまはじめたるにあらず、かくのごとく參取するなり。しかあれば大悟頭黑なり、大悟頭白なり。

【聞解】 悟りのなりた、第二頭なれば、まことの二頭ともおぼゆ、然れば、二頭なりとし、百千頭あるも悟りなるべし、大悟却迷も向じや、第二頭ある時は、二頭ぎり、此上に第一頭をのこせるに非ず○たとへ心昨日の……昨日を一人とし、今日を二人とす、昨日の人がやはり今日の人になる、昨日は一頭の場、今日へ引直して、二人りめの第二頭とす、昨日の人が其儘今日の二人、今日の二人となる處が今日二頭人の場、昔より盡未來の末までも、吾れは吾人は人なり、昨日はけふとうつる處を第二人と云ふが如し○今の悟りは、昨日に非ずといはず、昨日は昨日なり、今日は今日なり、二心はない、今新に始めたるに非ず、然れば、大悟は頭黑、大迷は頭白なり、頭黑で善いと云こともなく、頭白で惡いとでもない、大悟大迷の間に少しも優劣無し。正法眼藏大悟卷聞解　終

云、相逸頭白ノ意ヲ含ミ影略シテ見ル説モアレドモ文相ノマヽ見テ親シカラン

【私記】 とは　昨日はけふを第二人といはんがごとしとは、昨日も今日も、おなじくわれなれども、昨日にあつては、今日のわれをあすのわれといはんがごとし、たとひ昨今の別あれども、われにおいて異なきなり、けふを第二人といふ、第二人は、昨日より喚作するゆゑ、あすのわれといへることばを、しばらく第二人といへるのみ、而今のさとり昨日にあらず、といはず、いまはじめたるにあらずとは、昨今ともにさとりなりといふなり、頭々黒白みな大悟なるを結するとして、大悟頭黒なり、大悟頭白なりといへり」

【御抄】 已下如文

是は昨日我、今日之我と云へば、只同物也。

以今大悟黒とも白とも仕也、猿のうへに黒白を、談せしが如し。

【辨註】 辨曰、今日頭痛せり、困倦せり、爲レ儡不レ道不レ道。

【那一寶】 退峯祖、此話下語曰、但見二錐頭利一、未レ知二鑿頭方一、更云明二得此大悟却迷一則公案一、非二但一生參學事畢一、傳燈一千七百則有二什麼難レ通處一、多年以二此話一試二驗學者一、終無二參透得者一、誰是謝二徹困一底、又曰賴無作麼生透得、不レ入二驚レ人浪一、難レ得二稱レ意魚一、大小老漢頭出頭沒、又曰得却失、那一曰、恁麼不恁麼、頭上雲不レ見、脚下水無レ窮、大悟時却迷時、道道。

【御聽書抄】 ▲佛々の大道つたはれてと云、佛々とかさぬればとて、毘婆尸佛尸棄佛なむど相傳を立むずるにはあらず、只毘婆尸佛の法道は、毘婆尸佛の法道の如く、尸棄佛の法道は尸棄佛のごとしと云はむやうに、佛々とは列る也、彼是の差別なき所を、佛々と云也、邊際あらむ法は、大道の詞詮なし、ゆへに大悟現成し、不悟至道し、失悟放行なむど云也▲綿密と云は、たゆる所なく、つたはることのきびしきとなり、密はかくす義にてはなし、きびしき也、祖々の功業と云、是も上の心なるべし、功業によりて、いかなる賞をまつといはず、ゆへに平展ととくなり、大明錄なむどには、悟のすがたを種々に立て、勝劣を判す不可然事歟▲雲門の三句なむど云て、談ずるにはいはゆる、隨波逐浪、函蓋乾坤　截斷衆流これ三也、是を敎にいはむには、隨波逐浪は和光同塵なむど云ひ、函蓋乾坤は境智冥合なむど云ひ、截斷衆流は法身の理なり、非青黃赤白非長短方圓なむど云はむずる也、今禪宗なむど號する輩も、又言語にかゝはらず、無分別なる所が禪なるゆへに、截斷衆流とはいふぞなむと心得、しかにはあらず、一者三界を唯一心とゝき、二者一心唯三界とゝき、三者三界唯三界とゝかむぞ、雲門の三句なるべきと、こなたには心得也、しかあれば則一句是三句也、千句一句これ三句なりゆへに三句これ三句にあらざるなり、高下大小なく、たひらにのべたりと也、たとへば綿密の詞とをなじ、盡界とつかふ程の詞也佛々と云より、平展也と云までは、總表の詞なり、佛々と云がやがて、大道綿密の義にもあたる也▲佛佛の大道と云より、平展也と云まで一段、此故にと云より、家常也と云まで、一段、皋拈すると云より弄精魂と云まで一段、以上三段と見分べし▲六塵の說法と云事あり、所謂六根也、其中此界耳根利也、但根境相對の時こそあれ、一佛葉の時は能所なし、今の佛々相傳の大道は、六根皆同じ、然而六根を無しと聞も、聲塵也、耳根利なると云べし、但又理の如く云時は六塵にかゝはれず、平展のとき、根境識と云差別もあるべからず△皋拈する使得十二時あり、抛却する被使十二時ありと云、これは省悟弄悟なむど云たけを、皋悟とも、失悟放行と云たけを、抛却もつかふ也、つかひうると、つかはるゝと云共に、十二時の上にとく、これ大道のつたはるを、大悟現成と云ふ弄悟失悟とも、放行ともいはるゝ如く、使得し被使するなり、大悟の上と、十二時の上と

かはらざる也、此つかはると云事、誰人が何を仕と云はず、平展至道ぞ仕にてあるべき、又今の十二時は午未子丑なむどをかぞへんとにはあらず、所詮諸法が實相を使得し、實相が諸法に被使得程也、又諸法諸法也、實相實相也とも云ひ、或弄泥團とも、弄精魂ともいふこれなり、一心卽一心なり、三界をかるべからず、但又一心一心にあらず、三界三界にあらずとも云つべし▲弄泥團弄精魂と云ふ、泥のまろかし、又我等がたましゐをもてあそぶと見たり、然而佛々の大道、祖々の功業には是をくだし、是をあぐる事なし、諸法佛法なる時節には、佛あり衆生ありと云ふ心地にて、今は弄泥團弄精魂と云也、たとへば大地を弄し、虛空を弄し、山河を弄すともいはむ同たけなり、弄精魂なむど云へば、我等が肉身がことときこゆ、今は佛道の上に心得べき也△大悟より佛祖必恁麼現成する、參學を究竟すと云へども、大悟の渾悟を佛祖とせるには非ず、佛祖の渾佛祖を渾大悟也とには、あらざるなりと云は、この究竟と云心地は、佛祖は大悟の邊際を跳出し、大悟は佛祖より向上に跳出する、面目也と云心なり、かならず悟を用むとにはあらず、失悟放行と云ふゆへに▲無師知者あり、善知識によらず、經卷によらず、性によらず、相によらずと云、法性の草子には、或知識にしたがひ、或は經卷に隨て參學するに、無師獨悟すとあり、今は善知識によらず、經卷によらずと云ふ不同なり、如何、この疑尤有其謂無師獨悟と無師知者と必一と心得べき歟、又しからざるか、覆うけてをくべし、法性に云經卷に隨とある、經卷は法華經の十方佛土中唯有一乘法の心なるべし、しからばいづれの經にしたがひいかなる知識にあふともいひがたし、此前には無師獨悟とこそさとられ、佛は我行無師法と被仰、此上は外道佛をつめたてまつるべき詞なし、又無師知者は、衆生如敎行自然成佛道の自然に可心得合此生知學而知佛智者無師知者と置て云時に、先只父に對して、無師と云はむときは、經卷によらず、知識によらずと心得て可置也、始終道理に叶べき也、經卷知識等によらずと云詞を、ふかきにとり、入は性によらず、相によらずと云、性相又いか程の義なるべきぞ、一句の詞なればたゞ詞の如く可心得▲無師知者とは、前終行久學の者今の龍女如きか、無師知者はまたいはば、盡十方界眞實人體なるべき歟▲正當恁麼時は而今也と云、正當と云はふるき詞なり、十五日以前、十五日以後正當十五日と云也、これは前後を立るに似たれども、只十五日上に前後をば置也、正當は而今也▲慧照大師段　臨濟院慧照大師云大唐國▲不悟者難得につきて、二あり、悟者のみありて、不悟者なしと心得る方もあるべし、又不悟者の面目がやがて難得といはるゝ也、たとへば心不可得の心也、心不可得の草子に、不可得裏と云しが如く今は難得裏なるべし▲盡界にかゝはれず、塵刹にとゞまらずとある、日來の見解悉相違す、國土と云程にては、爭盡界にかゝはれず、又塵刹にとゞまらぬ事あるべきなれば旁被心得ねども眼睛靈界塵刹この三を、大唐國とさすべき也、此三に各裏の字をつけても難得なるべき也、然者又悟不悟も是程にこそ可心得、ときにさとらざるものをもとむるに不得と云へばとて、我等が不得のやうに心得まじ、不悟者難得は、不悟至道のをなじ詞也、悟者難得は、弄悟省悟とも心得べし、抑難得はあるべきものか、なきものか、法華經に難解難入ととく、唯佛與佛ととく上、一乘の法外に難解難入の者あるべしや、論帖の經には難覺難知の詞を加る也、難得と云へばとて、得がたきにはあらず、たとへば心不可得の詞程也、實相の理をば難解難入ととく也▲すべてさとりは難得の法と云べきをや▲自己の昨自己と云は、過去未來現在、三世をさす也、此詞自與他、昨與今入ちがへて云ふ、いかなる樣あるべきぞと覺ゆれども、不悟者にあらず、所なき道理ばかり也▲一人半人は悟者不悟者也、不悟者の上に悟者ある事を、今半人とは云也、人裏に國をもとむる事、悟と不悟とをなじくば、又難得難得なら

ずと心得合すべし、すべて國與悟人と各別に不心得上は、人の裏に國もとめがたしと疑べからず、敎にも身土不二とは談ず、ゆへに普賢色身如虛空、依身而住非國土と云て、依身て國土によらずなむと云義もあり、所詮國中に國あり人の中に人ありとも、又もとむとも云べし▲寶智大師の段、大悟底人○破鏡不重照○三界に住する人一心をさとるとき、如何にと云はむも是程の事なるべし▲大悟の種草の爲に、はじめて迷者とならむと、擬すべきにもあらずと云ふ大悟與迷者無差別なれば、大悟のしなじなある中に、いらむとて迷者とならむと擬すべきにもあらずとは云也、但大悟の種草の爲にはじめて迷者とならむと擬すべきにもあらずと云ふ、法華のとき所被機緣多かりしと云は、皆內秘菩提行、外現是聲聞とこそあれば、本高迹下の義也、などか迷者ともならざらむ、但是は不可然、大悟無端、却迷無端と云、ゆへに念佛宗には專此事をひきて、法華のとき、菎別にあづかるも、內秘菩薩行の輩也、今の念佛往生こそ我等が得分なれと云ふ、尤似有謂、但如此いはゞ、又凡夫往生とは難云、佛往生とや云べからむ、佛すでに成道のときは、大地有情同時成道と仰せらる、定妄語にあらじ、然者何ぞ我等有情の中に入ざらむ、然者佛の成道するにあたれり、凡夫往生と難云▲大悟人さらに大悟す、大迷人さらに大悟す、大悟人あるが如く、大悟佛有と云ふ○悟上得悟の漢、迷中又迷の漢と云程の詞也、大悟人さらに大悟すと云ならば、大迷人さらに大迷すとも云べけれども、大悟を題目としつるゆへに、大迷人さらに大悟すとも云▲大悟底人却迷時如何の詞にあはせば、破鏡は大悟底人也、却迷時如何は不重照、落花は大悟底人、難上樹は却迷時如何ときこゆ、但非爾、破鏡と云とき、未破のことを不談、不對緣而照と云が如し、たゞ不重照なるべし、鏡を像に鑄と云事あり、何をかうつさむや、落花難上樹も、たゞ樹なくとも、只のぼりがたしと說れむが如し、不重の不の字、難上樹の難の字もたゞ難得の難に可心得、今落花と云も、百尺の竿頭の上に置て、さかむとも、ちらむとも、共にいはむが如し、進步退步、百尺の竿頭の心也▲所詮大悟與却迷、善惡勝劣にあらず、齊肩の上有却迷も、無却迷も皆あたらずと心得べき也、不可過之▲諸佛は衆生の爲に大悟す、衆生の大悟は諸佛の大悟を大悟すと云ふ、此詞聊不相應に聞ゆ、諸佛は爲衆生大悟すと云はゞ、衆生は佛の爲に大悟すとぞいはまほし、けれども是は大悟の草子なるゆへに、大悟をむねととく也、現成公按に悟上得悟の漢、迷中又迷の漢と云詞の如くなるべきかと覺ゆ、但かれは諸法佛法なる時節と諸法われにあらざる時節とを出して、一句一句ものをひとしめていへばこそあれ、是は大悟を沙汰する所なれば也▲切忌隨他覓むと云是大海不宿死屍の道理なり、隨他事はなけれどもいむと仕也▲凡却迷の有無は沙汰のかぎりにあらず、その上は何の事も僻見なりと云べし、たゞ大悟と又却迷とは、同詞と心得べき也▲米胡段　京兆米胡和尙令僧問仰山○過去現在未來いく千萬也とも、今時なり、人の分上は必今時也と云ふ、此今時は三世なき心地也、我をして過去未來現在を念せしむると云は、過去と云も未來と云も、今時の人が念をやるばかりまでこそあれ、念又身にはなれねば、念々具足してゆくべくは、過去も今時なるべし、未來も今時なるべしと云心地也、人も佛道人なるべし、今時も佛法の上に心得べし、今時の人とは、さとりをかると云同程事也、又今時人は、山人水人眼睛人なり、悟をかりて大悟すと云詞もあり、これはさとりが、さとりをかると云べし、木石をかりて大詞すと云程の事也▲三世にありつる身とこそ思つれども、今は我に三世あるなり、此三世我等が日來思が如く、吾我に對してすぎぬるを過去とときき、住するを現在とときき、未きたらざるを未來ととくは、わづかのことなり刹那の程にもこの三世はあるべし、過去の千佛、現在の千佛、未來の千佛と、とくこれは只、紙三

枚を一枚を以て過去ととき、一枚を現在ととき、一枚を未來ととくべきか、不審也、心外無別法と云時、三世いかにかわかつべき唯一心の三世には、一心がありてとくか、傍觀者のあてさだむるか、佛法には三世あらざる也▲今時人の今は、過去も現在も未來もいづれの所にても、今と云はるべし、今時の人又誰とさすべきにあらず、盡十方界眞實人體の人なるべし、今時人と云つる時に、眼睛鼻孔とはあるなり、別子細なし、又さとりをかると云、此悟なにと難云ゆへにしづかに參究すれば、胸襟にも頂顎にも、換却しつべし、何とさして云べきならぬ也、祖師の詞と云は皆以如此▲古佛の出世にも度脱せざりぬべしと云ふ、古佛とさすこと如何、未來の新佛の出世にはいかなるべきぞと一旦は覺ゆれども、佛は新古にかゝはらず、たとへばいづれの佛の出世にも、この僻見は難被度脱となり▲第一頭はをく義もありぬ失すと心得る方もありぬべし、佛の一乘ととかせをはします、これ二三に對したるにあらざれば、一と云詞もありたり假と云ひ不落と云とをなじかるべし▲落便宜と云詞あり、便宜あり、便宜に隨なむど云程のことに仕ふ●此落を脱落の落に心得む如何、但是經豪私愚案也可恐可恐可早改可早改▲第二と云詞は、第二月と云詞より云そめたり、悟を得が第二頭にをつるにてあるなり、第二月と云は、目をさして月を見れば、月二あり、これ非實月、第二の月は妄月也、このゆへに第二頭はさとりにあらずと云べし、然而さにはあらざるべし、第二頭がやがてさとりなる也、第二月を迷とは心得にも、たゞ第一月のみあるべし、第二月の下にこそやがて、第一の義はあらはるれ、ゆへに如此とくなり▲悟道是本期と云ふ敎に云ふ待悟爲則の心地也非可用也▲昨日のわれを我とすれども、昨日はけふを第二人と云はむが如し、而今のさとり昨日にあらずといはず、はじめたるにあらずと云、如文昨日と云ひ、而今と云へばとてわれ不各別也▲しかあれば大悟頭黑、大悟頭白と云ふ、黑白の詞かはれども、所詮大悟頭の上に、二ながらをく、十二時の上に擧拈する使得とも、抛却とも被使とも云が如し、究竟する所、さとりより外にあまる所不可有と也▲今時人と云、今時は頭黑なるべし▲假悟否の假悟は頭白なるべし。大悟終

正法眼藏大悟

爾時仁治三年壬寅春正月二十八日住觀音導利院興聖寶林寺示衆

而今寛元二年甲辰春正月二十七日駐錫越宇吉峰古寺而書示於人天大衆

同二年甲辰春三月二十日侍越宇吉峰精舍堂奥次書寫之　懷奘

却退一字參

正法眼藏大悟　空手還鄕參却退一字

●佛佛大道流傳綿密也、祖祖功業、顯現平展也」是故大悟現成、不悟至道、省悟弄悟、失悟放行、是佛祖家常也、本文綿密相續不斷貌、須知打圓相也、打圓相相、無始無終故、若至那法、若至這法、虛冲一位也、平展無高低無卷縮、平坦展演、凡也聖也、此網恢恢疎而不失、流傳顯現、共非斷常、功業在大道、大道徹功業、佛祖正脈焉染汚修證、是故已下、卽之意也、現成非阿誰造作現成也、至道者大悟、自爾忘却也、弄悟者念念交加見變通也、初心辨道本證全體故、修外無待證念又見道、無怠也、放行者、辨道話謂放下妙修、則本證滿手中、出身本證、則妙修行通身是

大後人攙入今擇从古本

通本作渾佛

也、失悟、諭熟柿、自成熟也、勿例熟爛、省悟、者熟柿、未成熟也、勿脈苦澁、大悟、諭熟柿、厚味也、不悟、厚味自收氣也、至茲其熟柿也可封仙壺乎、是卽綿密無間斷瑕際、平展凹凸無焉、卷縮無焉、如是源派無的、祖祖佛佛時節若至則道家常也、謂家常者盡時盡方是也。

●有舉拈焉使得十二時、有抛却焉被使十二時、更或跳出此關捩子、弄泥團、或弄精魂、本文　舉拈抛却右初段宗旨也、而舉拈者、使得是也、被使抛却也、十二時者、佛祖家常也、趙州因僧問、十二時中如何用心、師云、汝被十二時使、吾使得十二時、汝問那箇時、此箇妙則或如文參而無固必也、須如今參、既道舉拈抛却豈不大悟不悟等乎、使得被使、四箇字輪、古轉法輪故十二時、舊窠脫落也、此是謂關捩子、可知爲開閉主宰也、跳出之者、現成、至道、弄語、放行等、頭正尾正者乎、弄泥團猶如胡餅、謂乳餅三枚、菜餅七枚也、弄精魂猶如言血脈不斷、謂喪身失命故、讓身保命也、泥團四大五蘊不壞性也、精魂眞實人體生死去來也、弄者猶言以之、左之右之焉也、而泥團精魂外無有箇什麼物也。

●雖大悟佛祖必究竟恁麼現成參學、而非大悟、渾大悟爲佛祖、非佛祖、渾佛祖乎渾大悟也、佛祖跳出大悟邊際、大悟跳出於佛祖向上面目也、本文　恁麼現成者、弄精魂等、不染汚三昧是也、而非至悟也、無一物之吐無舌語也、非字輪示不依倚而已、佛祖跳出下須知人法廓落亡依、無我無物宗脈宜通是也、於是乎宜深遠參究功夫人也法也固脫洒者。

●然人根有多般曰、生知、是生透脫生也、謂體究生、初中後際也、本文　體訓究也、重言可知、生初中後際者、生時生外無物、之謂前後際斷、生一時位、

●曰、學而知、是學而究竟自己、謂體究學皮肉骨髓也、本文　天降生民、學而知道、是究取自己也、學也先王及先佛大道乎、皮髓而已。

●曰、有佛智者是非生知非學知超越自它際、而無端這裡、無拘自它知也、本文　眞正學道、則是恁麼、而無已下、不依倚自上頭行履可知。

●曰、有無師知者、不從善知識、不從經卷、不依性不依相、不撥轉自、不回互它而露堂堂也、本文　已上四知、自淺至深、大悟却迷却迷大悟也、不從卽是或從大悟却迷也、是故道不撥轉等者乎、不撥不回、則無端無拘、親密而今佛知者、脫落故、無師知者也、可知露堂堂孤迥迥矣。

●是等數般、不一之認利、二之認鈍也、多般共現成多般功業也、本文　一二非次、猶言此彼、謂生知稱此認利或認鈍學而知謂彼認鈍或認利等、則偏枯也、佛道不貫、利也鈍也、不取不捨多般共有其德也。

●然可參學何情無情非生知矣、有生知則有生悟、有生證明、有生修行矣、本文　不染汚宗自具足不染汚敎行證、依文迷義闕任運修證者、可知終不免佛祖門下過登、是以宜精進不退日夜耳。

●然佛祖已調御丈夫、之稱生悟來也、拈來悟生故如是、應參飽大悟生悟、拈悟學故如是、本文　調御丈夫者、無拘自它知也、調練治御自己也、固爲調伏熟御一切有情也、

故說丈夫今不依八尺爲丈說　丈仗也、夫士通稱、名爲物所依仗也、如是歷劫操持成道之稱生悟者、是非思量分別之所能解、但由大悟却迷底行足佛威儀者乎、須知行足佛威儀、則是不生滅悟、故道拈來悟生等也、參飽大悟等亦是純一無二、或道拈却迷學故如是、亦可恁麼、今大悟話耳、

●然則拈三界大悟、拈百草大悟、拈四大大悟、拈佛祖大悟、拈公案大悟、皆共拈來大悟、更大悟也、其正當恁麼時、則而今也、是卽大悟話、全機現而已、進步拈三界失悟、拈大悟不悟等、參究有矣、者婆之所見、草木等千千萬萬、總無不藥物、故道此一莖草、能殺人能活人、越謂其正當恁麼時、則而今也、則不動不轉參究也、或行佛威儀之出入去來同門、便是草耳、

●臨濟院慧照大師云、大唐國裡、覓一人不悟者難得、此一則者單刀直入、正當直入時、歘然火起、這裡覓半枚悟者難得、三軍千重百帀者也、

●今慧照大師之所道取、正脈來皮肉骨髓也、不可有不是、大唐國裡者、自己眼睛裡也、不拘盡界、不住刹刹、不可有不是者、直下領納、謂大唐國裡、其時其處、耳、故一時佛住諸土、則不動寂場游戲三昧耳、自己眼裡謂之盡十方世界、奈可拘盡界邪、眼睛不受一塵故、更不受眼睛、辟歷旋轉有矣、勿忘、

●這裡覓不悟者、一人難得也、自己昨自己非不悟者、它己今自己非不悟者、山人水人、古今、覓要不悟應未得、學人如是參學臨濟道、不可虛度光陰、一本作它己今它己、蓋近人筆、無它欲對文面、不知這破意對玄妙、自己昨日自己、今日它己忽焉自己、如是妙玄有矣、勿强對文面、如是以下、且許可而已、

●雖然如是、可要參學祖宗懷業、未知諸經要集中有懷業、兩字者耳、彼第十九卷祭祠緣下頌云、懷業一本改作德業、高堂信逆旅、懷業理常牽云云、往撿、謂懷抱道業省略語耳、文句表面與祖宗懷業、不可及天地比論、但止比擬論判、宜參懷抱道業底、作麼生是懷抱道業底、速聽取與聖開祖道得底、

●謂應且問臨濟、知不悟者難得、不知悟者難得、未足爲是也、難道參究不悟者難得、雖覓一人不悟者難得、而有半人不悟者、面目雍容巍巍堂堂、相見來未也、半人不悟者者、亦如是面孔乎、例如道半箇聖人、刀劒殺活人、謂之上古風規、今時樞要、豈非全半互休不得究者乎、雍容善和貌、巍堂盛大尊高貌、能善和物、而盛大尊高終不區宇所住方維、如是相見者亦是什麼人、

●勿究竟　雖大唐國裡覓一人不悟者難得、一人半人中應覓試兩三箇、大唐國、難得麼、非難得麼、具此眼目時、可許參飽佛祖矣、佛祖家常、身心一如、今也恁麼、故道盡大地是解脫門、把手曳不入舉人出入門、則彌遂門、舉門入人、則有出入分矣、諸法實相、難得麼、非難得麼、唯然謝尊答、今問誰恁麼、

●京兆華嚴寺寶智大師嗣洞山因僧問大悟底人却迷時如何、師云、破鏡不重照落華難上樹枝下爾、通本作枝、

●今問處者、雖問處如示衆、非華嚴會不開演、非洞山嫡子不可加被、實是應參飽佛祖方席者、猶言公界道場也、此三十五字、點墨也無、慎勿趂趙、須

進步參、莫虛度。

●謂大悟底人、非固大悟、非餘外大悟、貯大悟於公界、非相見末上老年、非自己、強爲牽挽出來、而必大悟也、」非不迷爲大悟、非可擬爲大悟、種草始爲迷者、文本老大、窮極謂之未上老年、公界非私佃、非不迷者、總斥凡見、種草者爲種植大悟、公界、預于私佃、使之生長乎非爾、若夫如道、可謂生滅法咄。

●大悟人更大悟、大迷人更大悟、如有大悟人、有大悟佛、有大悟地水火風空、有大悟露柱燈籠、而今問取大悟底人也、文本可知大悟、無邊際涯岸宗旨、對上非不迷以下、文參究則任運明矣、而今下、自辟歷問處道得。

●大悟底人却迷時如何、問取、實問取可問取也、華嚴不嫌暮古叢席、佛祖、勳業可効也、」文本通本作應勳業也、今可効者切暮古叢席、一本作勳業可學也、爲四海參學、便宜、如是記志異本、有九方皐麼。

●且可功夫、大悟底人却迷、應不悟底人一等麼、大悟底人却迷時節、拈來大悟造作迷乎、它那裡拈來迷、蓋覆大悟、而却迷乎、」又雖大悟底人、一人不破大悟、而更參却迷乎、」又大悟底人、却迷者、更拈來一枚大悟、爲却迷乎、可旁參究也、」又大悟也一隻手、却迷也一隻手乎、應知聽取如何方也有大悟底人、却迷、參來究徹、應知有令却迷親曾大悟也、文本可旁、旁普也、訓話乎、非邊傍旁、宜學無偏頗、應知聽取下、一齊畫圖大悟却迷、皮肉骨髓、慎勿輕忽。

●然非認賊爲子、爲却迷、非認子爲賊、爲却迷、大悟應認賊爲賊、却迷、認子爲子也、多處添些子、之爲大悟、少處減些子是却迷也、文本減些子者、少處本分乎、添些子者、多處全機乎、可知添也眼橫鼻直、無有牽合附會、減也眼凹鼻凸、無有絲毫耗損、而非多處添些子、少處減些子則不可燒香供養大悟底人却迷者、宜善保護皮肉骨髓、故道大悟認賊爲賊、却迷認子爲子、更有所可知、謂、認賊爲賊、論如應無所住、認子爲子、而生其心乎、必究道、之之非大麥小麥二升五合、更新婦子袖二尺五寸、油桶醬桶蓄麸攪。

●然應摸著却迷者、把定了相逢大悟底人、而今自己、是却迷乎、不迷乎、應檢點將來、是爲參見佛祖矣、文本前道應知有令却迷親曾大悟也者、今僅到此、大般涅槃、可知未摸著却迷者、非眞大悟底人。

●師云破鏡不重照、落華難上樹、文本有人引證華嚴經隨好光明品第三十五文、自是呈笑具、二三子等、勿珍重之、唯由宗祖不可長異見、莫錯依文解義好。

●此示衆者、道取破鏡、正當恁麼時也、然遺心於未破鏡、時節、而參學破鏡、言則不是也、文本東方照、白毫、更不可異求。

●今華嚴道、破鏡不重照、落華難上樹、宗旨者、謂大悟底人不重照、謂大悟底人難上樹、而應會取道取大悟底人不更却迷、然非恁麼、參學、如人情謂、則應問取大悟底人家常如何等、答話之道有却迷時等、而今因緣非爾問取大悟底人却迷時如何、故未審正當却迷時也、文本或師改有却迷時、有作無字、賣弄自誇云賣弄也、天下、何不見有却迷時乎、耶、古語如是者、往往之多依義解、好按譬古本以捨短就長則可乎、雖然上層傍邊云云

是法。

●恁麼時節、道取現成、破鏡不重照、落華難上樹也、落華、正落華時、昇晉百尺、竿頭而猶是落華也、破鏡、正當破鏡故、如許多活計見成、而應同是不重照照、應拈來道取破鏡道取落華宗旨、參取大悟底人却迷時、時節也、文本謂破鏡落華道取、且呈謬解、鏡鏡不重照、華華難上樹、悟上得悟、迷中有迷、上得中有、豈不友于這裡、却字乎、本卷劈頭四十有二字、至此乎知蛇蝎性靈、本是毒。

●非是可大悟、如作佛、却迷如衆生、如道還作衆生、道從本垂迹等學也、彼如破大覺爲衆生道焉、此不謂大悟破、不謂大悟亡失、不謂迷來也不可等彼等、文本還作衆生等云云、與據付在來日當附錄。

●誠實大悟無端、却迷無端也、不有墨礙大悟迷、拈來大悟三枚、作小迷半枚也、文本無端無有端緒也、諭如圓相頭正尾正、大悟三枚、小迷半枚、無多少廣狹等量礙也、

●是以有雪山爲雪山大悟、木石假木石大悟、文本當檢發無上心卷首、是卽無餘法混雜、無我不染汚、不言可知。

●諸佛大悟爲衆生大悟、衆生大悟、大悟諸佛大悟、應不拘前後、文本輪圓具足乎、或道且行異類輪廻、這箇頭那箇頭行李乎。

●而今大悟、非自己非它己、非來而塡溝塞壑也、非去而切忌隨它覓也、爲什麼恁麼、謂隨它去也、文本前道無拘自它知也、爲什麼下、無自性因緣所生乎、不落不昧、非因非果、能切因果野狐行持。

●京兆米胡和尙令僧問仰山、今時人還假悟否、仰山云、悟卽不無爭奈落第二頭何、僧廻擧似米胡、胡深肯之、謂之今時、人人而今也、令我念過去未來現在、幾千萬而今時也、而今也、人人分上必今時也、文本人人分上人人、應永寫本作人分上、蓋寫脫耳令我念者、妙經第四卷授學無學人記品第九阿難領解偈言、世尊甚稀有、令我念過去無量諸佛、法如今日所聞、云云往檢、今所引爾、人人而今者、不去不來人人而今耳、故道人人分上必今時也、時之與吾無間隙全親密。

●或有眼睛爲今時、或有鼻孔爲今時、文本擧一例諸看或有語。

●還假悟否、此道之靜參究、應胸襟換却、應頂顚換却、文本以右、或有爲今換却、還假否、肯胸襟腹臍頂顚脚底無處不周、使用扇子、換却無物。

●近日大宋國禿子等曰、悟道是本期、如是謂而徒待悟矣、文本禿子者大涅槃經第三卷金剛身品云、善男子、我涅槃後、濁惡之世、國土荒亂、互相抄掠、人民饑餓、爾時多有爲飢餓故、發心出家、如是之人、名爲禿人、是禿人輩、見有持戒威儀具足清淨比丘、護持正法、驅逐令出若殺若害云云廣說、徒待悟者、身無修持、餬口、待悟、禿子名字中也。

●然如不照佛祖光明、但可參取眞善知識、懶惰蹉過也、古佛出世應不度脫、文本七十五棒且輕恕、一百五十難許君。

●今還假悟否、道取、不道無悟、不道有、不道來道假否、如道取今時人悟者奈何悟、諭如、道得悟則覺日來無之、道悟來也、則覺日來其悟在什麼處、道悟爲則覺悟、

有始、雖不如是道、不如是道、悟容儀時、道假悟也、（本）還假修證不等、公案、及云何忽生山河大地等、一切問處道得、豈可不如是參究乎、合掌頂戴。

●然（梵道悟則所謂然清古佛圓左）道悟則可爭奈落第二頭何則道第二頭悟也、第二頭者道爲悟麼、道得悟麼、如道悟來也、道爲也道來也道悟矣（本）落在第二應無所住而生其心、自道取也。

●然如悼落第二頭成（清本作無著非）第二頭、雖百千頭應悟、有第二頭、則非遺於是上第一頭有之也、譬如昨日我爲我、而昨日言今日第二人、不道而今悟不在昨日、非今適也、如是參取也、然大悟頭黑、大悟頭白也、（文本）於是乎諸、光陰莫虛度、佛祖身心、心不可得三世、大悟頭頭、第二第三及千萬頭、或黑或白、皆是絕待孤標也。

●正法眼藏大悟

爾時仁治三年壬寅春正月二十八日住觀音導利興聖寶林寺示衆

而今寛元二年甲辰春正月二十七日駐錫越宇吉峯古寺而書示於人天大衆（此是年號道本無之）

同二年甲辰春三月二十日侍越宇吉峯精舍堂奥次書寫之　懷弊（文本）

明和七年庚寅仲夏二十六日上午在東羽秋田仙北郡駒形莊版見內村釋堂山靈仙禪寺明窓下空手還鄉參畢矣　以回向　護法龍天善神擁衛至恩云　永平末葉本光盥

寶慶雲語著云遍界不藏、最初道佛佛、大道流轉綿密祖祖、功業現前平展、豈非不曾藏遍界乎、更道大悟現成不悟至道省悟弄悟失悟放行者、有何所覆、世尊密語無人會、無人會者大悟、頭黑頭白則不會取、親曾面孔有誰相看、迦葉當初不覆藏、塵知不覆藏、當初不落子、亥前後、靈界所有、靈有大悟底人却迷時謂之世尊密語、親密皮髓謂之大悟、語話是、故人人未見也、故不會取若能會取則則彖羅而此是、迦葉面孔也、大悟闢也、山嶽連天常吐、作咱者、訛綠豈非是不染汚、大悟乎、今云常者莫虛度、十二時中放天之與地、古今親密也、吐綠者法法時時、前後際斷也、故道谿深和月轉、流光乎、落花破餽、綿綿密密入却迷入大悟正當入、時遍界不藏、故是、日既過古之今之總無出路相逢相見何它自空手還鄉、愼勿認光影、影影響響參

涉典錄

第十大悟卷　▲大悟　修行本起經卷下、降魔品第七云、所作已成、智慧已明、明星出時廓然大悟、得無上正眞道、爲最上覺云云　▲臨濟不悟者　古尊宿卷五、興化禪師語錄曰、師諱存獎、初謁臨濟、濟問新到甚處來、云鑾城、濟云有事相借問得麼、云新戒不會、濟云打破大唐國、覓箇不會人難得參堂去　▲華嚴却迷　同卷華嚴靜禪師章出　▲米胡假悟　同卷米胡禪師章出　▲認賊爲子　宏智拈古二十九則出。永平正法眼藏涉典錄卷一尾

涉典續貂

正法眼藏涉典續貂敕卷第八　遠孫張州沙門黃泉無著輯次

【圖】大悟　大悟△因果經云、菩薩心淨、湛然不動、既降魔已、放大光明、明星出時、霍然大悟、得無上道、爲最正覺○綿密△後周書云、醫師姚僧垣、說葛循容病狀、武帝曰、用心綿密、乃至于茲○功業△一本作鴻業、文選西都賦序云、潤色鴻業、又功鴻同通○平展△宏智頌古云、平展演大鋪舒○至道△信心銘、破題云、至道無難、禮記表記云、至道以王義道以霸、莊子云、至道之要、混々默々○弄泥團△泥團、出于古鏡篇、弄泥團、傳燈藥山章云、弄泥團漢有什麼限、東觀漢記、王元曰、請一泥團、爲大王、東封函谷關○邊際△俱舍智品云、邊際定、釋云、增至究竟、故名邊際、如說涅槃、名爲實際、顯極義也○人根△傳燈卅、參同契云、人根有利鈍、道無南北祖○生知△中庸云、或生而知之○學而知△中庸云、或學而知之或困而知之○佛知△知智同焉、譬喩品云、若有衆生、從佛世尊、聞法信受、勤修精進、求一切智、佛智、無師智、自然智○無師智△譬喩品字○調御丈夫△十號之七也、佛說十號經云、調御丈夫謂具丈夫力、用而說種々諸法、調伏制御一切衆生、令離垢染得大涅槃、故號調御丈夫○一人不悟△古尊宿錄中、興化語云、臨濟曰、打破大唐國、覓個一人不悟者難得、會元興化章云、化在臨濟爲侍者、洛浦來參、濟問、甚處來浦曰鑾城來、濟曰、有事相借問得麽、浦曰、新戒不會、濟曰、打破大唐國、覓箇不會人也無○虛度光陰△石頭參同契末句○懷業△素懷本業也、一本作德業也、易繫辭云、可久則賢人之德、可大則賢人之業○巍々堂々△會元黃檗章云、百丈問巍々堂々、從何方來、檗曰、巍々堂々、從嶺南來、丈曰、巍々堂々、當爲何事、檗曰、巍々堂々、不爲別事、子張篇云、堂々乎張也、泰伯云、巍々乎其有成功也○華嚴寶智△傳燈、休靜章云、後唐莊宗、謚寶智大師、師嗣洞山、不錄鄉氏○破鏡△傳燈、仰山章云、潙山以一面鏡、寄仰山、山上堂云、且道是潙山鏡乎、是仰山鏡乎、有人道得、卽不撲破、衆無對、師乃撲破、靈雲章云、長生問、如何是向上事、師曰、打破鏡來相見、北史、陳、徐德言、尙樂昌公主、及陳政衰、與妻別、乃破鏡各持其半、妻果爲楊越公所得、德言寄詩云、鏡與人俱去、鏡歸人不歸、樂昌得詩悲泣不已、越公悽然、召德言還之、文酒清話云、桑漸爲孟州僉判、或稱縣長官、平如稱、明如鏡、漸乃上廳、折其稱、破其鏡○方席△一本、作豐席○大迷人大悟△黃泉併考諸本一本作大迷人更大迷、佳矣、可从也○認賊爲子△楞嚴二云、汝從無始、至于今生、認賊爲子、失汝元常、故受輪廻、又圓覺字面○カタガタ△古言有三用、古今、友則歌云、下帶之、道者片片別其、源氏桐壺云、世之覺華也可成御方方、源氏箒木云、人之心心云別可事形形、多可留、辨此三意、讀祖文、自燎然矣○イカヤウ△一本作イカイヤウ、乃樣也可从焉○トラ△今本墨缺須從トヲ、ヲ助聲如常○不重照△華嚴隨好光明品云、如有頗梨鏡名爲能照、一切山川等像皆於中現於汝意云何、彼諸影像可得說來入鏡中否、不也、諸業果報、亦

如是無去來出入○還作衆生△像法決疑經云、文殊白佛言、若一切衆生本是佛、若今亦修證成佛、而來生再成衆生、有何益佛言、文殊早成衆生已也」圓覺、金剛藏章云、如來復說本來成佛、十方異生本成佛道後起無明、一切如來、何時復生一切煩惱云云○百尺竿頭△傳燈、長沙章偈云、百尺竿頭須進步、十方世界是全身○切忌隨他△洞山錄云、師過水有偈云云、復出傳燈師章○滿堅塞溝△左昭云、叔向母、其弟羊舌鮒生之時、聞其泣聲曰、是多欲之兒也、雖有滿堅滿溝之日、此兒欲心、無益足之期、必也死于父質、又國語○京兆△韻會云、兆者衆數也、大衆所在、也○米胡△傳燈十一、米胡亦謂米七師、嗣于潙山○令我念過去△學記品云、世尊甚希有、令我念過去、如今日所聞○悟道是本期△潙山警策云、研窮法理以悟爲則、大慧書云、不得大悟、恐失本期○二頭ェ△一本、作二頭ニ、佳矣、蓋墨之汚也○一頭二頭△詩話云、歐陽公、見晁美叔曰、老夫當避此人放出一頭地、二頭字、雜寶藏經云、雪山有鳥、曰共命、一身二頭、諸經或曰命々梵曰迦嘍茶、○頭白頭黑△傳燈西堂章云、馬師曰、藏頭白海頭黑、家語云、白頭如新、傾蓋如故、西京雜記云、卓文君作白頭吟、晉書王尊謂諸葛恢曰、明府當作黑頭三公○仁治三年△　祖尊齡、四十有五○正月廿八日△一本作十八日、建撕記補云、今年示衆法語、正月十八日大悟卷、云云今本二字恐衍矣○吉峰古寺△吉峰、在松岡溪奥也、建撕記云、今年十一月六日マデ、吉峰ニ寓在ニテ、其後ニ禪師峯ニ移寓上已玆知、在此篇就于吉峰也、雲居、謂趙州曰、山前有個古寺基、吉峰尙存　祖菴之基矣、黃泉年廿八、九月結黨尋祖迹於永平之南北、老松白石、恍惚在于眼前也、吁、大悟畢

正法眼藏大悟註解畢

正法眼藏坐禪箴

坐禪箴

【御抄】 坐禪箴第十二　箴　をしへ、しるし、わかつ、誨　をしへ、箴のくむなり。

坐禪箴談十一段事、第一　藥山弘道大師與僧問答、兀々地思量什麼事　第二　江西南嶽問答、圖箇什麼事　第三　磨塼作鏡事、第四　如人駕車、車若不行事、第五　南嶽汝學坐禪爲學坐佛事、第六　若學坐禪、禪非坐臥事、第七　若學坐佛、佛非定相事、第八　汝若坐佛卽是殺佛事、第九　若執坐相非達理事、第十　宏智禪師坐禪箴事、第十一　永平寺和尙坐禪箴事。

【面山述贊】　拾遺第十二坐禪箴　述云、坐禪者凡聖通名、箴者治病之具、今箴乃治禪病之謂也、此病深固、直證身心脫落、則內外之病除焉、可稱大智勇健也、贊言　正見邪見、元來是虛、佛病法病、可務淨除、鳥飛如鳥、魚行似魚、見聞了了、聲色如如、透過圖佛圖作佛、三際十方難分疏。

【聞解】 正法眼藏坐禪箴卷聞解　坐禪は大小乘共にあり、四禪、四無識、八背捨、九次第定等、種種次第あり、其外外道にもあり、又儒家には靜坐と云ふありて、手筋さま〳〵なれども、今永祖は、宏智和尙の坐禪箴に本づいて作る、愚なるものは、佛の六年端坐、達祖の九年面壁は、爲修行難義したることの樣に思ふが走ではない、坐禪は三世諸佛の安住する三昧なるゆゑに、盡未來際、休してならぬ、今の坐禪と云ふは、世尊六年端坐、少林九年面壁の勝躅なり○箴は、箴規とも、箴誡とも運用

△辨、那。下割云、據
△辨、兀。下割云、不動說
△辨、那。リヲつニ作ル、辨、其下割云、異本ニひとりニ作ル、リトつト字形似タル故ニ誤乎
△辨、那。道下割云、取

す、をしゆとも、いましめとも、訓ずるなり、譬へから持つて來て云ふ、醫者が以二針石一治レ病する如く、坐禪仕樣の疾ひを治するいましめなり、俗書にも史記、師雄之酒箴は、酒のことを誡むるなり、又柳宗元が師友箴、及び夜氣箴、女箴、古文にある、大寶箴など、みないましめの義なり、今も其の意で、一異有無の四句等に片落ちすれば、坐禪の病となるゆゑに、其れを誡めて端身正坐ならしむるなり。

【那一寶】　坐禪箴　那一寶曰、坐禪者無邊際也、是辨道骨髓、祢僧慧命、兀々地上三昧也、箴與レ鍼同、竹與レ鍼分、醫人以二箴石一刺レ病、故有レ所二諷刺一而救二其失一者謂二之箴一、古醫以レ石、今以レ鍼、又有レ用レ竹、箴之所レ作乃是夏禹作、箴規箴誡皆由二此意一、此箴亦同。

藥山弘道大師坐次、有僧問、兀兀地思量什麽、師云、思量箇不思量底、僧曰、不思量底、如何思量、師云、非思量　大師の道かくのごとくなるを證して、兀坐を修學すべし、兀坐正傳すべし、兀坐の佛道につたはれる參究なり、兀兀地の思量、ひとりにあらずといへども、藥山の道は其一なり

【開解】　藥山……出二傳燈十四卷一弘道は賜號なり○かくのごとくなるを證して……如レ是の道取を證據として、參學すべしとなり、證據の據は、一つものを取りしめ、それによりてはなさぬ意なり○兀坐は坐禪のこと、この兀坐を參學して其上で兀坐を正傳すべし、兀坐が二つ重なる樣なれどもこの兀坐は正法眼藏涅槃妙心のことなり、諸佛も心源を明了するは定力より入る、又非思量は佛境界なるゆゑに兀坐は正法眼藏涅槃妙心なり、ゆゑに正傳せねばならぬ、經にも說ける如く佛道修行は只坐禪、讀經、勤他、この三つなり故に坐禪はせねばならぬ○ひとりにあらずとは、坐禪は上み云ふ通り、外道二乘等みなありてかづ〳〵一樣ならぬ、其中に藥山道取の坐禪は、其一で唯一佛乘一大事因緣にして、第二第三にわたらぬ。

【私記】　とは　影室いはく、所詮今の坐禪の姿が思量とも不思量ともいはるゝなり、此道理なるゆゑに思量とや云べき不思量とや云べき、ゆゑに如何の詞あるなり、以二此道理一、大師の道如此なるを參學して兀坐を正傳すべしとは云なり、と」かくのごとくなるとは、思量不思量非思量をいふ、思量等の餘剩物にあらざるを兀坐を參學すべしといふ」兀坐の獨孤標なるを兀坐正傳すべしといへり」兀坐の佛道につたはれる參究とは、佛道の兀坐に二邊の異端にあらざる道理をことはる語なり」參本いはく、非獨者、明夫七佛祖宗皮髓、一齊是兀地之思量也、而謂二藥山道者其一也一者、使二雲孫知二大師道親一切七佛向上事一的師資不傳也、血滴々地とみるべし」藥山の道はそれ一なりとは、思量不思量の皮肉骨髓をいふ、下にみるべし」

【御抄】　此問答を心得ぬべき樣は、兀々地と云は、今の坐禪の姿を云也、坐禪しては何事を思量するぞと、たづねたる返事に、不思量を思量するぞと被答たるを、僧重て又不思量をばなにと思量するぞと尋申に付て、師又非思量と被答たるやうに聞ゆ、今の問答更非爾、所詮今の坐禪の姿が、思量とも不思量ともいはるゝ也、此道理なるゆへに思量とや云べき、不思量とや云べき、非思量とや云べき、ゆへに如何の詞あるなり、以此道理、大師の道此くのごとくなるを參學して、兀坐を正傳すべしとは云ふなり。

此詞には二の心あるべし、一には禪坐の義をとかゝることは、祖師等多其義を被述たれども、今の藥

山の思量箇不思量底の詞、拔群したりと被讃たる詞也と云義一、又藥山の道の出現するときは、自餘の祖師等の詞は皆藥山に藏身し打取れて、藥山の道ばかり也と云義もありぬべし。

【辨註】 辨曰、衲衣下、兀坐の工夫其樣數般なり、尙又敎乘雖レ有二三三昧、四禪四無量心四無色定、八背捨八勝處、九次第定、十一切處等之品格一、藥山兀々地獨坐、其唯一大事、而非レ有二四四八九等餘義一、雖レ無二餘義一、亦非レ有二別處一、三三昧四禪四無量、乃至十一切處の上に其一なり、是什麼の一なるぞ、唯此一事實佛知見の眼目なり、必也勿二錯解一。

【那一寶】 衲衣下兀坐の功夫、有二佛祖一以來其榜樣數般也、尙又雖レ有二敎乘、三三昧、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處等之品格一、今藥山兀地之獨坐、思量箇不思量底道取、其唯一句而、非レ有二四四八九等餘義一、雖二然無二餘義一將非レ有二別處一、三三昧四禪、乃至十一切處の上に其唯一なり、是什麼の一なるぞ、所レ謂思量箇不思量底なり、此一句參得徹則百千三昧、無量妙義、唯此一事實佛知見也、謂二之自受用之王三昧一、必也勿二錯解一、兀々地不動貌、而寂靜無爲之形容、卽非思量之消息也、古佛茲に兀坐正傳との玉ふ、是此篇之綱領也、謹證據焉。

いはゆる思量箇不思量底なり、思量の皮肉骨髓なるあり、不思量の皮肉骨髓なるあり、僧のいふ、不思量底如何思量、まことに不思量底たとひふるくとも、さらにこれ如何思量なり、兀兀地に思量なからんや、兀兀地の向上なにによりてか通ぜざる、賤近の愚にあらずば、兀兀地を問著する力量あるべし、思量あるべし

△辨、量下ぜん二字アリ
△那、量下割云、セル
△辨、なりチぜる二作ル
△辨、や下兀兀地の四字ナシ、割云、異本作二兀々地の一
△辨、那、地下割云、ノ道理
△辨、那、な下割云、道途シチ
△辨、量下割云、道得ノ力量
△辨、那、思量下割云、モ

【聞解】 いはゆる其一大事因緣と云ふ心はどうじや、先づ思量箇とは、今日朝三千暮八百の念起念滅、かづ〳〵の思量がある、これを返照すれば、其まゝ不思量箇じや、無量劫來唯一念で、二念と云ふは無ひ、一念々々が夏夜の霜で、あとが無い、圓覺には、居二一切時一不レ起二妄念一と云ふは黃檗は不レ流二至第二念一と云ふも、こゝのこと、起さぬ樣にと云うて、死んだ樣に仕てをることでは無い、安念は本不起なるものゆゑに、起る初念際を返照して見れば、何にも起滅するものは無い、これ思量が其儘不思量じや○其坐禪するには、凡夫では思量のみで居る人もあり○又二乘境界では不思量にして空忍を守る人もあり○これ等は皆かた〳〵の疾であるから○藥山の道取のごとき思二量不思量一で無ければならぬ○同條雖レ臥各自作レ夢なり○不思量底人人坐禪蒲團上の行李は今日に始らぬ久話頭なれども、今日如何思量せると問ふた、其問ふた心は、思量は如何なる物ぞ、不思量とはいかなる物ぞと、返照する意なり、如何と云ふが、この僧の力量なり○兀々地に思量なからんや……これから下して判釋する、兀々地非思量の處に、思量なからんや、あるは、二乘を超えた境界、この兀々地に思量あると云ふ思量は、藥山の答話の非思量で佛境界なり○兀兀地の向上……この兀々地は思量と不思量とを超えた佛境界の非思量のことなり、ゆゑに向上といふ○この僧は、凡夫の思量と二乘の不思量と佛の非思量とを三つに見て居る、故に兀坐上王三昧の道理が通せず、故に愚見賤近にして、兀々地の非思量底の王三昧を不二問著一、浮虛として居る、こゝで僧の問處が終る。

【私記】 とは　參本いはく、不思量底言、雖レ舊二于耳聞一、而復進二歩於如何思量一、與麼進歩、豈疎二不思量底一乎、是卽前道兀兀地思量也而已、故云無レ思二量于兀兀地一耶、厥兀兀地思量也、在二兀兀地向上不思量一、

と」これはこの僧の如何思量の進歩を兀兀地に行李せしむるなり、兀兀地に向上向下の功德あるがゆゑに、兀兀地の向上なにによりてか通せざるといへり」問著する力量ある、すなはちこれ兀兀地の游戯なるがゆゑに、兀兀地を問著する力量あるべし、思量あるべしといへり」

【御抄】　いはゆる思量箇不思量底なりとは、此詞の旨を殊被舉也、又思量と云ふ事は心意識に仰て云詞なり、皮肉骨髓は身に仰て是を談ず、しかるに思量の皮肉骨髓とある詞、大に不被心得、但今坐禪の委をすでに思量と談ずる上は、坐禪の皮肉骨髓にてあるべきなり、今更非可驚。

不思量底たとひふるくともと云は、不思量底はしばらくさて置と云心地也、其はさてをく、更にこれ如何思量と云也、不思底の道理はさてをく、如何思量と云は、不思量と云べきか、思量と云べきかの道理を如何とは云也、是則不思量にもあたり、思量にもあたり如何にもあたる也。

實爭兀々地に思量なかるべき、兀々地の向上何によりてか通せざるべき、賤近の愚に非はと云ふは、今の佛祖の坐禪の儀にくらき人を指歟、兀々地を問著する力量あるべし思量あるべしとは、佛祖の坐禪の理を參學する人を云也。

【辨註】　辨曰、漸く思量上に向て、得皮肉骨髓する劣根底あり、是は思量を究盡すれば無可思量不思量なりとしる、例せば今時を及盡して、那邊に轉ずる功動邊の修證なり、直に不思量上に、得皮肉骨髓する上根底あり、是は一切は不思量の思量なりとしる、例せば直に那地を超過して、這裡に行履底の人、全不假修證なり、然も共に思量箇是不思量、兀坐は其一なりといへども、唯是各人に利鈍あればなり、所謂雖則同床打睡、未免各自作夢是也。

辨曰、誠に禪坐上不思量の事は、今日に始まれるにあらず、古く佛祖あつてより爾なりといへども、今更に是這不思量底處を、和尚如何思量せるとの玉ふなれば、不可無思量、如何思量なさるゝやと問著せるは、此僧不知兀々地思量卽不思量、思量と不思量とは、兩般なるものと義解する故に、禪坐上兀々地なる則不知痛癢、無記心なるべし、思量は紛飛生滅する妄想なりと嫌ひ、不起一念ならしめんと、兀坐するを以ての故に、和尚の思量箇不思量底の思量は、いか樣の思量なりや、いかんと問ふなり。

辨曰、此僧思と不思と分別する故に、兀坐向上の思量箇不思量の道理に不通のみ、向上とは只兀々地に向ふ上と云義なり、兀々地より外別に、向上ありと見るべからず、異本に兀々地の向上なにによりてか通せざるとあり可考。

【那一寶】　思量の皮肉骨髓とは思量の箇々卽是不思量なる皮肉骨髓なり、不思量の皮肉骨髓とは、不思量の全體卽是思量の箇々なる皮肉骨髓なり、思量與不思量俱是吾汝單傳之皮肉骨髓なり、上に思量箇これ不思量底なりと、これの字を加へ給ふ此這宗旨なり、箇は箇々の意にて朝三千暮八百の思慮を云なり、又義に思量の皮肉骨髓とは、思量を究盡して無可思量、不思量なりと、今時を及盡して那邊に轉ずる功動の修證を云ふ、不思量の皮肉骨髓とは、直に那地を超過して這裡に行履底の人、全不假修證を云ふ、思量箇不思量の兀坐は其れ一なりといへども、各人有利鈍故なり、所謂雖同床打睡、未免各自作夢是也。

禪坐上不思量底の事、今日に始まれるに非ず、有佛祖より經歷來家常の商量なりといへども、今更に是這更不思量底を思量すとの給ふなれば、兀々地にも不可無思量、如何が思量して是ならんと問著するなり、此僧不通兀坐宗乘、思と不思と兩般なるものと思ひ、兀々地は不知痛痒無記心なる

△辨、と下割云、尋常汝が左之右之一切處、皆是非思量ノ用處ニシテ

△辨、し下割云、於ル中猶又兀々地ノ坐上ニハ

△辨、た下割云、使用シ

△辨、とも下割云、無我ノ眞我ニシテ分別ノ

△那、す下割云、思量卽非思量ノ思量ナリト、知レ是ニ

べしと義解す、故に藥山道底の思量は別の好境界ならんと問著す、今時學坐禪人不レ逢ニ正師一的隨ニ此見一者夥矣。

此僧思量不思量の兀々向上の坐上に不レ能レ通ニ活機一、故になに丶よりてか通せざる、賤近の愚夫なりと抑して廣く佛祖屋裡坐禪の宗旨に暗者を誡め給ふ、若大心の衲子ならば、兀々地の道理を通達して問取すべきを問著し、道得する力量あるべし、思量參究もあるべしとなり、向上とは兀々地より外別に向上と見るべからず、兀々地に向ふ上と云義なり。

大師いはく、非思量、いはゆる非思量を使用すること、玲瓏なりといへども、不思量底を思量するには、かならず非思量をもちゐるなり、非思量にたれあり、たれわれを保任す、兀兀地たとひ我なりとも、思量のみにあらず、兀兀地を擧頭するなり、兀兀地たとひ兀兀地なりとも、兀兀地いかでか兀兀地を思量せん、しかあればすなはち兀兀地は、佛量にあらず、法量にあらず、悟量にあらず、會量にあらざるなり

【聞解】 大師いはく……非思量は佛境界なり○使用は、日用の左使右使、一切處に非思量を使ふて居ること不レ昧とはいへども、其使用する中について、坐蒲上で、非思量を思量するには、必ず非思量の智慧を用ゆるなり、思量が卽不思量と、有無に落ちずして有無雙べ照すが佛智なり○非思量にたれあり……非思量は佛にあづけたことで無い、誰れが非思量、非思量が誰れ誰れと、非思量と同皮同肉一

△辨、頭下割云、擧首△那、割云、頭ハ助字ナリ

△辨、那、地下割云、ノ坐禪

△辨、ざるなリ。チ。ず。ニ作ル

體也、故にたれが我を保護任持し、我が誰を保護任持して同一體なり、これは非思量の境界を云ふ、向ふからいへば、誰れ、此方から道へば我で、盡大地に誰れで無いもの無く、我れで無いものは無い、能所一枚非思量の全面目なり○兀々地たとひ……これを上の我と云ふて、其れを承けて云ふ、この我は常樂我淨の我と同じ、又無我法中、有ニ無我眞我一と云ふ我なり○今大意は、兀々地の誰れ我れの我は、無我の眞我にして、たとひ我なりとも、凡夫堺の我慢の我では無い、ゆゑに思量も亦凡夫の思量では無い、兀々地の非思量を擧頭し思量するなり○兀々地たとひこ丶は非思量を慥にことはる、前二句はかりに喚び出して下文で明す、兀々地の坐禪が、兀々地の坐禪を、いかでかどうして非思量せうぞ、非思量ですはりて居る、しかあれば卽佛界魔界を超ゆる在禪ゆゑに、佛量に非ず、又八萬法門の量でもない、又凡夫を轉じて聖人にする樣な悟量でもない、迷悟を超ゆるから、何でも會すると云ふものでない。

【私記】 とは　兀地にさへらるるの親切を、非思量を使用するといふ、使用は、つかひものとするなり、諸法の親切なるがゆゑに玲瓏といふ」不思量を思量するには、かならず非思量をもちゐるとは、思量、不思量、非思量のはなれ、ばなれならざる親切をいふ」非思量にたれあり、たれわれを保任すも同意なり、參本いはく、曰知道ニ非思量有ニ阿誰一、則是思量箇不思量底也、此誰保ニ任非思量我一、而更翻身轉腦則非思量、亦爲レ誰ニ于思量箇不思量底一、保任無ニ自他一、唯友ニ于雪底一也而已、と」兀兀地たとひわれなりとも思量のみにあらずとは、われといふに、たれをも含むなり、思量非思量のたれわれは、すでに兀々地となりぬれば、たれわれとはいはぬなり、ただ兀兀地を擧頭するなり、思量の語には非思量を含むなり」兀兀地たとひ兀兀地なりともとは、兀兀地の獨尊無比なり、ここをもてたと

ひ思量するも兀々地のみなるを、兀兀地いかでか兀兀地を思量せんといへり、しかあれば兀々地は、諸量に量せられざるなり」

【御抄】 非思量を使用する事玲瓏也と云へどもとは、非思量の玲瓏なる姿、すきとをりてへだてなく、殘物なしと云へども、不思量地も思量も皆、非思量と一なる故に、必非思量を用也とはある也と云也、非思量不思量地思量此三不可有差別也、坐禪の姿を指ゆへに。

非思量にたれありと云は、不思量地と思量との二をしばらくたれとはさすなり、たれわれを保任すとは、不思量地と思量とが非思量を保任する也、不思量地思量はたれにあたる、われと云は非思量にあたる也、兀々地たとひ我也とも、思量のみにあらずと云は、兀々地のときは、思量とはいはず只兀々地を擧頭するなり。

兀々地のかさなりたることは、坐禪たとひ、坐禪也とも、坐禪爭坐禪を思量せむと云詞也、坐禪究盡の道理如此いはるゝなり、兀々地佛量法量等にあらざる條勿論事なり。

【辨註】 辨曰、日用の思量、卽非思量の思量なりと、しらしめんために、非思量を使用すとの玉ふ。

辨曰、此兀坐非思量の處には誰ありて、誰か我を保護任持するあらん、唯獨自明了餘人所不見の、自受用底三昧なり。

辨曰、兀々地は只是兀々地なり、兀坐を佛道に正傳する參學なり、此段雖レ似二重言一不レ然、此僧の兀兀地思二量什麼一と問著する、藥山の兀々地は唯兀々地なり、何ぞ兀々地を兀々地なりと思量分別せん、古佛所謂坐禪は坐禪なり、坐臥非坐臥にあらずと單傳してより已來、無限の坐臥は自己なりの意旨なり、例せば自心たとひ自心なりとも、自心爭か自心を思量せん、自心は唯是自心なりと云はんが如し、

然るに今時の人師等、坐禪を學者に勸誘するに、一寸の坐禪は一寸の佛なりと云て、專ら悟を待たしめ、或は有所得の妄想窟中に蹲踞し、或は魂不散の滅法界裡に坐死せしむるのみ、實に元古佛無上の大禪を知底なきことを悲むのみ、唯一類の學者等一夏二夏の死坐を勤て、向上の事と思ひ、鼻孔を豁し大言を吐き、都て自己を欺慢し又慢二却人一、其末年に至ては、彫僞の假長老となるのみ、爭か藥山兀坐の正傳を參學せんや、誠可レ哀哉。

【那一寶】 尋常端坐經行及一切時處皆是非思量の使用にして、八面玲瓏なりといへども、信不得なる故に脫洒なることを得ず、正信を發して這不思量底を思量し、參究するに、親しく證據するとき必ず二六時中非思量を使用し來る、行佛の境界なることを正傳するなり○非思量は、文殊師利所說不思議佛境界經曰、世尊無爲者是何境界、佛言、童子無爲者非思量境界、文殊師利菩薩言、世尊非思量境界者、是佛境界。

上章の非思量を使用するの宗旨を審細に解し玉ふなり、非思量に誰ありとは、他是阿誰の誰にして、大尊貴生の非思量底を云ふ、然あれば從晝至夜千思萬慮の我を保任する底これ誰そ、卽非思量なり、更に思量の我あり、非思量の誰を保任するなり、是我保二任誰一誰保二任我一、函蓋合箭錄拄、偏正回互圓轉無礙なる兀坐上文逗風流也、又義に誰字には倭漢共に耶字を含む、故に此兀坐非思量の地には誰ありて誰か我を保護任持するあらんや、唯獨自明了餘人所不見の自受用三昧也。

此段不レ易レ解、たとひの詞をもて弄し玉ふ甚深の宗旨あり、上章に誰と云ひ我と云といへども、我所あるに非ず、設令世俗に一任して我と稱すとも、我の分別思量たゝ思量のみに非ず、兀々地の非思量を棄著するなり、是故に兀々地上はたとひ正當兀々地なりとも、兀々地爭か兀々地なりと思量し分別

△誇、那、あり。ヲいましてニ作ル

△誇、那、せる。ヲしたまふニ作ル

△辨、那、に下制云、コレ

せん、能所なく、觀諦智境を離れて兀々地は唯是兀々地なり、是兀坐を佛道に正傳する參學なり、此段雖ㇾ似ニ重言ニ不ㇾ然、例せば自心たとひ自心なりとも、自心爭か自心を思量せん、自心は唯是自心なりと云はんが如し、次下南嶽章に坐禪は坐禪なり、坐臥にあらず、坐臥にあらずと單傳するより以來無限の坐臥は自己なりとの玉ふ、古佛如ㇾ是の親示あれども、多は晩宋已來の弊を傳習して一物相似の禪を勸誘す、學者も亦昭々靈々を認めて有所得の妄想窟裏に陷入し、爭か藥山大師兀坐正傳の宗乘古佛沒量の大禪を參學することを得んや、可ㇾ哀哉。

藥山かくのごとく單傳すること、すでに釋迦牟尼佛より直下三十六代なり、藥山より向上をたづぬるに、三十六代に釋迦牟尼佛あり、かくのごとく正傳せる、すでに思量箇不思量底あり

【聞解】 釋迦佛より順に數ふれば三十代なり、權の方で示す也、又藥山より逆に數へて上れば三十六代みな釋迦文佛なり、こゝで實を顯す、如ㇾ是順逆一枚權卽是實と兀々地を正傳し來る、其正傳の法は何ぞ、思量箇不思量底あるなり。

【私記】 とは　向上向下、兀地に單傳せり」かくのごとく正傳せる、すでに思量箇不思量底ありとは、正傳に遺粒なきことばなり」

【御抄】 釋尊與藥山、向上向下の代々を擧す、是は次第次第に思量箇不思量底の道得を正傳したる樣に聞ゆ、出義もなかるべきにあらず、然而如此談ずれば、人與法各別なるやうにきこゆ、釋尊には藥山藏身し、藥山には釋尊藏身す、この時はあまた代をかさぬなむど難算歟、又思量箇不思量は釋尊與藥山あたるべきか、釋尊與藥山のあはひ思量箇不思量にあたるべき也。

△誇、那下は半アリ

【辨註】 辨曰、例を以て見ば、七佛より藥山に至て四十三代とあるべきに、不ㇾ爾ことは是今日化儀權乘の嗣法の次第なり、七佛を加ふる時は、權實兩乘の嗣法なり。

【那一寶】 兀々地は一切の量を超越せる本得の坐地、是四七二三不ニ間容ニ髮一脈に正傳し來るは、只箇の思量箇不思量底王三昧なり。

しかあるに近年おろかなる杜撰いはく、功夫坐禪、得胸襟無事了、便是平穩地也、この見解なほ小乘の學者におよばず、人天乘よりも劣なり、いかでか學佛法の漢といはん、見在大宋國に、恁麼の功夫人おほし、祖道の荒蕪かなしむべし、又一類の漢あり、坐禪辨道は、これ初心晩學の要機なり、かならずしも佛祖の行履にあらず、行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然なり、ただいまの功夫のみにかかはることなかれ、臨濟の餘流と稱するともがら、おほくこの見解なり、佛法の正命つたはれることおろそかなるによりて恁麼するなり、なにかこれ初心、いづれか初心にあらざる、初心いづれのところにかおく、しるべし學道のさだまれる參究には、坐禪辨道するなり

【聞解】 しかあるに近年……已下邪解を破す、杜撰とは唐に杜默と云ふ者、詩を作るに本據無きこと斗りを言ふ、其れを借用埒も無いことを杜撰と云ふ、俗語なり○佛祖の行履にあらずと云ふ處に、佛、

阿那律の爲に針孔に絲を透し福を求め玉ふ因緣を引いて邪解の愚なるもの至レ佛不レ已例也ことを不知破す○正命は正傳慧命と云ふこと○なにかこれ初心……底意は初發心便成正覺の故に、どこに初發心と云ことあるぞと云ふて○初心と云は無いと云ふ意なり○いづれか……こゝは上段の裏を云、三世の諸佛共に皆初發菩提心の無きは一人もなし、然れば其初心と云ふに差處が無いと、こゝで初心と究竟と一同にして隔歴無いことを示す。

【私記】　とは　ただいまの功夫のみにかかはることなかれとは、邪解のもののことばなり」兀々地には初心後心の名相を脱離せり、このゆゑになにかこれ初心、いづれかこれ初心にあらざる、初心いづれのところにかおくと、拶したまふなり」

【御抄】　如文、所詮胸の内に物なくきら〳〵とある所を便是平穩地也と云ふ也、此見解を如此被嫌なり。

如文、坐禪を初心晩學の要機と嫌て、行も禪坐も禪、語默動靜體安然と云事を被嫌なり、是は坐許にてもあるまじ、行も住も禪なれば必坐して無其詮と云心地をきらふなり、況や又今の我等が行住坐臥等を指て如此いはむは、又彌沙汰の外事也、已下如文。

此詞は坐禪は初心晩學の要機也と云詞を被釋なり、抑初心とはいかなるを可云乎、法界唯心とも三界唯心とも、談せむ時の初心は何の所に置くべきぞ、何か初心にあらざる、初心と談せむ時は法界悉初心なるべし、更初心の置所あるべからず。

【辨註】　辨曰、如上の見解は未レ知二佛祖正傳坐禪一、生死事大無常迅速の、宗乘の警策をば不レ知、只屈レ足打坐一、四諦生滅等の觀法、死路頭の窟坐をなす、今時一物相似の禪者の勸化する、規矩の坐禪等は、皆是凡夫癡定なり、吾古佛王三昧篇示誨曰、驀然として盡界を超越して、佛祖の屋裡に大尊貴生なるは結跏趺坐なり、外道魔黨の頂顙を蹈飜して、佛祖の堂奥に箇中の人なることは結跏趺坐なり、佛祖の極之極を超越するはたゞこの一法なり、かのゆゑに佛祖これをいとなみてさらに餘務あらず、まさにしるべし坐の盡界と、餘の盡界とはるかにことなり、かう道理をあきらめて、佛祖の發心修行菩提涅槃を辨肓するなり、正當坐の時は、盡界それ竪なるか横なるかと參究すべし、正當坐の時その坐それいかん、飜筋斗なるか活鱍々地なるか、思量か不思量か、作か無作か、坐裏に坐すや身心裏に坐すや、坐裏身心裏等を脱落して坐すや、恁麼の千端萬端の參究あるべきなり、身の結跏趺坐すべし、心の結跏趺坐すべし、身心脱落の結跏趺坐すべしと、華嚴佛不思議法品云、一切諸佛一跏趺坐、徧滿十方無量世界、又那羅延幢勇健法第四云、一切諸佛一坐食已結跏趺坐、經前後際不可說劫、入佛所受不思議樂、其身安住寂滅不動、亦不レ廢二捨化衆生事一、菩薩瓔珞經三世法相品曰、十方諸佛一跏趺坐、徧滿三千大千世界、亦此之謂也、三昧篇しかあれば、跏趺坐を畫圖せるを見聞するを、魔王、なほをどろき、うれへをそるゝなり、いはんや眞箇に跏趺坐せんその功德、はかりつくすべからず、しかあればすなはち、よのつねに打坐するも福德無量なり、あきらかにしりぬ、結跏趺坐これ三昧王三昧なり、これ證入なり、一切の三昧はこの王三昧の眷屬なり、結跏趺坐は直身なり直心なり、直佛祖なり直修證なり、直頂顙なり直命脈なり、いま人間の皮肉骨髓を結跏して、三昧中の王三昧を結跏するなり、世尊つねに結跏趺坐を保任しましまします、諸の弟子にも結跏趺坐を正傳しましまします、人天にも結跏趺坐ををしへましますなり、七佛正傳の心印すなはちこれなりと、猶又坐禪箴の祖門宗乘の跏趺坐を參究せよ、證道歌語、一類漢は坐のことゝのみ思へり、不レ爾、只此禪之一字坐看究理の眼目なるなり、或師

清本、籠下有カ

曰、壇經と臨濟錄とは、小根初學に不可令見、是不通宗乘俗情の妄解也、寶積經百一善德天子會第三十五曰、須菩提言文殊師利汝不將護新發意菩薩而演說法、文殊師利言須菩提於意云何、若有醫人將護病者、不與辛酸苦澁等藥、而彼醫人於彼病者爲與其差爲與死耶、須菩提言是與死苦非施安樂、文殊師利言其說法者亦復如是、若將護於他恐生怖畏隱覆如是甚深之義、但以雜句綺飾文辭而爲演說、則授衆生老病死苦、不與無病安樂涅槃、或師見識以此知焉。

【那一寶】　此章は未證佛祖正傳之坐禪、生死事大無常迅速直是宗乘の警策なることを不知して、徒に四諦生滅等の觀法に依倚し、死路頭の癡坐を是と勸誘し、或は癲狂向上語路、亂走繩墨外、或は稱規矩坐禪屈足算香等是とする多、故此悲嘆の示誨あり、祖恩を感得して兀坐正傳の坐禪を勸修すべし、初心等とはいかなるを初心と云ぞ、初心もあり後心もあるか、三界唯心と云ふときは、何れを初心とするぞ、心の初相を知らば何れか又初心にあらざる、到者裡、初心と云ふも早變了也、故初心何處にかをくとの玉ふ、著眼看せよ。

その榜樣の宗旨は、作佛をもとめざる行佛あり、行佛さらに作佛にあらざるがゆゑに、公案見成なり、身佛さらに作佛にあらず、羅籠打破すれば、坐佛さらに作佛をさへず、正當恁麼のとき、千古萬古ともにもとより佛にいり魔にいるちからあり、進歩退歩、したしく溝にみち壑にみつ量あるなり

【聞解】　榜樣……榜樣めじるし樣式手本○作佛をはからず大悟を不貪、これが今日の行佛なり、脚下から佛を蹴出すと云ふも、この行佛のこと、この今日の上行佛の境界は、公案見成で、歷劫つひぞ仕ならされぬもの、其ごとく衆生を仕ならして、佛にすると云ふやうなことはない、其れゆゑに、今日の身佛が、幻化空身の法身であるからさらに面を換へ作佛することは無い○羅籠打破……これからは來を示す、上に向て作佛を求める抔は、みな羅籠に縛せらるゆゑに、「佛には心もならず身もならず、ならぬものこそ、ならぬなりけり」と云ふ歌を引いてこれ底は、みな羅籠なりと破す、向上向下共に羅籠、それを打破し、出頭すれば、坐禪するも、作佛するも、迷も悟も、すべてさへぬ、この時は或歌に、「佛には心もならず身もならず、ひの木さわらがなるとこそきけ」と云ふ處なり、正當この時は千萬古から、進んで佛界、下つて魔界に入るも自由、進むも退くも、壑に滿ち溝に塞つて一切處一切時、佛魔に入り、順にも得たり逆にも得たり。

【私記】　とは　作佛行佛身佛の獨立なるがゆゑに對待なし、ゆゑに作佛をもとめざる行佛あり、行佛さらに作佛にあらず、身佛さらに作佛にあらずといふ、この行作身をのをの作家なるがゆゑに、公案現成なりといへり」この身行作の羅籠を打破すれば、兀々地の現成なるがゆゑに坐佛さらに作佛をさえずといふ、このとき千古萬古進歩退歩佛魔溝壑ともにさへざるなり、兀々地の單傳しかあるべきなり」

【御抄】　今の坐禪作佛を不求行佛あり、行佛更非作佛道理なるべし、作佛の公按見成也、行佛の公按現成なるべし。

佛に成と云へば、かならず先身をさしいだすなり、身佛と云はむ時は、一向身佛なるべし、身佛外に餘佛あるべからず、身佛を作佛すると不可思、羅籠打破とは、今さき云行佛作佛身佛等のくさ〳〵とある詞共を打破つれば、坐佛さらに作佛すと云へども、さらにさえずと云なり、所詮此心地は至極解脫の理にいたりぬれば、身が作佛すると云も何と云詞も、さえぬなりと云也。

此の羅籠打破の正當恁麼の時は、佛に入魔に入と云、魔も進も退も皆圓滿々足の義也、故溝にみち壑にみつ量ありとは云也。

【辨註】辨曰、一切時一切處行佛の威儀、甚大久遠本佛更に再び作佛すべきなし、前の行佛威儀篇可合見。

辨曰、作佛をさへずとあるは、佛性篇にて辨ずる如く、さへと云ふは、そへると云歌の言葉なり、言は今日の卽身本來成佛なることを了すれば、坐佛さらに再び作佛を要するなし、故に前所云作佛をもとめざる行佛の宗旨ありと、羅籠打破則千古萬古進歩して佛に入り、退歩して魔に入る力ありて、無處不至、不涉去來、不動本處、溝にみち壑にみつる量あつて、今人々箇々の坐佛卽是本佛なれば、更に作佛を要するなし、蓋身佛更非作佛の語を、審細に辨取せよ、前に行佛さらに作佛にあらざるが故に、現成公案なりとある是也、僧曰兀々地思量什麼、師曰思量箇不思量底此句を古佛の講解に思量箇是れ不思量底と、是の字を入て、思量の箇々是不思量なりと示し玉ふ、如是なるを破句讀と云、著眼看せよ、兀々地は且置、日用朝三千暮八百の分別思想、卽是箇々不思量底なることを參究せよ、雖然自古一物相似の客人は、祖師公案は無義理無理會なりと云て、而今元古佛の如く不能向公案節角請訛處七穿八穴去敎學人打破漆桶、所以者何、宋朝已來諸師、無自達知見者、悉皆準擬其格體耳、是故無義路無理會、不在言句上莫認言迹之語、終成叢林之口實、蓋祖師公案將夫非言句耶、何爲怖畏言句耶、粤有雲棲瞎老禿曰、經律論有義路、不講則不明、宗門無義路、講之則反晦文爾所言宗門、不知何宗門、語話宗門者、須是宗門人始不見爾有宗門眼、吁吾國一物相似禪德不辨奴郎跟隨彼後曰、栢樹子花藥欄等公案、無文無句無義無理、只須參不可講矣參講之義、海水一滴具辨之焉、有無二邊皆爾分別妄想喚什麼爲有義又爲無義耶、固知爾等言有無兩義路者、妄想所對虛義、非佛道眞實義、不見陳尙書問雲門、儒書中卽不問、三乘十二分敎自有座主、作麼生是禪僧行脚事、師曰曾問幾人來、書曰卽今問上座、師曰卽今且置作麼生是敎意、書曰黃卷赤軸、師曰這箇、文字語言作麼生是敎意、書曰口欲談而辭喪心欲緣而慮亡、師曰口欲談而辭喪爲對有言心欲緣而慮亡爲對妄想、作麼生是敎意、書無語、師曰聞說尙書看法華經是否、曰是、師曰經中道、一切治生產業皆與實相不相違背、且道非非想天有幾人退位、（涅槃經第二十三德王品之五、三十四丁云、一切凡夫唯觀於果不觀於因緣如犬逐塊不逐於人、凡夫之人亦復如是唯觀於果不觀於因緣以不觀故從非想退還三惡趣、）書無語、這箇敎意作麼生、是言有義然乎、又言無義然乎、未審爾向什麼處下得箇抑如來敎意所謂如是大果報、種々性相義、我及十方佛、乃能知是事、是法不可示、言辭相寂滅、爾作麼生講、又微塵裡大千經卷、則有那文義有那句義、試探尋得出看、顧如爾等類、欲以花藥欄糊飾清淨法身、以栢樹子接著祖師來意、以其句義妄解、而理路不合故、言公案無義路乎、有義無義兩是計度惡知見也、稜伽云、有無俱是邊、乃至心所行、彼心行滅已、名爲正心滅、雲門答一代時敎道對一說、巴陵答祖意敎意道雖上樹鴨下水、爾看若何、大陽山楷和尙問投子、佛祖意句如家常茶飯、離之餘還有爲人言句也無、且道家常茶飯爲有義理乎、爲無義理乎、將夫知如來無二種語麼、蓋法元無有無、只由權所見而有無耳、一切有無分別者、斷常二見妄法也、愼勿謗正法輪好、如爾所言則一千七百公案亦一向作無義無理虛妄戲談去乎、這般見解謂之破落黨瞎長老、又叢林渾言宗門參禪標子不由師得不由師聞、自悟又自得寧觀他朶頤、如是錯解參禪二字來已尙矣、是以違却或從知識或從經卷佛祖示訓、夫不由他得者在爾自心親冐而矣、六祖大師云、善知識雖有得道全分因緣、自心內有知識自悟、若起邪迷妄念顚

倒、外善知識雖有教授、教不可得、師に由と不由と、聞と不聞とを不可論、又佛法に爲ことゝ不爲ことゝあることなし、蓋參禪者萬像森羅見聞上聲色裡、無參不參無禪不禪、然故古佛所謂車若不行を參究せんには、不行ありとも參ずべし、不行なしとも參ずべし、行と不行と、時なるべきことあるが故にと、是以當知無言說のみを、參禪と云べからず、於語於默時なるべきことあることを知れ、是謂有時眼目若逢達道的則何語默對之有、今時の人師等、徒本則於直殿司宜默不宜誼之語、而混忌語而貴默、倒六和合口耳何咎、手眼通身徧身、未夢見在、噫可笑而又可哭哉、自宋朝來至于今日、只是一統令學人拈提趙州無話曰、不作有無會、不作虛無會、如呑了熱鐵丸似撞著峭壁崖晝夜嘷吠無々無々、舉將來舉將去自然有證契大期、吁謂之無的位野鐵炮、縱拈提公案不必恁麼事、古佛正法眼藏中、舉拈趙州無字、大悟却迷、藥山兀坐、磨塼打車、他心通等話、其義路如何究之盡之、向所無往而可究盡、教學人自爾得其本義現成、雖然非待其現成、若有待則咸落下意根妄識、愼勿蹉倒語句、只這如何二字參學眼目也、是則公案拈提、參究辨道差路也、慕頭作鐵橛子無義無理無文無句會者、匹如生盲鶴崙呑棗、豈知其甜酢哉、如是相似知識如麻似粟、不見大慈寰中禪師云、說得一丈不如行取一寸、老僧云此話與則所見似則似、是未是、洞山禪師云、我不恁麼道、說取行不得底行取說不得底、老僧曰愼勿謗訕、雲居禪師曰行時無說路、說時無行路、不說不行時合行什麼路、老僧曰含元殿裡勿問長安、樂普禪師云、行說俱到卽本事無、行說俱不到卽本事在、老僧曰不知是什麼本事、若能勘檢這三則公案則、須了參講無障礙、抑公案可參不可講之口令、正法滅盡之詭談、最可傷哉、古佛栢樹子篇所謂、趙州有時示衆云、諸人這一段大事を得んと思はゝ、究理坐禪してみるべし、三年五年二十年三十年に道を不得といはゝ、老僧が頭をとりて、杓につくり小便をくむべしと、如此ちかひける、實に坐禪辨道は佛道の直路なり、究理坐看すべしとの玉ふ、是亦錯解して、只管打坐とのみ、一隅の福見をなすことなかれ、唯此究理の兩字、參學の要道なることをしるべし、蓋夫趙州無字の公案を、只管に牛の吼る如く、無々無々と云、何是究理坐看と謂べきや、悲哉一盲引衆盲、俱墮火坑去、愼而此篇を熟覽し、坐禪辨道の玄旨をしるべし。

△抄、受下割云、此密隱密ノ密ニアラズシメシタキビシキ心地ナリ

△那、印下割云、四字ナキ本アリ、尤モ好シ

【那一寶】一切時一切處、行佛の威儀甚大久遠の本佛更に再び作佛の可求なき、兀々地の現成公案なり、行佛威儀篇可合見。

一切時處行佛の威儀なる故に、卽身卽是本佛何ぞ更に作佛を要せん、恁麼に羅籠打破するとき坐すれば坐佛なり、外這什麼をかそえん、是脫體の行履なり、作佛をさへずとは如佛性篇註さへと云はそえると云ふ歌の言葉なり、正當恁麼時進歩して佛に入り退歩して魔に入る力ありて、不涉去來不動本處、溝に充ち壑に塞る量あつて、無處不至、是所謂十方世界現全身之時節也、作佛を求めざる行佛身佛更非作佛の語を審細に辨取して、思量の箇々三千八百是不思量底なることを辨肯せよ。

江西大寂禪師、ちなみに南嶽大慧禪師に參學するに、密受心印よりこのかた、つねに坐禪す、南嶽あるとき、大寂のところにゆきてとふ、大德坐禪圖箇什麼、この問しづかに功夫參究すべし、そのゆゑは、坐禪より向上にあるべき圖のあるか、坐禪より格外に圖すべき道のいまだしきか、すべて圖すべからざるか、當時坐禪せるにいかなる圖か現成すると問著するか、審細に功夫す

△辨、那、嶽下割云、知二其法器一
△辨、那、に下割云、更ニ
△辨、が下割云、ト△那、が下と字アリ

べし

【開解】 江西……出二傳燈六一、密受心印は師傳中之語なり○圖二箇什麽一の圖字は謀也と註す、つもると訓ず、畫也とも註して、ゑがくと訓ず、こゝでは、つもると云ふ訓がよし、箇什麽の三字が入用なり、疑の詞でなし、しづかに參究して知るがよい、坐禪は什麽のつもりじや、佛のつもりか、法のつもりか、義雲和尚も、坐禪は正法眼藏涅槃妙心なりと、いはれたもこゝのこと○ゆゑは……今永平が、しづかに參究せよと云ふ、其ゆゑはどうじや、坐禪より超えた向上なつもりがあるか○いまだしきか……坐禪より格別につもるべき道ありてそれがまだできぬかと云ふ○すべて有法無法向上格外もすべてつもるべからざるか、これはづゝと立ち超えた處○當時……坐禪する其時いかなる神頭鬼のつもりが現成するか、佛面祖面のつもりが現成するか、と問ふたのか子細に功夫すべし。

【私記】 とは　坐禪圖箇什麽は、只管打坐脱落身心なり」あるか、いまだしきか、べからざるか、問著するかは、蒲團上の顯現にて、影像にはあらざるなり、影室いはく、是はすでに坐禪を以圖と仕ふ上は別の物にあらず、今の圖は坐禪なるべしと」起滅紛紛是什麽物、これを圖箇什麽といふ」

【御抄】 此功夫參學すべしと云言も、不審なきにあらず、其故は汝が坐禪しては何事をはかるぞと、尋ぬる言あながちに、不審なるべしとも覺ぬを此問能々功夫參學すべしとあり、知ぬ我等が心得たる問の言にてなしと云事を。

此圖箇什麽の言を如此被釋也、打任圖と云言を心得るは、物を一置てこれをつするぞ、是をはかるぞなと云ふ、是はすでに坐禪を以て圖と仕ふ上は、別の物に非ず、今の圖は坐禪なるべし、圖箇什麽の言、例の不審の詞にあらず、自坐禪向上に可有圖のあるが當時坐禪せるにいかなる圖か現成すると同著するかと云言どもが、圖箇什麽の言にはあたるなり、所詮是等皆坐禪の道理なるべし。

【辨註】 辨曰、馬祖此時非二密受心印一、南嶽大師傳著矣、如今于レ此有レ如レ是者、南嶽第一世法嗣、馬祖同參者九人中唯師有二密受心印之記一、而餘八人無二機緣一語句不レ錄故云レ爾、南嶽本傳曰、唐先天二年始往二衡岳一居二般若寺一、開元中有二沙門道一一、住二傳法院一常日坐禪、師知二法器一往問曰、大德坐禪圖二什麽一、一曰圖二作佛一、師乃取二一塼一於二彼菴前石上一磨、一曰磨レ塼作二什麽一、師曰磨作レ鏡、一曰磨レ塼豈レ得レ成レ鏡耶、師曰磨レ塼不レ成レ鏡、坐禪豈レ得二作佛一耶、一曰如何卽是、（自レ此已前不二密受一心印一顯然矣）師曰如二人駕レ車、車若不レ行打レ車卽是打レ牛卽是、一無對、乃至一聞二示誨一如レ飲二醍醐一、禮拜問曰如何用心卽合二無相三昧一、乃至聽二吾偈一曰、心地含二諸種一、遇レ澤悉皆萌、三昧華無相、何壞復何成、一蒙二開悟一心意超然侍奉十秋、日益二玄奧一、（馬祖從レ是亡二所求所得一、通二佛祖骨髓一、師、入室弟子總有二六人一、師各印可云、汝等六人同證二吾身一、各契二一路一、一人得二吾眉一、善二威儀一（常浩）一人得二吾耳一、善聽レ理（坦然）一人得二吾鼻一、善知レ氣（神照）一人得二吾舌一、善譚說（嚴峻）一人得二吾心一、善二古今一（道）一人得二吾眼一、善二顧盼一（智達）一人得二吾耳一、善聽レ理（坦然）一人得二吾鼻一、善住、若達二心地一、所作無レ礙、非レ遇二上根一、宜慎レ辭哉、磨塼作鏡、與二坐禪作佛一、有二天地懸隔深旨一、在二行佛篇古鏡篇畫餅篇佛向上篇一、辨註可二併見一、然或無智盲禿曰、有レ馬祖從前密受心印故、坐禪豈レ作レ佛耶、磨塼豈レ得レ成レ鏡耶、同口一舌妄解故、爲レ彼叨々地打二口費一耳、悲哉、粤依文解義一物相似客人等、依二此密受心印文一、近代宗門唱二出密付顯拂之妄稱一、噫有二什麽死急一、於二祖師心印一、奚効二顯密於經論師一耶。

【那一寶】 馬祖此時非密受心印、南嶽大師傳著矣、本傳曰、先天二年始往二衡岳一、居二般若寺一、開元中有二道一一、住二傳法院一、常日坐禪師知二法器一往問曰、大德坐禪圖二什麽一、一曰圖二作佛一、師乃取二一塼一於二彼庵前、

△鞞、ピ下割ス、此語ニ眼ヲ著ケヨ、下ハ其意ヲ示シ玉フ

石上ニ磨、一日磨レ塼作ニ什麼一、師曰磨作レ鏡、一曰磨レ塼豈レ得レ成レ鏡耶、師曰磨レ塼不レ成レ鏡、坐禪豈レ得ニ作佛一耶、一曰如何卽是、（自此已前不ニ審受心印一顧然矣）師曰、如ニ人駕レ車、車若不レ行打レ車卽是、打レ牛卽是、一無レ對、乃至一問ニ示誨一、如レ飲ニ醍醐一、禮拜問曰、如何用心卽合ニ無相三昧一、乃至聽ニ吾偈一、心地含ニ諸種一、遇レ澤悉皆萌、三昧華無相、何壞復何成、一蒙ニ開悟一心意超然、侍奉十秋日益ニ玄奧一（馬祖從是亡ニ所求所得一通ニ佛祖骨髓一塼來塼現の義子あることを知るのみ）師入室弟子總有ニ六人一、師各印可云、汝等六人同證ニ吾身一各契ニ一路一、一人得ニ吾眉一、善ニ威儀一（常治）一人得ニ吾眼一、善ニ顧盼一（智通）一人得ニ吾耳一、善聽レ理（坦然）一人得ニ吾鼻一、善知氣（神照）一人得ニ吾舌一、善譚說（嚴峻）一人得ニ吾心一、善ニ古今一（道一）又曰一切法皆從レ心生、心無ニ所生一法無ニ能住一、若達ニ心地一、所作無礙、非レ遇ニ上根一宜レ愼レ辭哉、文、南嶽法嗣、馬祖同參者有ニ九人一中唯師有ニ密受心印之記一、四家錄亦磨塼因緣後出ニ密受心印語一合考、然從ニ密受心印一以來常坐禪言者、恐古佛偶諳記之失乎、若不レ然此磨塼因緣自レ古但一時激勵判來也、而古佛宗眼看レ破有圖作佛磨作鏡等宗乘巴鼻而、評ニ唱之一、實未曾有玄談也、故記ニ密受心印以來一、亦是有時眼目轉換妙處乎、要レ之擧レ拈如ニ馬天師一初中後但打坐外無ニ餘務一、證ニ據坐禪是證上修而佛祖慧命一、以勸ニ誘將來一之示誨乎。

彫龍を愛するより、すすみて眞龍を愛すべし、彫龍眞龍ともに雲雨の能あること、學習すべし。

△鞞、貴、賤下ノ字アリ

【聞解】 彫龍は、後漢書列傳二十二卷載焉、葉公之故事なり、今こゝでは、彫龍は近き蒲上の結跏趺座の容儀、あやなしるがきたるもの、其れを愛し、其れより進んで遠き坐禪の德力を愛すべしとは、これ身心一枚を明す○眞龍も彫龍も共に起レ雲致レ雨す功德の働きがある、坐禪が手に入れば、身にも心にも自由を得るなり。

【私記】 とは 彫龍は、思量不思量なり、眞龍は兀々地の擧頭なり、彫龍にあらざれば、眞龍を眞龍ならしむることあたはず、ここをもて彫龍眞龍ともに雲雨の能ありといへり」

【御抄】 是はあまりに龍を愛して繪にもかき、木にも作ていくらも龍を翫けり、この志にこたへてまことの龍が現たりける時、恐怖してはしり去ぬ、是喩を今被引出也、これは坐禪與作佛のあはひを、此眞龍彫龍に被喩也、其故は坐禪は今の作業、此作業の力によりて、成佛得道すと、打任ては心得也、今の坐禪非爾、坐禪作佛只差別不可有、坐禪をば彫龍にたとへ作佛をば眞龍にたとふ、詮は彫龍も眞龍も一なりと心得る佛祖相傳の坐禪の道理なるべし、作佛をまたざる坐禪なるがゆへに、彫龍眞龍共に雲雨の能あることを學習すべしと被決也。

【那一寶】 南嶽の問に句外の玄旨あることを弄し玉ふなり、向上格外は且置、四威儀一切時處しばらく圖ニ箇什麼一、直下に薦得せば朝三千暮八百、圖々全異同なく、彫龍眞龍ともに雲雨の能を全ふして、頭々物物上活鱗無礙ならん、彫龍如ニ坐禪形儀一、眞龍如ニ坐禪宗旨一なり、尙次下に一圖を廻避すれば喪身失命するの示誨あり、凡佛祖位中一切修行は皆是心上畫圖なり、圖謀也、畫也、故に古佛葉公彫龍眞龍故實を用ひ玉ふも此意なり。

遠を貴することなかれ、遠を賤することなかれ、遠に慣熟なるべし、近を賤することなかれ、近を貴することなかれ、近に慣熟なるべし、目をかろくすることなかれ、目をおもくすることなかれ、耳をおもくすることなかれ、耳をか

ろくすることなかれ、耳目をして聰明ならしむべし

【聞解】 遠を貴とすることなかれ……字迹出二文選第七巻一、江文通云、貴レ遠賤レ近人之常情、重レ耳輕レ目俗之恒弊と○遠く京から來たものは、惡いものでも好いと貴び、近處にあるものは好い物でも惡く思ふ、又耳に聞くは遠いで貴び重じ、目で見るは近くて輕んじ賤しむ、これは人情の常じや、雪竇頌古五十則の頌にも、この意あり、今こゝは遠きは眞龍定力、近きは坐相彫龍、この二つを片付けて取捨すれば、偏枯の病になるから、遠きにも近きにも、慣熟し、よくしなれ、うまく功夫するがよいと云ふ意○耳と目とを、輕重するなと云ふも、前の遠近の意味にて知れるなり、耳目聰明ならしむとは、遠近を慣熟すべしと云ふと同意なり、底意は遍界一枚の坐蒲團で、身心共に取ることも捨ることもならぬ、其れを眞龍の定力斗り愛すれば近きを賤して、何の坐禪線香の夜番の樣に抔と法外に走る疾になる、又彫龍の坐蒲斗り愛すれば、獨り居ても鳴らしものは止められぬと云ふやうに、繩墨に縛せらる、故に兩方共に取捨することなかれと云ふ。

【私記】 とは　耳目貴賤遠近輕重をものとせず、このなにをはかるべきのみ、ゆゑに耳目をして聰明ならしむべしといふ、聰明は、耳目の暗塞をまぬがるるをいふ、遠近に慣熟なるべしとは、遠近を兀坐するなり、慣熟は、親切の義なり

【御抄】 遠は作佛にあたり、近は坐禪にあだるべきか、遠近共に作佛也坐禪也、何を貴し何を賤むべき道理あるべからずと也、又目をかろくする事なかれ、目をおもくする事なかれと云は、世間にも千聞は一見にしかずとて目を重ずる事もあり、又一見よりも耳にて聞こそしたしけれなむど云義もあるが、是等皆一を用れば一はすてらるる道理あり、今の坐禪作佛のあはひ總て一を用、一をすつると云、勝劣取捨の義にあらず、故一を重くし一を輕ずる事不可有、坐禪も法界を盡し、作佛も法界を盡す、以此道理耳目をして、聰明ならしむべしとは云也。

【辨註】 辨曰、遠をとり近をすて、近をとり遠をすつることなく、只遠にも近にも慣熟參究せよ、慣熟說文習字下、串習慣熟也、于レ茲遠く近くとは、彫龍は近く見る處、坐禪形儀のごとし、眞龍は遠く未レ見ところ、坐禪の宗旨の如し。

辨曰、目は近を云、耳は遠を云なり、蓋坐禪に執滯する非なり、棄嫌するも非なり、耳目輕重するは、俱是取捨の妄識未達道なり、一法の取捨すべきなきことを參究せよ、雪竇所レ謂取二箇眼一兮耳必聾、捨二箇耳一兮目雙瞽是也、文選卷七江文通云、貴レ遠賤レ近人之常情、重レ耳輕レ目俗之恒蔽、聞不レ知レ見見不レ如レ聞、只能可レ令二耳目聰明一。

【那一寶】 遠近とは、彫龍如二近所一見形儀一、眞龍如二遠所未一見、宗旨目は近を云ひ、耳は遠を云ふ、蓋坐禪に執滯すれば背宗此非なり、執宗棄二嫌相一も亦非なり、然あれば耳目を貴賤輕重するは俱是取捨の妄解未達道なり、但遠近に慣熟參究して、不レ見二異同一、令二耳目聰明一則取捨脫落し坐處自安穩ならん、雪竇所レ謂取二箇眼一兮耳必聾、捨二箇耳一兮目雙瞽、是也○慣熟、說文習下、串習、慣熟也、文選卷七、江文通云、貴レ遠賤レ近人之常情、重レ耳輕レ目俗之恒蔽、聞不レ如レ見、見不レ如レ聞、只能可レ令二耳目聰明一。

△辨、那、道。下割云、得
△那、取下割云、取作レ得好

江西いはく、圖二作佛一、この道あきらめ達すべし、作佛と道取するは、いかにあるべきぞ、佛に作佛せらるるを作佛と道取するか、佛を作佛するを、作佛

下敷ヘ之
△辨、道下取字ナシ、割云、得
△辨、は下割云、元ヨリ
△辨、那、落下割云、脱洒々落
△辨、か下、かの圖三字アリ
△辨、佛下割云、ノ行ハ
△辨、ひ下割云、六度萬行等ノ
△辨、那、の下割云、坐禪作佛ノ
△辨、麼下の字アリ

と道取するか、佛を一面出兩面出するを作佛と道取するか、圖作佛は脱落にして、脱落なる圖作佛か、作佛たとひ萬般なりとも、この圖に葛藤しもてゆくを圖作佛と道取するか、しるべし大寂の道は、坐禪かならず圖作佛なり、坐禪かならず作佛の圖なり、圖は、作佛より前なるべし、作佛より後なるべし、作佛の正常恁麼時なるべし

【聞解】　こゝで坐禪圖ニ箇什麼ニと云ふがすむ、ほとけに作佛せらるゝとは向ふの所に佛が有て、佛に作らるゝか、又此方の能から佛を作り出すか、又能所に不ㇾ拘、一佛の面が出、或は佛の兩面目出るを云ふか、一面兩面は一佛二佛と云ふ程のこと、又圖作佛は、本より脱落にして畢竟無生なる圖作佛か、作佛はたとひ上に道取し來る、段々の佛祖、其外六度萬行の作佛は、萬般あるなり、其れがこれ坐禪作佛の圖に、葛藤しまどはされて、たとひ施波羅蜜から入つて、作佛で有らうが、持戒から今作佛で有らうが、一切みなこの坐禪から今作佛するか○大寂の道取は、修證のゆゑに、今日の坐禪が、必ず圖作佛なり、身心一枚なり○圖は作佛をつもる修行であれば修は因なり、作佛は果なり、因は果の前なり、知り易し、因の圖が作佛より後なるべしとは聞へ難し、けれども、この正當恁麼時の處で知れる、作佛をつもる修因が、直に作佛の正當恁麼時、果上の境界じや、因果一圓、前後際斷で、初心の辨道が本證如來の全體なり。

【私記】　とは　參本いはく、此道須ニ明達ㇾ者、兀坐之圖現成也、と」この一圖の七穿八穴なるをこの道あきらめ達すべしと提示せらるるなり」作佛と道取するは、擧一例諸なるがゆゑに、いかにあるべきぞと、投ずるなり、參本いはく、三箇道取作佛歟也、一齊是脱落上行李、而泥多佛大、水長船高と」三枚の道取するかは、終不得物の不能語言なり」一面出兩面出とは、一佛二佛の出世といはんがごとし、影室いはく、圖作佛は脱落、脱落は圖作佛、只同詞を打かへて云なりと」これは圖作佛の脱落を打かへしていふのみなり」萬般の作佛も、みなこの圖に葛藤しもてゆくがゆゑに圖作佛と道取するなり、參本いはく、雖ニ七佛列祖有ニ恒沙三昧一、而不ㇾ有ㇾ一免ニ此孤坐圖一者ニ、則葛藤葛ニ藤于此圖一將之道ニ取圖作佛一歟、是大寂道光明照也爾、と」坐禪かならず圖作佛なりとは、遠界にあらゆる作佛は、つらなりながらこの圖なり、作佛の前後は、この圖なり、ゆゑに作佛の正當恁麼時といふ」

【御抄】　江西南嶽に大德坐禪圖箇什麼と被問て、圖作佛と被答、是は無風情佛とならむずる事を圖するぞと被答たるやうに聞ゆ、非濟、此圖がやがて作佛にてある也、此圖作佛の道理が佛に作佛せらるるを、作佛と道取し、佛を作佛するを作佛と道取するやと云、道理にてある也、又佛の一面出兩面出と云は、一佛二佛と云言也、一佛二佛を道取するかと云也、此圖作佛の道理が、是等の義に當る也、坐禪作佛のあはひ、如此親切なる道理なるべし。

圖作佛は脱落、脱落は圖作佛、只同詞を打ちかへて云也、是は坐禪作佛のあはひ如此被云也、作佛たとひ萬般也とも、この圖に葛藤しもてゆくとは作佛の道理あまたなりとも、只此圖の道理也、此道理は葛藤々々をまとふ、坐禪々々をまとひ、作佛々々を經と云道理也、圖は作佛より前、作佛より後なりと云も、只圖作佛の上の前後なるべし。

【辨註】　辨曰、藥山謁ニ石頭一密領ニ玄旨一、一日坐次、石頭觀ㇾ之問曰、汝在ニ這裡一作ニ什麼一、曰一切不ㇾ爲、石頭曰恁麼卽閑坐也、曰若閑坐卽爲也、石頭曰汝道ㇾ不ㇾ爲且不ㇾ爲ニ箇什麼一、曰千聖亦不識、是何ニ

似馬祖道底、有眼察之、此時馬祖未達宗乘大定、故恁麼道得あり、是以古佛古鏡篇云、南嶽磨塼爲人方便あつて接馬祖、馬祖非作佛、而馬祖却作馬祖、佛祖正傳の功德是直指なり、故磨塼作鏡こと古佛の骨髓なり、明かに知りぬ、坐禪の作佛を待にあらざる道理なり、作佛の坐禪にかゝわれざる宗旨かくれずとの王ふ、圖作佛圖佛乘祖道一切修行、皆是心上畫圖也、圖謀也畫也、故古佛如今藥公、彫龍眞龍故實を用ひ玉ふ、後の畫併儔可併見、尋夫諸經論明佛名差別、不同、金光明經三身品、說一切如來有三種身、一化身二應身三法身、楞伽第二、法佛報佛應佛、法華論、一應佛二報佛三法佛、或說一身、或說一身三身四身十身、涅槃經說一法身、實性論、佛地論、天親般若論、解深密經、瑜伽論等、說二身、曰一寂靜法身、二得後因身、依法身說當得法身、故云得後因、亦名法身、佛地論、一生身、二法身、般若論、一眞佛二非眞佛、初法身後餘二身、深密瑜伽、一法身二解脫、說三身者金光明經、佛地經、無著金剛般若論、勝曼經、天親般若論、法華論、三經三論也、光明三身、化身應身法身、佛地經法身受用身變化身、無著金剛般若論、說法身、智相至得法身、福至得法身、勝曼經、如來妙色身等卽是化身、如來色無盡等卽受用佛、一切法常住卽是法佛、與天親般若論等三佛義同、法華論法華壽量品、彼論釋云出釋氏宮是化身、成佛已來實無量劫是報身、如實知見三界之相是法身、亦與彼同、說四種身者、楞伽金光明佛地論也、楞伽一應化身、二功德佛、三智慧佛、四如々佛、金光明、一化身非應身二應身非化身、三亦應亦化身、四非應非化身、問如何化身非應身、謂諸如來般涅槃後、以願自在故隨緣利益是名化身、如來雖般涅槃以願力自在爲物一現龍鬼等身、是趣攝故非現佛身、若化非應、應身非化前應身但爲地前菩薩等所現、佛身依定而起、現佛形故非五趣攝、名應非化、亦化身亦應身住有餘涅槃之身、依三昧起現佛形相、故名應、現人、同類有諸苦等、亦名爲化、非化身非應身謂是法身、十身佛又華嚴地佛論、大般若五百六十八卷具、馬祖圖作佛者、如此諸佛中、不如何れの佛に作らんとか求覓せらるゝや、是故古佛曰、。江西此道得はいかにあるべきぞ、佛に作佛せらるゝを作佛と道得するか、佛を作佛するを作佛と道得するか、此道理明かに體達すべしと、佛の一面出兩面出するを作佛と道得するかとは、大日經六本尊三昧品第二十八曰、爾時執金剛秘密主白佛言、世尊願說諸尊色像威驗現前、令眞言門修菩薩行諸菩薩觀緣本尊形故、卽本尊身以爲自身、無有疑惑而得悉地、乃至佛言秘密主諸尊有三種身、所謂字印形像、彼字有二種、謂聲及菩提心、印有二種、所謂有形無形、本尊身亦有二種、所謂清淨非清淨、大疏曰、清淨非清淨、謂彼行者初因有相引入無相、先觀圓明佛菩薩印身、月輪中尊初作不見、別畫僧等而觀、漸則法力所加漸得明了、尙有所障、閉目卽見開目不見、次漸開目閉目皆得明見、漸々不加作意、亦見、乃至觸身亦復有礙、猶如目對世人等也、當知如是眞言行者入灌頂道場、觀緣本尊形像故、本尊佛面を一面出兩面出、見出が如くなる、此等の眼華する樣子を、馬祖も作佛と道得するや、蓋又台家依止觀明六卽佛、理卽佛、名字卽佛、觀行卽佛、相似卽佛、分眞卽佛、究竟卽佛等を、觀じ出して、次第六佛の一面出兩面出、乃至五六面出現するを、作佛を圖すると憶測するや、微困作麼生と點檢して看よ。

辨曰、夫圖は修萬行因なり、作佛は證萬德果なり、蓋修因の圖は證果の作佛より前なるべし、作佛より後なるべし、作佛の正當恁麼の時なるべくして、前中後際唯一自心修證不二、修は證上の修にして最初發心に、人々不迷本來成佛、我今盧舍那と了達して、所修の修心全是本佛本證の全體佛心なり、是故證は圖作佛の前なり、修外無證故に、證は修中の證にして、證作佛成正覺の時本是本修の全

心なれば、修は證作佛の後なり、前後同一全無二別心一、證外無レ修故に、修卽證證卽修、無レ前無レ後作佛正當恁麼時、前後際斷間不レ容レ間、發心畢竟二不別心、如レ是二心先心最難、何者最初一念心發の始覺、卽是無上正等本覺の妙心なり、甚大久遠本然成佛、知二曾不一レ迷、是謂二祖門發菩提心一、此心發現してより、究竟正覺に到まで、たとひ無量劫來を經とも、念々只是一念不レ流二注第二念一、直下無二第二人一、縱令此中間三惡趣業因緣ありとも、唯這一念無有變易常恒不滅、是謂二之如來久遠不滅壽量一、然も修は本證の本修、證も亦本修の本證、修に無レ始證に無レ終、抑人々箇々正因佛心、以レ證言レ之則從本不レ迷、久遠成佛壽命無量常在不滅、是謂二修前證一、以レ修言レ之則我本行菩薩道壽命今猶未レ盡、修無二盡期一、是謂二證後修一、虛空有レ盡我願無レ盡、普賢大行是也、又提婆品智積菩薩云、我見二釋迦牟尼如來一、於二無量劫一求二菩薩道一未二曾止息一、以レ此視レ之、修因證果、因は前果は後なるにあらず、因外無レ果果外無レ因、修も本佛の修、證も本佛の證、修是無修の修、證亦無證の證、因果一齊前後際斷、一切時一切處、本佛初中後善、間不レ容レ息、正當恁麼時更無二餘時一、無二別處一、雖レ所二因待一而果感一、非二佛因一則不レ可レ成二佛果一、因是實相果亦實相、因通二果海一果徹二因源一、因果不二是謂二佛因佛果佛圓果滿一、是則修證一如、本來成佛の直道なり、離レ修無レ證離レ證無レ修、圓は作佛より前にして前に無レ前、中にして中に無レ中、後にして後に無レ後、三世古今唯是不レ出二當人一念一者也、優曇華篇云、大凡拈華は世尊成道より已前にあり、世尊成道と同時にあり、世尊成道より後にあり、これによりて花の成道なりと、如レ是前あり後ありといへども、前後際斷初後一時、刹那無時なることを了せよ、所レ謂是法住法位、世間相常住是也、然るに今是參禪學徒一等に謂らく、人々無始時世忽然念起無明の爲に、本然の智を昧まされ、生死輪轉迷情を衆生となれり、是故に只管打坐、坐禪辨道して、此迷情を發明し、本智現前して、成佛作祖せんと一向に禪坐上に待レ悟、譬ば北に向て越に行んとするが如し、誠可レ哀哉、不レ逢二正師一故、祖門直指の人心を不レ了、此是二乘聲聞窮子の見解、滅盡の修定にも不レ及、凡夫下劣愚癡の死定なり、法華長者窮子の比喩を以ても可レ見レ之、又或般は言、禪坐上念起念滅して紛飛難レ止、堪レ笑紛飛するを忌憚する者と、俱是儞一念、念を以て念を取捨す、如今の狂禪の急經行して、妄想を追倒さんとする是なり、譬ば人の影を惡んで追ふが如し、追ふに隨て先に走る、たとひ追ふて、死に到るも豈追著の期あらんや、是謂二愚癡迷蒙鈍漢一、古佛前頭に兀々地いかでか、兀々地を思量せんとの玉ふは裡許事なり、而今爲レ儞道、紛飛を紛飛に一任して、起るを不レ忌、止むを不レ喜、起るに就て不レ往、止むに就て不レ還、起るは起るまゝに、起るものなく、止むは止むまゝに、止むものなし、只皆己が分別を分別す、都來不レ迷不レ悟不レ止不レ起、裡許高著眼看せよ、勿二回頭轉腦一焉、僧問二雲門一、不起一念却有レ過也無、門曰須彌山、老僧報恩編に大槩を辨了也、今尙有二事在一、不起一念且置、千萬念起時却有レ過麼、照顧看、老僧常道無レ迷而、迷二不一レ可レ迷之法一、無レ悟而悟二不一レ可レ悟之法一是也、抑迷は天より降るか、悟は地より涌か、迷如二夢墮一、穿レ悟似二夢食一レ餅、本然迷はざることを信解して、一座の禪をも修せよ、刹那得レ超二越三祇劫一、不レ見華嚴普賢行品曰、無量無數劫解レ之卽一念、知二念亦無念一、如レ是見世間乃至無量諸國土、一念悉超越、經二於無量劫一、不レ動二於本處一、不可說諸劫、卽是須臾頃、莫レ見二脩與一レ短、究竟刹那法、於レ此不二妄起一、二非二分別一、衆生世界劫、諸佛及佛法、一切如二幻化一、法界悉平等、老僧多年如レ是示誨すれども一箇半箇も這那回機する人なし、粤古佛出家篇云、大般若經第三云、佛世尊言、菩薩摩訶薩、作二是思惟一、我於二何時一當レ捨二國位一、出家之日卽成二無上正等菩提一、還於二此日一轉二妙法輪一、卽令二無量無數有情遠塵離垢一、生二淨法眼一、復令レ無量無數有情、永盡二諸漏一、心慧解脫上、亦令レ無量無數有情、

於無上正等菩提得不退轉、是菩薩摩訶薩、欲成斯事應學般若波羅蜜、略文　大凡無上菩提は、出家受戒の時滿足するなり、出家の日にあらざれば成滿せず、然則出家の日を拈來して、成無上菩提の日を現成せり、成無上菩提の日を拈來するは、出家の日なり、此出家の翻筋斗する轉妙法輪なり、此出家の日卽無數の有情をして、無上菩提を不退轉ならしむるなり、自利利他ここに滿足して、阿耨菩提不退不轉なるは、出家受戒の日なり、成無上菩提かへりて、出家の日を成菩提するなり、當知出家の日、一異を超越せるなり、出家の日の中に、三阿僧祇劫を修證するなり、出家の日の中に、住無邊劫海轉妙法輪するなり、出家の日は謂如食頃にあらず、六十小劫にあらず三際を超越せり、頂顎を脫落せり出家の日、出家の日を超越せるなりと諸人者須知有恁麼出家日、初後一心初不變後後不改初、最初畢竟二不別心、故華嚴毘盧舍那品云、一切法悉入最初菩提心中住智光明、雖然如是羅籠打破すれば、出家の日は、卽出家の日なり、成道の日、卽成道の日なり、有前有後、前後際斷、非前非後修證不二、是則祖門中、大禪定の本旨なり、先德云如來於一念中、八相成道不出刹那際者、以降生時卽是成道、成道時卽是度人、度人時卽是入滅時也、所謂娘生下有師子吼是なり、上來件件古佛所謂、千里の一步の義なり、看脚下、今時鐘鼓擊節する、坐禪の本意然也否、人人箇々自心に問著して見よ、是を心のとはゞ何と答へんと云、尤も好箇の警策なり、不可放過者なり。

【那一寶】　圖作佛の道得を擧して參學の樣子を徵詰し玉ふ、佛に作佛せらるゝとは、假他力而作佛するか、佛を作佛すとは自心作佛するか、佛の一面出、兩面出とは、彼眞言行者入灌頂道場、觀緣想中に佛相を現出し（此事出大日經六三昧品并大疏中）又臺家止觀に依て、六卽佛を觀じ出して、次第六佛の一面出、兩面出、乃至五六面出現するを作佛を圖すると憶測するや、徹因作麼生と點檢し、更に如上の作佛を透脫して、無爲無作の處を圖作佛と道得するか、圖作佛の道理六度萬行等萬般なりとも、この坐禪の一圖に葛藤依倚しもてゆくを圖作佛と道取するかと、功夫し明達すべしとなり。

△辨、邪、この下劃云、作佛ノ

△辨、邪、る下劃云、萬行ノ

△辨、邪、なる

大寂の會不會に不拘、圖作佛の道取を提起して、坐禪と作佛と修證不二因果一際の旨を直指するなり、蓋夫圖は修萬行因なり、作佛證萬德果なり、作佛の前後正當恁麼時とは、前中後際唯一自心修は證上の修にして、最初發心に人々不迷本來成佛、我今盧舍那と了達して、修する所の修心全是本佛本證の全體佛心なり、是故に證は圖作佛の前なり、修外無證、故に證は修中の證にして、證作佛成正覺の時、本是本修の全心なれば、修は證作佛の後なり、前後同一全無別心、證外無修故に修卽證、證卽修、無前無後、作佛正當恁麼時、前後際斷不間容間、發心畢竟二不別心、如是二心先心最難、何者、最初一念心發の始覺卽是無上正等本覺の妙心なり、甚大久遠、本然成佛知會不迷、謂是祖門發菩提心、此心發現してより究竟正覺に到るまで、たとひ無量劫來を經とも念々只是一念不流注第二念、直下無第二人、假令此中間三惡趣業因緣ありとも、唯這一念無有變易常恆不滅、謂是如來久遠不滅壽量、然も修は本證の本修、證も亦本修の本證、修に無始、證に無終なり、抑人々箇々正因佛心、以證言之則從本不迷、久遠成佛壽命無量、常在不滅、謂是修前證、以修言之則我本行菩薩道壽命今猶未盡、修無盡期、是謂證後修、虛空有盡、我願無盡普賢大行是也。

且問すらくは、この一圖いくそばくの作佛を葛藤すとかせん、この葛藤さらに葛藤をまつふべし、このとき盡作佛の條條なる葛藤、かならず盡作佛の端的なる、みなともに條條の圖なり、一圖を廻避すべからず、一圖を廻避すると

下割云、一切ノ萬行
△那、條下、辨、の下割云、作佛ノ
△辨、り下割云、萬行萬修トモ作佛ノ△那、割云、萬行萬修トモニ
△辨、す下割云、作佛ノ
△辨、那、ば下割云、却テ
△辨、那、なり下割云、然モ
△辨、き下割云、作佛ノ△那、割云、モ作佛ノ
○喪身失命ノ說不審也

さは、喪身失命するなり、喪身失命するとき、一圖の葛藤なり

【聞解】 且問……まあとふて見ば、この作佛をはかる、初發心の圖がいく葛藤とゝかせんとは、三世十方の諸佛、一切衆生の作佛を、唯一圖に皆佛になる、其かづ、なに程の佛をまつふとしたものぞ○答へる意で、この作佛の葛藤が、さらに其上に葛藤をまとひ、是三無差別で、有情非情この作佛の葛藤にまどはされて居る、草木國土悉皆成佛じや、この時十界十如盡界みな作佛の條々一すぢ〳〵の葛藤にまとはれて一佛々々が其葛藤にまとはる、其葛藤が作佛の眞的にあたり、まとをはづれぬ、この時に、みなともに所ル有條々一箇々々みな作佛で、この作佛を外れたものなし、佛の如我昔所願、今者已滿足との給ふこゝのことなり○かうした圖を、廻避しのがれ外れては、當人が居りながら、蹉過して居る、これを廻避するは我今方坐三蓮華臺一の慧命を失ひ、無佛性の闡提人となる、然れども喪身失命したとて、棄たりはせぬ、一返照すれば佛性じやから、失命しても外の物で無い、作佛一圖の葛藤をまとふのじや、明珠卷の黑山鬼屈の進歩退歩の意趣と同一なり○永祖の葛藤とおほせらるゝは、世間に葛藤と云ふ義理とは大に違ふなり、以心傳心の如しとありて、師資一枚に、心々卽通し、間に髮をいれず、血脉不斷なるを、葛藤々々をまとふと云ふなり。

【私記】 とは 盡作佛の條條なる端的、みなともに圖なり」ここをもて廻避すべからず、廻避すれば喪身失命す、喪失すれば、一圖を保任するなり、葛藤纏二葛藤一奇也、佛祖從來共二一圖一、四大五陰非二我物一、坐禪恁地有還無、これ予が坐禪なり」

【御抄】 しばらく問すとて、此一圖不幾の作佛を葛藤すとかせむとは、此圖が作佛なる時に此圖に作佛せられぬ、作佛あるべからずと云心地也、坐禪作佛のあはひを、葛藤々々を纏と心得上は、作佛を葛藤すとかせむの詞は、此心に當るべし、ゆへに葛藤さらに葛藤を可纏と云、盡作佛の條々なると云は、此作佛の道理がともかくも被云心地なり、盡作佛の端的なるとは、此作佛の道理なににもあたりたる心地也、ゆへに皆共に條條の圖なりとは云也。

△辨、廻下割云、已下古佛語也、非二本佛文一
△辨、那、も下割云、南嶽ノ

此一圖の道理が或時は不可廻避とも云はれ、或時は廻避すとも云はるゝ也、廻避せざる時も、作佛廻避するも作佛の道理なるべし、此作佛を以て喪身失命すと云ひ、此坐禪の道理を以て喪身失命する時、一圖の葛藤也とは云なり、盡十方界眞實人體と廻避するこそ喪身失命の至極なれ。

【辨註】 辨曰、末の一句難ル辨、若分辨せば、たとひ喪身失命するも、一圖の葛藤なりとあれば通暢なり、疑しきのみ、喪身失命するときの下に、もの字を入れて見よ、時の字をもの字になをせば、猶易ル通なり、或說すらくは喪身失命を、大死的の境界なりと、何如。

【那一寶】 圖作佛の弄處、故に且問すらくはとあり、葛藤さらに葛藤をまつふとは、盡界盡法盡作佛の條々箇々なる葛藤纏葛藤にして、別種條なし、必盡作佛の端的なる一切の萬行、作佛の一圖を廻避すべからず、然に廻避せんと己見を起すは法身の慧命を喪失するなり、たとひ喪身失命するも作佛一圖の葛藤なりと、古佛轉換の點眼藥なり、又說喪身失命を大死的の境界なりと、何如。

南嶽ときに一塼をとりて、石上にあててとぐ、大寂つひにとふにいはく、師作二什麼一、まことにたれかこれを磨塼とみざらん、たれかこれを磨塼とみん、しかあれども磨塼は、かくのごとく作什麼と問せられきたるなり、作什麼なるは、かならず磨塼なり、此土佗界ことなりといへども、磨塼いまだやまざる

△辨、る下割云、トナラ
△那、は下割云、トナラバ
△辨、那、ども下割云、坐禪ノ
△辨、し下割云、ソノ宗旨ハ△那、割云其宗旨ハ從來ノ
△辨、那、業下割云、行住坐臥ノ上更
△辨、き下割云、此箇ノ△那、割云亘古亘今ノ
△辨、り下割云、上ニ所謂磨塼ノ不休宗旨トハ是ナリ、何故ニ知レ是ナレハ
△辨、べし下割云、前ニ誰カ是ヲ磨塼ト見ザラン、能カ是ヲ磨塼ト見ト云ガ如ガ、現前
△辨、なり下割云、ソノユヘハヨノツネ△那、割云、其故ハ見聞々覺々ヲ謂メテヨノツネ
△辨、法下割云、ハ
△辨、那、に下割云、佛道ニ

宗旨あるべし、自己の所見を自己の所見と決定せざるのみにあらず、萬般の作業に參學すべき宗旨あることを一定するなり、しるべし佛をみるに佛をしらず會せざるがごとく、水をみるをもしらず、山をみるをもしらざるなり、眼前の法さらに通路あるべからずと、倉卒なるは、佛學にあらざるらり

【聞解】　誰かこれを磨塼とみざらん、見て居るけんども、唯塼をみがくと計り見てうはのそらで居る、まことに磨塼の道理を誰かみん、見るものは無い、但法は耳に聞かせて、經は口に讀ませて、實に心に讀ますものはない○しかあれども……かう問ふには、必ず心あり、作ニ什麼一が肝要なり、時でいへば一切時、處で云へば一切處、何をか作すと、返照する意あり、磨塼修證の道理は見て知らざれども、作ニ什麼一、かくのごとく問せられきたるなり、其答へには、必ず磨塼なりで、修證の道理あるなり○此土……何れの佛國土でも、この磨塼坐禪修證の宗旨あるなり、これを知るがよい○自己の所見……上の磨塼の止まぬと云道理を逃る、自己の所見とは坐蒲團上の得力を云ふ、知見に見を立するは、無明の本とじやから、決定して、もふこれぎりでよいと自己の所見を住(とゞ)めて居てはならぬ、自己を見ること寃家の如しと、古人も云ふたから、自己をとゞめて、それのみならず、其上にも、まだ萬般の六度萬行、なす業(わざ)の上についても、參學すべき道理あり、布施についても、持戒についても、乃至般若等についても、參すべき宗旨あることを決定するがよい○佛を見るに……汝亦如ㇾ是吾亦如ㇾ是佛を見ながら知らずに居る、水は是水、山は是山だ、すべて本處を動せぬけれども、水を見るをも、山を見るをも知らぬ、目前無法と返照することならぬ、其れゆゑに眼前の一切諸法は、自己の大道に通路が無いと、自己と目前別物に麁相に見るは、心外に法を見て、一切の上に倉卒にいそがはしいから、水を見る什麼をか作す、山をみる、この什麼をか作すと、返照することがならぬ、其れは佛學では無し、これ迄一段。

【私記】　とは　師作什麼は、不留朕迹なり」たれわれはみな磨塼なるがゆゑに、たれが磨塼とみざらん、磨塼磨塼をみさるがゆゑに、たれか磨塼とみん、畢竟じていはば、見不見なり」かくのごとくしてとは、見不見をさす、磨塼の不曾藏なるがゆゑに、作什麼これ磨塼なり」かくのごとくしてといふ、あにただ見不見のみならんや、萬般の作業あるべし」自己の所見を自己の所見と決定せるのみにあらず、萬般の作業に參學すべき宗旨ありとは、自己の所見を一偏に執取せるは、磨塼の宗旨にとぼしきことをきらはるるなり、それを下に佛をしるに佛をしらず等と、釋せらるるなり、諸類の見のまちまちなる、三惡趣等は、佛を感ずる機もたまたまはあれども、おほくは佛をしるにもしらざるなり、山水等もまたしかり、眼前の諸法、ただわが所見の一偏のみにして、通達の路頭あるべからずとおもへるは、倉卒なる參學なり、磨塼もまたしかり、見聞覺知とのみ執すべからず、磨塼に行李を通ずるの宗旨あることを學すべきなり」

【御抄】　此問答如文、此大寂の作什麼の詞は、兀々地思量什麼と云也、什麼同詞也、是も打任たる見解には塼を磨を見て何事をなすぞと問したる樣に聞ゆ、是は坐禪とや云べき、思量箇不思量とや云べき、作佛とや云べき、鏡とや云べき、鏡とや云べきいづれと云がたき道理を例如此問となるなり、實誰か是を磨塼とみざらむ、但此大寂の作什麼の道理をうるはしく知人不可有、ゆへに誰か是を磨塼と見むとは云也、磨塼の道理は如此作什麼と云はるべき也。

△諸、那、ピ

是は此土地土盡十方界皆磨塼の道理也、ゆへに磨塼いまだやまざる宗旨有とは云也。
是は自己の所見を自己の所見と決定せざるのみに非ずとは、蹔是は我に仰たる自己の事也、吾心に山とも河とも火とも水とも思所見を決定せざるのみにあらず、萬像森羅の作業に參學すべき宗旨ある事を一定すべしとなり。
實にも佛を見も佛を不知、水を見てもつや〳〵眞實には水の理をも不知、山を見ても其理を不知、凡夫の作法顯然也、只我山を見、水を見て、山は山水は水と心得たる許にて不可有、此外通路あるべし、我見の外不可有と倉卒に思事なかれ、是非佛學にと被嫌なり、此定に塼を磨を只尋常の如く、塼を磨許と思事なかれ、塼を磨する道理、凡見の如くはなき道理を示さむ料御詞也。

【辨註】　辨曰、大寂のみならず、誰か是を磨塼と見ざらん、然も磨塼の用をみるものなし。

【那一寶】　大寂のみならず、誰か是を磨塼と見ざらん、然もこの磨塼の作用を如ㇾ實見るものなし、磨塼の道理は如ㇾ此什麼をか作すと云はるべきなり。
南嶽の磨塼すること如ㇾ是なるを大寂の作ニ什麼一と問著せる處に、偶爾として磨塼の道理現成せり、此土他界依報は殊異なりといへども、磨塼の宗旨は自萬般の作業に露現して、亙古亙今不休息なり、此道理十二時中一切處に參究すべし、然るを只自己の一所見を認執し、昭々靈々を認て眼前の諸法、見ㇾ山見ㇾ水は眼前の法にして、更に坐禪の宗旨に通路あるべからずと、倉卒なる故に脫體現前古今不休なる磨塼の消息を當面に蹉過するなり。

南嶽いはく、磨作ㇾ鏡ト、この道旨あきらむべし。磨作鏡は、道理かならずあり、

下、あきらかに五字アリ、△那、其下割云、コノ五字ナキ本モアリ

見成の公案あり、虛設なるべからず、塼はたとひ塼なりとも鏡はたとひ鏡なりとも、磨の道理を力究するに許多の榜樣あることをしるべし、古鏡も明鏡も、磨塼より作鏡をうるなるべし、もし諸鏡は磨塼よりきたるとしらざれば佛祖の道得なし、佛祖の開口なし、佛祖の出氣を見聞せず」

【聞解】　南嶽……道旨とは、道取の宗旨と云ふこと○見成と不ㇾ藏、從劫至劫變易無き公案の道理あり○虛設は虛妄施設と云ふこと○塼はたとひとは、一惡未斷の凡夫が有らうとも、又鏡は元より、大圓鏡智で有らうとも、磨き修證する道理は、力究し精出しつとめ究るには、六度萬行一方ならぬ、榜樣の目印手本のあるを知るがよい、布施からでも、持戒からでも、磨塼してゆく、これ一方ならぬ、榜樣なり○古鏡は切磋琢磨を借らぬ、自己の心鏡本覺なり、明鏡は始覺なり、これみな磨鏡のみがく處より、古鏡をも知り、明鏡をも知る○諸鏡……明鏡亦非ㇾ臺と云ふ鏡もあり、諸佛の大圓鑑と云もある、これを磨く、修證より得ると知らざるは、佛祖の道得なしと、これ佛祖道得の開口說法、佛祖の出現氣みな修證より得ることを明す、天然の釋迦自然の彌勒無きを知るべし、これ迄一段。

【私記】　とは　あらゆる現成はみな磨よりするがゆゑに現成公案なり」柳綠も花紅も、みなそれぞれなるがゆゑに、虛設なるべからずといふ」塼也鏡也、もとより不必の性相なるがゆゑに、磨の三昧を現成するなり、磨の道理を力究するに塼鏡といふより外に、そこばくの榜樣あるべきなり、佛祖の道得開口出氣みな磨塼より得來るなり」

【御抄】　大寂に師作什麼と被問て、南嶽磨作鏡と被答たり、是はとひて鏡と成さむ料と被答樣に聞ゆ、

塼はつちくれを燒きかためたるものいたづら物なり、鏡は銅萬像をうつす寶なり、如此凡夫は思付たるによりて、塼と鏡とのあはひ輕重となれり、今の磨作鏡の道理非爾、塼いかにとくとも鏡と成べからず、大略徒事也、是程の塼ならば又とかずとも鏡と成なむ旁不審也、但以鏡磨とつかふ、以塼鏡と談ず、更塼と鏡と別の物にあらず坐禪作佛のあはひも如此なり、この道理あるゆへに、磨作鏡は道理必ありとは云なり、又見成の公按あり、虛說なるべからずとは云なり。

是は塼は塼にてもあれ、鏡は鏡にてもあれ、磨の道理が力究するに、許多の榜樣有事をしるべしとは、塼鏡をはしばらくさてをく、磨の道理を盡すとき許多のしな〳〵あるなりと云也。

是は塼の道理を能々可參學心地也、所詮塼はいたづらなる物、磨するは作業と思つる自見を返々被嫌也、磨則坐禪、塼則坐禪なるがゆへに。

【辨註】　辨曰、塼にもあれ銅にもあれ、山河大地にもあれ、木杓漆桶にもあれ、頭々上物々上、磨の道理を力究するに、許多の榜樣あるなり、誠に這般言句、光前絶後の談、上古諸祖の邊にも聞ことなし、欽熟讀返照して塼の道理を力究せよ、然も磨ノ銅作ノ鏡ハ現成公案なるべし、磨ノ塼作ノ鏡ト こと何ぞ現成公案と云んや、作麼作麼。

辨曰、此磨塼事は且置、塼ニ大虛空ニ作ノ鏡ト的ノ手段あることを不ノ知、則參玄の徒と不ノ可ノ云、老僧若爲道ハ則無ニ伊出氣分ニ、唯這一大事、苦々著ニ精彩ニ參盡、坐禪圖ニ作佛ニ三乘修道、磨ノ塼作ノ鏡ト祖門參究。

【那一寶】　磨作鏡の祖道、必不ノ可ノ欺と、磨塼の宗旨を親切に示誨し玉ふなり、且道、磨ノ銅作ノ鏡ことは現成公案なるべし、磨ノ塼作ノ鏡ことと何ぞ現成公案なるや、作麼作麼、古佛古頭太密なり、更に又たとひ塼にもあれ銅にもあれ、山河大地にもあれ、木杓漆桶にもあれ、頭々上物々上、磨の道理を力究するに許多の榜樣あることを可ノ知と、誠に光前絶後の妙談、上古諸祖の邊にも未曾聞なり、欽で磨の道理を力究せよ。

磨作鏡は開佛知見の要機にして、不ノ假ニ修治ニ、不變易の眼目なり、從上の佛祖古鏡を拈じ、明鏡を擧する、皆恁麼の道理より開口し出氣し道得するなり、尙此磨塼事、且置、不ノ知ノ有ノ磨ニ大虛空ニ作ノ鏡ト的ノ手段ヲ、則不ノ可ノ言ニ衲僧ニ、著ニ精彩ニ、蓋坐禪圖ニ作佛ニ三乘修道、磨ノ塼作ノ鏡祖門參究也。

△辨、那、る。下割ニ、オ注意易頌云、學道ハ劍ニ是鐵漢ニ、著ニ手心頭ニ個判、

大寂いはく、磨塼豈得ノ成ノ鏡ト耶、まことに磨塼の鐵漢なる。佗の力量をからざれども、磨塼は成鏡にあらず、成鏡たとひ澀なりとも、すみやかなるべし

【聞解】　磨塼の鐵漢とは、修證をはげます、大丈夫の鐵漢は、他力を不ノ借ニ他ニ悟らぬと云ふこと、○たとひ其大丈夫の磨塼でも鏡には成らぬと云は宗旨あること、大通智勝佛の十劫坐道場佛法不現前と同意なり、成鏡たとひ澀なり、これ見よ有ると云ふても、すみやかならじ、三祇六十劫じや。

【私記】　とは　磨塼の獨立、これを鐵漢といふ、磨塼は成鏡にあらざるがゆゑに佗の力量をからざるなり」成鏡すなはち磨塼なるを、成鏡ことび澀なりといふなり、それこそれなれば、すみやかといふ」

【御抄】　前には磨塼作鏡と云はれ、斯には又磨塼豈得成鏡耶と云、是相違の詞に聞たれども非相違義、其故は此磨作鏡の道理のうへに、磨塼作鏡とも云はれ、磨塼豈得作鏡耶とも云はるるなり。

磨塼の鐵漢なるとは、磨塼の獨立の姿歟、實に磨塼究盡の道理、他の力量をかるべきにあらず、磨塼は不可成鏡とは、例の磨塼成鏡は成鏡なるべき道理也、成鏡たとひ澀也とも、すみやかなるべしとは、塼をとぎて鏡と成すと云ども、强爲して成すべきにあらず塼がやがて鏡なる所を、澀也ともすみやかなるべし

とも云なり。

【辨註】 辨曰、なるべしとありては義理不レ通、ならじと云ふを寫誤するならん、具に照看せよ、學佛道の鐵漢なる、自ら磨塼するに、他の力量をかりざれども、鏡とはなるべからず、成鏡たとひ譬なりと云とも速かならじ、譬指レ塼、蓋言たとひその塼は、鏡となる塼なりと云とも、三生六十劫にして可レ巨レ得、何に況や速かなるべからずと、馬祖此時未レ得二宗乘深旨一、故云如何卽是、依レ此視レ之、前に密受心印とあるは、寫誤なること決せり。

【那一寶】 此章誠にの詞を以て見るに、一二任大寂語一、次の南嶽答處の宗旨と同調に唱へ玉ふなり、誠に大寂のみに非ず、古今祖師門中學佛道の鐵漢なる全不レ假二他力一、兀坐上常雖レ用二磨塼功夫一、必非レ期二成鏡一、是卽證上の修なり、故に一回功夫現成して成鏡譬なりとも、曾て變易し換面するに非ず、唯速かなるべし、いはゆる塼來塼現鏡來鏡現の道理なり、速一字閃電光猶是鈍兵、馬祖作佛時馬祖速作二馬祖一、坐禪速作二坐禪一之語、可二併見一。

南嶽いはく、坐禪豈得二作佛一耶、あきらかにしりぬ坐禪の作佛をまつにあらざる道理あり、作佛の坐禪にかかはれざる宗旨かくれず

【聞解】 南嶽いはく……坐禪の方からいへば、坐禪は坐禪ぎりで、向ふに作佛と云ふ相手を持たぬ、目あてをしてすることでない、又作佛の方からは、坐禪に不レ拘、相手を取らぬ、坐禪は坐禪、作佛は作佛、一行三昧なり。

【私記】 とは　これ坐禪中に、作佛快便難逢の道理なり」

【御抄】 坐禪豈得作佛耶の詞は、坐禪與作佛あはひが如此云はるゝ也、坐禪與作佛至てしたしき時の理なり、坐禪とやせむ、作佛を不待、坐禪なるゆへに如此被云也、故に坐禪の作佛を待に非ざる道理あり、作佛の坐禪にかゝはれざる宗旨かくれずとは云也。

【辨註】 辨曰、明かに知ぬ、坐禪の作佛を期し、待レ悟道理にはあらざることを、何者前所レ謂坐禪辨道する、その榜樣の宗旨は、作佛をもとめざる行佛あり、行佛さらに、作佛にあらざるが故に、現成公案なりと、坐禪は只坐禪なり、作佛の不レ拘二坐禪一宗旨、行住坐臥一切時一切處、無所求無所住、七通八達なることを知るべし、不レ可二蹉過一、又古鏡篇云、南嶽曰磨塼作鏡、馬祖曰磨塼豈レ得レ成レ鏡耶、南嶽曰坐禪豈レ得レ作レ佛耶、這一段大事、自レ昔數百年の間、人多く思らく、南嶽ひとへに馬祖を勸勵すと未二必然一、大聖の行履はるかに、凡境を出離せるのみなり、大聖（南嶽のみにあらず一切の佛祖、倶に）もし磨塼の法なくば、いかでか爲人の方便あらん、爲人の力は佛祖の骨髓なり、たとひ構得すとも（他那裡の閑具にはあらず、磨塼は）尙是家具なり（家具とは禪僧家常の本具と云義なり、）家具調度にあらざれば、佛家につたはれざるなり（此磨塼の鏡は祖師屋裡の珍家具なり、）況やすでに馬祖を接すること速かなり、料知佛祖正傳の功德、是直指（此直指の兩字參學の眼目なるぞ、）なることを、實知磨塼作鏡了ずる時、馬祖作佛、馬祖作佛時、馬祖速作二馬祖一（是本覺本佛の面目也）馬祖作二馬祖一時、坐禪速作二坐禪一（坐禪唯是坐禪なり、）非二坐臥一、無限の坐臥は自己也）故に塼を磨して鏡となすこと、古佛の骨髓に住持せられきたる、しかあれば、塼のなれる古鏡あり、此鏡を磨し來時、從來も未染汚なるなり、磨塼は塼のちりあるにはあらず（著眼看せよ）たゞ塼なるを磨塼するなり、這處に作鏡の功德の現成する、卽佛祖の工夫なり、磨塼もし作鏡せずば、磨鏡も作鏡すべからざるなり、誰かはかることあらん、この（磨塼の）作に作佛あり作鏡あることを、又疑著すらくは、古鏡を磨する時、あやまりて塼と磨しなすことのあるべきか、磨時の消息は餘時の所レ測にあらず、

（只是這箇時節なり）しかあれども、南嶽の道まさに道得を道得すべきが故に、畢竟じて、卽是磨塼作鏡なるべし、今の人も今の塼を（今の塼と云はなに塼ならん、手に取て見よ、）拈じ磨してこゝろみるべし、定めて鏡とならん、塼もし鏡とならずば、人も佛になるべからず、塼を泥團なりとかろからん、人もし心あらば、塼も心あるべきなり、誰かしらん塼來塼現の鏡子あることを、誰か知ん鏡來鏡現の塼子あることをと、古鏡篇文如ㇾ是、希世叵有妙辨、歷劫不ㇾ可ㇾ得ㇾ聞、塼もし鏡とならずば、人も佛となるべからずと、這語參學の骨髓なり、不具眼底の凡僧は皆謂、人天は成佛の機易ㇾ發、故三世十方諸佛皆俱に、人世天世に出現ありと、是佛祖の閫奧を不知、凡情の妄見なり、人は佛になるものかならぬものか、若人可ㇾ作ㇾ佛塼定可ㇾ作ㇾ鏡、老僧面授篇辨ニ議衆生成佛一可ニ併見一、所ㇾ謂喚ニ取機關木人一問求ㇾ佛、施ㇾ功早晚成、是此之謂也、凡修ㇾ因待ㇾ果、盡是權門之說也、故云以ニ四諦因緣六度三十七品等萬行一修因一、證ニ得萬德果一、轉ニ金剛定一圓滿妙覺一、於ニ祖門下一、有ㇾ未ㇾ透ニ得宗乘事一在、今日馬祖、未ㇾ坐ニ佛祖正傳圓定一、故云ニ坐禪圖ニ作佛一、是以南嶽、示ニ磨塼爲人方便一、接ニ馬祖一速也、以ニ恁麼有ニ深妙玄旨一、古佛曰、實知塼作ㇾ鏡時、馬祖作ㇾ佛、馬祖作ㇾ佛時馬祖速作ニ馬祖一、馬祖作ニ馬祖一時坐禪速作ニ坐禪一、此速字看ニ如何一、或問古佛語錄上堂云、入ㇾ海算ㇾ沙空自費ㇾ力、磨ㇾ塼作ㇾ鏡枉用ニ工夫一、君不ㇾ見高々山上、雲自卷自舒、滔々澗下、水隨ㇾ曲隨ㇾ直、衆生日用如ニ雲水一、雲水自由人不ㇾ爾、若得ㇾ爾、三界輪回何處起、然も古鏡篇には、磨塼は佛祖の眼目骨髓と示し玉ふ此義如何、答偏若知ニ佛祖屋裡有ニ有時手眼一臨機方便、妙轉ニ法輪一、則於ニ恁語言三昧一何疑之有、此箇上堂巴鼻、たとひ般若の慧行と云も、算沙の費力となり、たとひ禪那の妙觀なるも、磨塼の枉用となんぬ、君不ㇾ見山上雲の卷舒、澗下水の曲直、日用自在事々無碍、是那邊に向去し、這邊に行履し來的の事、例せば佛性篇に、悉有佛性と云も訪ニ三賢、無佛性と云も訪ニ三賢、とあるを以て知るべし、佛々祖々以ニ無法之法門一、作ニ無窮之方便一、此處大有工夫在一、參ニ究正師一焉。

【那一賓】明知ぬ、坐禪の作佛を期し、待悟の道理にあらざることを、何者前所ㇾ謂坐禪辨道する、其榜樣の宗旨は、作佛を求ざる行佛あり、行佛さらに作佛にあらざるが故に、現成公案なりと、又作佛の不ㇾ拘ニ坐禪一宗旨とは、行住坐臥一切時一切處無ニ所求一無ニ所住一、七通八達なることを知るべし、古鏡篇曰、南嶽曰、磨塼作鏡、馬祖曰、磨塼豈得成鏡耶、南嶽曰、坐禪豈得作佛耶、這一段大事、自昔數百年の間人多く思へらく、南嶽ひとへに馬祖を勸勵すと、未ニ必然一、大聖（一切佛祖）の行履はるかに凡境を出離せるのみなり、大聖もし磨塼の法なくば爭爲人の方便あらん、爲人の力は佛祖の骨髓なり、たとひ構得すとも、尙是家具なり、家具調度にあらざれば佛家につたはれざるなり（磨塼の鏡は祖師屋裡珍家具なり）況や、すでに馬祖を接すること速なり、料知、佛祖正傳の功德是直指（直指兩字參學眼目なり）なることを、實知又磨塼作ㇾ鏡了（ことな）する時馬祖作佛、馬祖作佛時馬祖速作ニ馬祖一（是本佛本覺面目也）馬祖作ニ馬祖一時、坐禪速作ニ坐禪一、故に塼を磨して鏡となすこと、古佛の骨髓に住持せられきたる、然あれば塼のなれる古鏡あり、此鏡を磨し來るとき從來も未染汚なるなり、磨塼は塼のちりあるに非ず（著眼看せよ）たゞ塼なるを磨塼するなり、這處に作鏡の功德の現成する、卽佛祖の功夫なり、磨塼もし作鏡せずば、磨鏡も作鏡すべからざるなり、誰かはかることあらん、この作に作佛あり、作鏡あることを、又疑著すらくは古鏡を磨する時あやまりて塼と磨しなすことのあるべきか、磨時の消息は餘時の所ㇾ測にあらず（只是這箇時節なり）しかあれども、南嶽の道まさに道得を道得すべきが故に、畢竟じて卽是磨塼の作鏡なるべし、今の人も今の塼（是何塼ぞ）を拈じ磨してこゝろみるべし、定て鏡とならん、塼もし鏡とならずば人も佛になるべからず、塼を泥團なりと

△拂、是下劃云、自是已前
△拂、頭下劃云、坐禪作佛
△拂、頭下劃云、向上
△拂、卽是下劃云、彼此

かろしめば、人も泥團なりとかろからん、人もし心あらば塼も心あるべきなり、誰知塼來塼現の鏡子あることを、誰知鏡來鏡現の塼子あることをと、古鏡篇の文如ㇾ是、希世叵有文砂辨歷劫不可得聞也、塼もし鏡とならずば、人も佛となるべからずと、這語參學の骨髓なり、若人可ㇾ作佛、塼定可ㇾ作ㇾ鏡、永嘉所ㇾ謂、喚ニ取機關木人一問、求ㇾ佛施ㇾ功早晚成、是之謂也、或問、古佛上堂云、入ㇾ海算ㇾ沙空自費ㇾ力、磨ㇾ塼作ㇾ鏡枉用ニ功夫一（磨塼無ニ作ㇾ鏡時一）古鏡篇には、磨塼は佛祖の眼目骨髓なりと、此義如何と、儞可ㇾ知佛祖屋裡有ニ有時手眼臨機方便一、たとひ般若の慧行と云も、算沙の費力となり、禪那の妙觀なるも磨塼の枉用となんぬ、佛性篇には、悉有佛性と云も謗三寶、無佛性と云も謗三寶と云、佛々祖々以ニ無法之法門一、作ニ無窮之方便一、此處大有ニ妙處功夫在一、參ニ究正師一焉。

大寂いはく、如何卽是、いまの道取、ひとすぢに者頭の問著に相似せりといへども、那頭の卽是をも問著するなり、たとへば親友の親友に相見する時節をしるべし、われに親友なるはかれに親友なり、如何卽是、すなはち一時の出現なり

【聞解】 いまの道取ひとすぢに表計り見れば、這頭の今時坐禪作佛に似た樣なれども、坐禪佛が其まゝ殺佛なるゆゑに、坐禪に滯らぬ、久遠の那頭向上の卽是をも問著するなり、この如何卽不審の辭でない、什麼物か恁麼來と同意で、如何卽是とより外なし、熱鐵丸のごとく、手のつかぬ處、如何は那頭、卽是は這頭、法の全用なり、この這頭を譬へていはゞ、這頭の今時卽是と、那頭の如何と親く通ずるは、親友の如く、心々卽通して、血脈相續す、如何といふに、必ず卽是と云ふ通處あり、彼れは久遠の那頭に親友、我は今時這頭に親友で、久遠今時一切に通ず、故に如何卽是は、這頭兩頭の出現なり。

【私記】 とは　這頭那頭、ともに卽是なり、かれとわれとみな親友なり、參本いはく、此一時出現也者、非ㇾ指ニ劫波一、唯兀坐耳」とみるべし」

【御抄】 是は南嶽は坐禪豈得作佛耶とて坐禪して、佛に成を被不審たる詞をいかなるか卽是と大寂云たる樣に心得ぬべし非爾、努々非不審詞、いかなるも作佛と云詞也、作佛ならぬ道理不可有、ゆへに這頭の問著に相似せりとはある也、此如何卽是の詞が、又那頭の卽是をも問著する道理なる也。此親友とは坐禪與作佛のしたしき所を親友とは云なり。

此如何卽是の詞が、只疑詞にてはなくして、一時の現成公按となる也、此一時と云は、作佛の一時なるべし、無邊際の一時也。

【辨註】 辨曰、這邊の卽是を得る時は、那邊無邊際の卽是に通ずるを、我に親友なるは彼れ人ことにも親友なるに譬るなり、那邊の卽是とは、末の坐佛殺佛の向上の卽是なり、文未盡にして難ㇾ見、著眼看せよ、又義に云、我に親友なれば我も彼に親友なり、自他共に親通する如く、這頭那頭の卽是に通ずとなり、是は自他一時の出現なり。

【那一寶】 如何卽是と、這頭の問著は疑著に相似せりといへども、那頭端的の卽是を問著するなり、次下の學坐禪の端的、學坐佛の消息なり、親友の譬は自己他己共に親密にして這頭那頭の卽是に通ずる自他一時の出現なり、又義に這頭の問著とは、坐禪作物磨塼作鏡の道理に卽是の問著なり、那頭の卽是とは打車卽是打牛、卽是の道理現成を云なり、卽是の道得親友與ニ親友一彼此同一時の出現なり。

南嶽いはく、如ニ人駕車、車若不ㇾ行、打ㇾ車卽是、打ㇾ牛卽是、しばらく車若不

△辨、不下割云、哲乎
△辨、い下ふ字ナレ其下割云、ひ字脱乎
△辨、那、道下割云、取
△辨、那、し下割云、行ト不行ト
△辨、き下割云、コトアル
△辨、那、と下割云、ノミ
△辨、那、わ下割云、猶有ニ打虚空手段一

行といふは、いかならんかこれ車行、いかならんかこれ車不行、たとへば、水流は車行なるか、水不流は車行なるか、流は水の不行といふつべし、水の行は流にあらざるもあるべきなり、しかあれば車若不行の道を參究せんには、不行ありとも參ずべし、不行なしとも參ずべし、時なるべきがゆゑに、若不行の道、ひとへに不行と、道取せるにあらず、打車卽是、打牛卽是といふ、打車もあり打牛もあるべきか、打車と打牛と、ひとしかるべきか、ひとしからざるべきか、世間に打車の法なし、凡夫に打車の法なくとも、佛道に打車の法あることをしりぬ、參學の眼目なり

【聞解】　打車……大莊嚴論曰、有ニ比丘尼一、見ニ賒伽羅國婆羅門縷褐五熱炙レ身曰、汝可レ炙者而不レ炙レ之、不レ可レ炙者便炙レ之、縷褐聞已、生レ恚曰、何者可レ炙、尼曰、但炙ニ瞋恚之心一、如ニ牛駕車一、車若不レ行、乃須レ策レ牛、不レ須レ打レ車、身如レ車心如ニ彼牛一○車行はどふ、車不行はどふと、一々究めるがよい、たとへていはゞ、水流は變滅の方で、車行は無常か、又水の不流で橋は流れて水不レ流は、車不行の常住なる、か、かと云ふは走じやと云ふこと○流は水の行、無常なり○水の行は、流にあらざるとは、無常が卽眞常と云ふこと、水の行は行にあらずと見れば、直に知れる、こゝは昨夜金烏飛入レ海、今朝依レ舊一輪紅の意ですむ○不行なしとは、眞常が卽無常と云ふこと、不行ありは無常が卽眞常と云ふこと○時なる……とは、行不行ともに唯心の時なるがゆゑに、不行一槩の眞常と計り云ふでは無ひ、有常が其まゝ無常なるべし○打車便是とは、身の結跏趺坐が、それが其まゝ其れじやと云ふこと打牛は心の結伽趺坐が、其まゝ其れじやと云ふこと○世間に打車の法なしとは、世間では大莊嚴の如く、打レ車牛をして車を打することはなしといへども、佛道には打車ありと知りぬるが眼目太切なり。

【私記】　とは　いかならんかこれ車行車不行とは、行不行の作家なり」車行の轍軻なきをきこへて水の流不流は車行なることをいへり、影室いはく、山の行は、動せざるを行と云ひつべし、水はながれざるを行と云つべし、佛の行は、流轉を止を行とすれば、必ず行を行とすべからず、祖門の行は、東西の馳走を止て端坐坐禪を行とす、車の行不行いまだしらざる所なりと」流の正當時は、水の不行をながれもてゆき、流にあらざる水行もあるべきなり、これは車行の流不流を談ずるちなみに卽是の宗を示さるるなり、影室の辨たくみなりといへども、痛快ならず」時なるべきがゆゑにとは、觸處生涯轍迹なり、おすてひくての大車なるがゆゑに、ひとへに不行と道取せるにあらずといふ」べきか、べきかは、卽是なり、日あぶり、風ふく、打車の法なり」

【御抄】　大寂の如何卽是の言に付て、南嶽今重て如人駕車の言を被示也、如何卽是の言は、いかなるも作佛と云心地に付て、車牛行不行の言を重て示すに付て、今大寂の如何卽是の言に付て被述也、實にもいかならむも、作物なるべからむには車牛もるべきにあらず、但如此草子、車若不行いかならむかこれ車行、いかならむかこれ車不行と、能々心を付て可參學也、世間に人の乘車に其牛を繫て、行なむと心得むには、今佛祖所談の車牛には、大に相違すべきなり、法華經三乘の車をまうく、三乘の車の上に大白牛車を設、是大にわれ〳〵が思たる車にかはる、佛道の牛車倉卒に不可心得是を被釋に。是は如文は水流は誠車行にあたるべし、水不流は車不行にこそあたるべきに、水不流は車行也とあ

り、文の面不被心得樣にみゆ、但流をば行と心得、不流をば不行と心得、此流不流凡見を謝せむが爲とも心得つべし、其上此水流水不流、我々が眼前の法と不可心得、坐禪與作物の面目を水流水不流と心得べし、車行車不行も是等程のたけなるべし、水流水不流共に車行とあり、是は流不流にかゝはらず、車行車不行も只水流水不流程に心得べき也、流は水の不行と云つべし、打任て思にはみな上より水はながるゝを流といひ、車の行をば行と心得なむどするを、佛法には水の流の上に不流の道理あり、不流なる上に流の道理あるべし、車の行不行も如此なる道理を云也、又車若不行道を參究するには、不行ありとも不行なしとも參べしとは、行不行にかゝはらぬ道理なるべし、時なるべきが故にとは、此行不行と一時の公按現成するを、時なるべきがゆへにとは云なり。

まことに不行の道を、偏に我等が不行と心得てはあたるべからず、打車卽是と云言にて我々が不行なるべからずと云言は被心得ぬべし、佛道打車と云言談すべきなり、打車は佛法の上につかふ言、打牛はよのつねの我々が思ならはしたる打牛と不可心得、打車も打牛も只同言同心なるべし。

【辨註】辨曰、於茲當知橋流水不流もあり、水流橋不流もあることを、空手取鋤頭歩行騎水牛も亦爾。

辨曰、此章亦古今希有の示誨なり、切須著精彩、打車の法とは、坐禪外無雜用心、看經の時は看經外無雜用心、趙州所謂粥飯外無雜用心是也、行性坐臥七顛八倒困則打睡健則經行、是則佛法打車の修行、參學の眼目なり、非其人則不可言、自家屋裏實參の巴鼻なり。

【那一寶】此章傳大士空手取鋤頭、歩行騎水牛、人從橋上過、橋流水不流の偈竟を引合せて凡夫の常見を轉じ玉ふ、車の行と不行と水の流と不流と二見に渉らず、佛祖の行履を功夫參學すべし、有時は不行あり、有時は不行なし、行に不行の道理もあり、不行に行の道理ありて、行不行、星礙無罣礙なるが故に、車若不行の道、偏へに不行とのみ道取せるにあらずとの玉ふ。

師是二字不可看過、古今希有の示誨須著精彩、打車はなし、打牛はありと云は、世間の凡情なり、夫佛道打車の法とは、坐禪の時は坐禪外に無雜用心、看經の時は看經外無雜用心、四威儀百顛倒困睡健行是則佛法打車の大修行、參學の眼目なり、打車與打牛同中有異、非其人則不可言、自家屋裏實參の巴鼻なり。

△那、す下割云、何カ打車何カ打牛
△辨、那、に下割云、牧牛等ノ方便
△辨、那、併チ迸ニ作ル△辨、其下割云、散走也、斥遥也△那、髓下割云、迸同ノ莽、莽草名、一名馬帶假ノ著、可ノ爲ニ掃彗ニ又迸字注ニ斥遥也

たとひ打車の法あることを學すとも、打牛と一等なるべからず、審細に功夫すべし、打牛の法たとひよのつねにありとも、佛道の打牛は、さらにたづね參學すべし、水牯牛を打牛するか、鐵牛を打牛するか、泥牛を打牛するか、鞭打なるべきか、盡界打なるべきか、盡心打なるべきか、打併髓なるべきか拳頭打なるべきか、拳打拳あるべし牛打牛あるべし。

【聞解】打車と一等なるべからずとは、文相見損じのある處なり、こゝは身心學道卷に身を以て學道し、心を以て學道すとある意で、打牛の一等計りでない、身に修するにつき、心に證するについて、細に學すべしと云ふとなり○打牛の法は……遺教經にもあり、祖門では十牛の圖もあり、よのつねにあることなり○其尋ね參學仕樣は、潙山や南泉の異類中行の水牯牛を打するか、又風穴の祖師の印心形似鐵牛機に云ふこの樣な牛を打するか、又善月大師の無角鐵牛暗室眠ると云れた、これで打するか、又龍山の兩箇泥牛鬪入海と云ふこれ等の牛を打するか、其打し樣は鞭打し鞭を以て向に進む路あるか○

△辨、し。下割云、皆是祖門下堂奥事也

盡界打……牛ただ一頭なるゆゑに、目前の盡十方界を打する時は、盡界斗りで盡界の外に牛なし、又盡心打の時は心外に牛を見ず心斗りなり打迸髓……迸走逸也と注す、自己の赤心骨髓をほどばしらする樣にせめたてゝ打牛するか○又禿僧相見時、那箇の拳頭を擧して打するか、拳打拳……拳が拳を打し、玉發ノ光、光還自照すもあるべし、其處を云ふ時は、牛が牛を打、盡十方牛一頭で、能打所打みな牛なり。

【私記】　とは　打牛打車の獨立なるがゆゑに一等ならざるなり、水牯牛鐵牛泥牛は打牛なり、盡界、盡心、鞭髓等は、打時の究辨なり、さらに能所なきをきこへて、拳打拳、牛打牛といふ」

【御抄】　是は打牛は打牛、打車は打車なるべき所を一等なるべからずと云なり、又此道理の下には、打車打牛一等なるべしと云、道理も可有也如常。

此水牯牛鐵牛泥牛等の言、是は皆古き詞共を引きよせて被書たるなり、所詮水牯牛鐵牛泥牛なむと云へば、何事ぞやと覺えたり、是は皆水牯牛も鐵牛も泥牛も佛と云也、水牯牛打、鐵牛打、泥牛打とぞ云べきを、皆牛牛の詞下につげたるは聊子細あるべし、其故は只打の詞許を付て云へば、猶人ありて打べきやうに、能所ありて聞ゆ、牛の字を面々につければ、能所をはなれ、人ありて牛を打と云見解をはなるゝ也、鞭打なるべきかとあり、是はよのつねなる詞に聞ゆ、但此車卽是を打べき、鞭はいかなるべきぞ、只法界を法界が打程の道理なり、仍盡界打盡心打（是は三界唯心の心の事なり）打迸髓なり（是は髓を以て打心なり）拳頭打なるべしと云ふ、打任たる打牛の心地にかはるべき條顯然也、この落居する道理を決せらるゝに拳打拳、牛打牛と云ふ此道理なるべし。

【那一寶】　水牯牛、已下打牛に緣ある十種を擧して弄し玉ふ、鞭打といへば、能所の見ある故に、盡界打、乃至牛打牛と示し玉ふ、皆是祖門下無所仕沒巴鼻の弄處なり。

△辨、邪、リ。下割云、趙州勝出ニ會元邪四。

△辨、面。下割云、ノ活計

△辨、佛。下割云、眞本作ニ譯字ニ非也

大寂無對なる、いたづらに蹉過すべからず、拋塼引玉あり、回頭換面あり、

この無對、さらに攙奪すべからず

【聞解】　無對の處を蹉過するな、前方の非處なるまじき塼を拋ちすてゝ、坐禪作佛の眞玉を手前に引く處がある、又回光返照の退歩を學し、頭を手前に回し、非處の面を換へる處がある、こゝは攙奪と推し買ひ推し賣りする樣な、無理なことはなひ。

【私記】　とは　拋塼引玉回頭換面は、それがそれなるをいふ、ゆゑに攙奪すべからずと結するなり、攙奪すべからずば、不動著なり」

【御抄】　南嶽の如人駕車の言の後、大寂無對なり、此無對は至極此南嶽の言を答られたる無對と可心得、只徒に云べきを云はず閉口したる無對にはあるべからず、ゆへに徒に蹉過すべからずと被云也、拋塼引玉ありとは、かはらをなげて玉を引と云因緣あり、回頭換面とはかしらをめぐらして、面にかうと云ふ只同こと也、所詮坐禪作佛、打車打牛の心のあはひ、回頭換面程の心なり、攙奪とは市にて商人が心もゆかぬ物をしてかう事を云ふ是非道なり、今の無對、ひが事ならぬ心なり。

【那一寶】　無對の正當、拋ノ塼引ノ玉、回頭換面轉機の消息あり、等閑の事と攙奪すること勿れと、弄處の妙なり。

南嶽またしめしていはく、汝學ニ坐禪ヲ爲學ス坐佛ヲ、この道取を參究して、まさに佛祖の要機を辨取すべし、いはゆる學坐禪の端的いかなりとしらざるに、學坐佛とししりぬ、正嫡の兒孫にあらずよりは、いかでか學坐禪の學坐佛なる

と道取せん、まことにしるべし、初心の坐禪は、最初の坐禪なり、最初の坐禪は、最初の坐佛なり

【聞解】 南嶽又……こゝは學の一字が入用なり、學坐禪のまつほしは、いかなるどふしたことじやと知らざるに、これがやはり學坐禪佛と知りぬるは、佛祖正嫡の南嶽馬祖にあらずしては、どうして坐禪が其やう、坐禪、すわれは其儘佛じやとは、道取することはならぬ○初心の坐禪は……初發心の坐禪は初發心の佛なり○最初の……これは言別意同で上段と同なり。

【私記】 とは 爲學坐佛は、たゞ佛のみにあらず生佛國土、ことごとく坐するなり、一坐に法界を坐破するなり、端的は傍邊なきなり、學坐禪の端的なるがゆゑに、いかなるとしらざるなり、このしらざるの親切に坐佛するなり、初中後坐禪なるがゆゑに、初心の坐禪は、最初の坐禪なり、最初の坐禪は、最初の坐佛なり」

【御抄】 是は無殊子細、如文、坐禪は作業とのみ思之しかるに坐禪を坐佛とする事を、正嫡の兒孫に非ばと云はるゝなり。

此草子に初心晩學の要機とて坐禪必不可用なむど云人もあり、此邪見なる樣を被出なり、初心と云詞を被嫌なり、坐禪に初心後心あるべからず、縱初心後心あるべくとも坐禪の上の初心後心なるべし、前後に不可拘也。

【辨註】 辨曰、學坐禪學坐佛の學の字、是辨道の眼目なり、學ぶべきことあるか、學ぶべきことなきか。辨曰、初心とは發心の初を云、最初とは修行の初なり、言別意同なり。

△辨、那、に下、南嶽二字アリ、辨く下割云、異本脫二南嶽ノ二字一非也

△那、す下割云、此非字アルアリ

△辨、坐臥にあらず、坐臥ヲ坐臥、非坐臥ニ作ル、に下割云、異本無二非坐臥之三字一

【那一寶】 坐禪與二坐佛一是同是別、然も學一字是辨道の眼目なり、可レ學ことあるか可レ學ことなきか、如何看。

學坐禪の端的直に學坐佛なりと道取する正嫡の兒孫なり、然れば何れの打坐か坐佛にあらざる、初中後善なること、決定信受すべし、初心は發心の初を云ふ、最初は修行の初を云ふ、言別意同なり。

坐禪を道取するにいはく、若學坐禪、禪非坐臥、いまいふところは、坐禪は坐禪なり、坐臥にあらず、坐臥にあらずと單傳するよりこのかた無限の坐臥は自己なり、なんぞ親疎の命脈をたづねん、いかでか迷悟を論ぜん、たれか智斷をもとめん

【聞解】 坐禪を道取するに……いま南嶽のいふ處は、坐禪は坐禪で、外物を添へぬ、この時は坐臥にあらず、坐禪の外に坐臥は立たぬ○坐臥は、坐する、臥する、みなこれ法ありと、手前へ取る方、又非坐臥と云ふ時は、坐も法に非ず、臥も法にあらずと向ふへ捨る方、其こを坐臥非坐臥にあらずと、取捨の兩頭を超越すれば、日用無限の坐臥が、皆手前の自己で、七顚八倒、茶裡飯裡、不レ向二別處一、一切みな法になる、月に照されて、月を弄ぶ境界この時は自己に親いの疎なるのと命脈を尋ることも入らず、故に迷悟を論ずることなし、又智德の般若、斷德の解脫を求ることはいらぬ。

【私記】 とは 坐禪にあらざる坐禪なきがゆゑに、坐禪は坐禪なりといふ、坐禪の當陽なるがゆゑに坐臥にあらず、參本いはく、無限坐臥、則自己者、單傳非坐臥自己、而總無レ有二坐禪外四威儀一、便是非二染汚威儀一也、と」影室いはく、是は坐禪と談せば、一向坐禪なるべし、坐禪の外に坐臥と云ふ事

不可有、あまりに坐禪の道理の外に餘物交はらぬ所をせめても云はぬ料なりと」渾淪の坐禪なるをもつて親疎迷悟智斷なし」

【御抄】　是は坐禪と談せば、一向坐禪なるべし、坐禪の外に坐臥と云事不可有、あまりに坐禪の道理の外に、餘物交はらぬ所をせめても云はむ料なり、無限の坐臥は自己なりとは、坐臥なるべくは坐臥の脫落、無限の坐臥と云はれぬべし、然者我等が思付たる行往坐臥の臥にあらず、此自己は無限の坐臥を自己とさすなり、實に此無限の坐臥の上は、親疎の命脈、迷悟智斷の義不可有、又此草子の初に、行亦禪坐亦禪語默動靜體安然と云、此行も坐も禪も無限と心得は、今の道理に不可違也。

【那一寶】　禪は坐臥の事に非ず、坐禪は正しく坐禪なることを單傳する是眞箇の學坐禪なり、恁麼の道理に通ずるより、無限の四威儀上卽自己の王三昧なり、這裡何所在、親疎迷悟智斷を　論せん○智斷、法數卷三十八、出二十雙貼釋一、其略云、一人法、二慈悲、乃至十智斷、智能照レ理、斷能斷レ惑、卽果上所レ顯、智斷二德也。

南嶽いはく、若學二坐佛一、佛非二定相一、いはゆる道取を道取せんには恁麼なり、坐佛の一佛二佛のごとくなるは、非定相を莊嚴とせるによりてなり、いま佛非定相と道取するは、佛相を道取するなり、非定相佛なるがゆゑに坐佛さらに廻避しがたきなり、しかあればすなはち佛非定相の莊嚴なるゆゑに若學坐禪、すなはち坐佛なり、」たれか無住法におきて、ほとけにあらずと取捨し、ほとけなりと取捨せん、取捨さきより脫落せるによりて、佛なるなり。

△辨、て下觀云、坐則レ

△辨、佛下なる二字ナシ、刻云、異本ニなるノ二字アリ

△辨、リ下刻云、行則行佛、臥則臥如來ナリ、更ニ無二別佛一

【聞解】　道取を道取せんには……南嶽の道取を道ひ取るには恁麼なり、佛非二定相一と道取するなり○一佛二佛は、學坐禪佛の人を指して云ふ、一人二人乃至百千人もみな非定相を莊嚴とする佛なり、金剛經に說く如く、色や音聲を以て、佛は求められぬ、若し三十二相を以て佛とせば、轉輪聖王も佛なるべし、今佛相を道取するとは、榎で作た石地藏でどうも名が附かぬ○非定相佛なるゆゑに、起つ居つ、茶を飲む、飯を喰ふ、皆佛なり、披毛戴角の佛もあり、破木杓如來もある、かうした佛けなれば、一切時、一切處、坐佛で拄へて居る故に、廻避してさけやう處がない○學坐禪するものがやはり坐禪で、一寸の坐禪は、一寸の佛なり○無住法……非定相の法中におきて、佛に非ずとするは、空に沈む、又佛なりと、取捨するは、今時の疾ひ、然れども、この取捨の法を、無理にすてたがるで無い、この取捨の法が、手前から脫落して居る、何をか取り、何をか捨つると返して見れば、何にも取捨するものは無い、ゆゑにすはれば其儘佛なり。

【私記】　とは　參本いはく、謂二所謂道取一者、通繫二上祖一乎、と」坐佛の一佛二佛とは、各各の坐佛なり、各各坐佛のとき、各各の邊際を超越するがゆゑに非定相を莊嚴とするなり、參本いはく、如坐佛等言、不二遲疑一者、蓋鮮矣、今以二如字一冠二坐佛一、則不レ同二兩物相似一曰レ如、今如者是也、謂二是坐佛一是一佛是二佛一也、若言二坐佛如一佛二佛一、如則兩物相似義而坐佛則相似外一佛二佛一義也、と」またいはく、奈何是非定相、汝我誰渠自忘却也、と」みるべし、非定相佗なし、各各のわれをわすれたるなり、非定相すなはち佛祖なるがゆゑに、佛祖を道取するといへり、非定相佗なるがゆゑに、坐佛さらに廻避しがたきなりと結したまふなり、非定相すなはち坐佛なるがゆゑに廻避しがたきなり、參本いはく、坐佛是非定相、若有二定相一、滯二礙兀坐一、無量礙故、不二常恒間一却僧堂一、と」端二坐環中虛白處一、

縱經塵劫一箇難移、坐禪の坐佛なる道理分明なり、無住の法には、佛非佛の蹤迹のこらざるゆゑに、たれか取捨せんといへり、たとひ取捨するも、取捨ともに非なるがゆゑに坐佛なり、ただ兀坐の活計のみ現成なり」

【御抄】此詞は佛非定相の非を打任たる是非の非に心得る邪見なり、坐佛の佛は定れる相なしと心得む、僻見也、坐佛與非定相を一佛二佛と云歟、今の非定相を莊嚴とせるによりてと云へばとて、打任たる佛の天蓋瓔珞寶冠なむどの樣なる莊嚴と云にはあらず、唯非定相と云佛のあるべきを、坐佛と非定相とを、一佛二佛とは云也、ゆへに今佛非定相と道取するは、佛相を道取するなりとは云なり。前段には唯非定相と許あり、こゝには已非定相佛なるがゆへにとある時に、非定相が佛なる條顯然にきこゆ、非定相佛と云道理にて、行佛とも殺佛とも、無盡にいはるべき道理あるゆへに、坐佛も廻避すべからずと云はるゝ也、實なにとしてか、坐佛が此理にもるべき勿論事也、又前段には坐佛のうへに非定相を莊嚴とし、今は佛非定相の莊嚴を坐禪の莊嚴とせり、打ちかへたれども、只同心なるべし。是は南嶽の詞に、於無住法不應取捨の詞の釋なり、實於無住法の時節、誰ありて佛也とも佛に非ずとも取捨せむ、さらに取捨すべき人なし、取捨さきより脫落せりとは、今の取捨と云も脫落の上の取捨なるべし、ゆへに如此云也。

【辨註】辨曰、坐禪の一佛二佛の如くなるとは、學坐佛の人を指て云、或は一人、或は二人、乃至百千萬人、俱に非定相を莊嚴とせるなり、何ぞ今日の規矩に坐定する、屈相の坐禪ならんや、況や三十二相八十種の莊嚴を要する底、或は以色以音聲、皆是邪行道の妄見なり、非定相とは坐相を破するにあらず、祖門下の佛は皆非定相なり、今時鬼窟の兀坐を、向上本分の事と思へるもの〻所不知なり、或は文殊三處安居、脚下無絲線、處々禁足時々安居、頭不戴寶冠、披毛戴角、信步入荒草、忘却長安路、但念水草、牽犂拽杷、袈裟包草鞋、赤脚下桐城、盡是非定相佛なり、榎にて作れる土佛とも云んか如此。

辨曰、非定相なれば、坐する時寢る時、佛ならざる佛なし、角のあるもあり、尾のあるもあり、何處にか廻避せん。

辨曰。坐禪は坐佛なる樣子を參究して看よ。

【那一寶】大師の道に一任して、いはゆる道取せんにはとの玉ふなり、坐佛の一佛二佛とは、學坐禪の人を指て云ふ、一箇兩箇百千箇俱非定相を莊嚴とせるなり、然れども今規矩中規矩外に滯礙して、坐相を取捨し自ら鬼窟に活計を作に非ず、況や三十二相八十種好の莊嚴を要する底、或以色以音聲、皆是行邪道の妄見なり、非定相とは、坐相を破斥するに非ず、祖門下の佛は皆非定相なり、所謂說似一物卽不中なる佛相なり、尙佛相を道取するなりの語、勿看過、或文殊三處安居而脚下無絲線、處々禁足、時々安居、頭不戴寶華冠、披毛戴角信步入荒草、妄却長安路、但念水草、牽犂拽杷袈裟包草鞋、赤脚下桐城、盡是非定相の佛なり、榎にて作れる土佛とも云んか、阿呵々、信得及者少矣。非定相なれば、坐する時、寢ぬる時佛ならざる佛なし、角あるもあり尾あるもあり何處廻避せん。坐佛卽非定相の莊嚴なる故に、學坐禪の皮肉骨髓なるを以て、坐佛の王三昧なるを結跏趺坐する、是正傳の家訓なり、錯解莫廢坐相。無住の法とは、卽非定相なり、這裡何佛不佛の取捨あらん、取捨本より脫落し、無所住なるが故に、坐すれば卽坐佛なり、臥すれば卽臥如來なり。

△葬、いはゆるさらに　△葬、那麼下割云、相好光明　△葬、那、下割云、人々

南嶽いはく、汝若坐佛、卽是殺佛、いはゆるさらに坐佛を參究するに、殺佛の功德あり、坐佛の正當恁麼時は、殺佛なり、殺佛の相好光明は、たづねんとするに、かならず坐佛なるべし、殺の言、たとひ凡夫のごとくにひとしくとも、ひとへに凡夫と同ずべからず、また坐佛の殺佛なるは、有什麼形段と參究すべし、佛功德すでに殺佛あるを拈擧して、われらが殺人未殺人をも參學すべし

【聞解】 南嶽いはく……こゝは文理通易し、坐佛がやはりそこを立ちのかず、佛向上の殺佛じや○殺佛と云ふは坐佛に滯る處を超出するを云、一切の相手を取らず、坐佛すれば、それが殺佛なり○相好光明は、殺佛の佛字について、緣語に用ゆ、殺佛は佛向上なれば、常の劣應佛の相好と一樣には見るべからず、但殺佛の功德と云ふ程のこと○殺の字の言葉は、凡夫にひとしくころすと云ふ義なれども、かたつけて走ばかり見るな、この裏には、殺佛がやはり、坐佛と云ふ心がある○有什麼形段……如何樣な相好光明があると參せよ○坐佛の功德に殺佛のあるをひねりあげて、斷二二死一破二無明一位の殺人を得たか、未殺人なるかを參學すべし。

【私記】 とは 影室いはく、今の殺佛の詞は、坐禪の委を殺佛とつかふなり、坐の外に又物なき道理が殺佛と云はるゝなり」參本いはく、坐禪正當恁麼時、則殺佛也者、非二逆害殺一、是于此切、非三但無二弟二人一、無逢二一人一的一人也、と」坐の不動著これを殺佛といふ、相好光明は、すがたといはんがごとし、一切法の親切なるを有什麼形段といふ、參本いはく、有什麼形段者、人心不同、猶二人面一、翠微竹林、恁麼長恁麼短、と」佛功德すでに殺佛ありとは、佛功德の不宿死屍なり、參本いはく、我等之殺人未殺人者、須知吾人結加趺坐、卽是殺人而方始得二鼻孔端正一、是卽未殺人也、身心脫落兀々地、是殺人面貌圓滿、此是脫落身心跏趺坐、卽未殺人內外淸淨耳、と」大に好矣、影室いはく、今の我等が坐禪の委こそ殺人の至極なれ、坐禪の外餘人なきゆへに」とよし」

【御抄】 坐佛卽是殺佛の詞、大に驚耳目樣に聞ゆ、但佛は更殺をうけ給べからず、五逆の罪の中にも出佛身血罪なり、殺佛と云事名目より不可有、佛在世にも佛を奉殺とせしかども終不叶、提婆達多磐石を投たりしに、石のかけ佛の御足にあたりて、血たりたりし事ありき、是則達多が五逆の內の隨一也、今の殺佛の詞は、坐禪の委を殺佛とつかふ也、坐の外に又物なき道理か、殺佛と云はるゝ也、至て坐禪の親切なる道理が殺佛と云はるゝなり、故坐佛の正當恁麼時は殺佛也とも云ふ、殺佛の相好光明は尋ねむとするにかならず坐佛なるべしとも云也。

實殺の言凡夫の殺と爭同べき勿論也、又坐佛の殺佛なるは有什麼形段と參究すべしとあり、此有什麼形段とある詞、やがて坐佛なるべし、殺佛なるべし、思量なるべきか、不思量なるべきか、非思量なるべきか、坐佛なるべきか、殺佛なるべきか、此道理が有什麼形段と云はるゝ也、何義にもあたるべき形段也。

是は此殺佛の道理を拈擧して、我等が殺人未殺人をも可參學云如文可得意、今の我等が坐禪の委こそ殺人の至極なる、坐禪の外餘人なきゆへに。

【辨註】 辨曰、坐佛正當恁麼時、卽殺佛道理現成、固不レ執二佛坐相一也。

辨曰、坐佛正當、大底大、小底小、長者長、短者短、殺佛相好光明在二裡許一了也。

△鉢、那、若上、南嶽曰ノ三字アリ
△那、と下割云、也
△辨、も下割云、假使頭ニ鳥ノ集ツクルコトヲ不レ知也

辨曰、止觀三之三云、殺人者卽取二二死已斷三道清淨一名二殺人一、又法華玄義六之二云、大經破二無明一位方名二殺人一、今は上所レ言取捨先より脫落せる坐佛の殺佛なり、祖門中有二殺佛殺祖道底一、自レ非レ有二眞正見一、奚得二夢見一耶。

【那一寶】 坐佛正當恁麼時、以二非定相一端坐する、故に卽殺佛道理現成す、固より不レ執二佛坐相一なり。坐佛正當、大底大、小底小、長者長、短者短、殺佛相好光明在二裡許一了也、殺文言、以レ斷二生命一爲レ義也、今殺とは取捨先より脫落する底の知見を云ふ、又通身無影像とも見るべし。佛功德に殺佛の道理あること大師の道を擧拈して、人々の殺未殺をも參學せよと、實に古佛提耳の示誨なり、冀知二漸愧一憤悱せんことを○殺人止觀三之三云、殺人者卽取二二死已斷三道清淨一、又、法華玄義六之二云、大經破二無明一位方名二殺人一、蓋祖門中有二殺佛殺祖道底一、自レ非レ有二眞正見一奚得二夢見一耶。

若執坐相、非レ達二其理一、いはゆる執坐相とは、坐相を捨し坐相を觸するなり、この道理は、すでに坐佛するには不執坐相なることえざるなり、不執坐相なることえざるがゆゑに、執坐相はたとひ玲瓏なりとも、非達其理なるべし、恁麼の功夫を脫落身心といふ

【聞解】 執坐相とは二病あるなり、捨の疾は放過の方、觸の病は屈著に落つるなり○執坐相は三日不レ喰レ飯に坐した抔と、玉の照透る如なる相でも、禪坐の道理に逢するに非ず○恁麼の功夫……これ恁麼は上を、みな承けていふ、この上に段々道ひ來る道理が、脫落身心なり。

【私記】 とは　この坐相は兀々地なり、捨し觸するとは、自在に我ものとし、すきにするなり、捨觸の全機現なり、執は、親切の道理なり、坐相にのこれる一塵なきなり、玲瓏通暢なるがゆゑに非達なり、自彰の其理なるがゆゑに非達なり」

【御抄】 此若執坐相非達其理の詞は被嫌たる詞かと聞ゆ、直非其義次文に聞えたり。抑坐相を執すとは何物かありて可成執乎、非定相佛を是非の非にはあらずと云云が如し、今は不執坐相なる事、えざるがゆへに執坐相たとひ玲瓏也とも、非達其理なるべしとは、執坐相がすきとをりてかくるる所なくとも、非達其理なるべしと也、執坐相の姿が、非達其理なる也、人を置て其理に達ぞ不達ぞと云にはあらず。

【辨註】 辨曰、上件南嶽の馬祖に示誨する、坐禪工夫を脫落身心と云、是以當レ知身心脫落只管打坐の語を、身心を打碎する如くに、聲をあららげ目をいからかして云は、瞎禿子の沒雕當の邪解妄想なることを。

【那一寶】 結跏の坐相を偏に屈坐なりと捨離し、單に佛威儀なりと觸著する、ともに執坐相なり、已坐するとは打坐の只管打坐なるを云ふ、此坐地には不執坐相なるをとも得ざるなり、況や執坐相はたとひ坐相端正玲瓏にして、外頭上の鳥巢をも知らず、內淵不搖の際に至るも不レ達二坐禪一宗旨一なり、於レ此捨觸執不執ともに妄計なりと脫得せば、只管打坐なることを會得せん、上件南嶽の示誨する功夫現成を脫落身心の宗旨と云ふ。

いまだかつて坐せざるものにこの道のあるにあらず、打坐時にあり、打坐人にあり、打坐佛にあり、學坐佛にあり、ただ人の坐臥する坐のこの打坐佛な

△辨、し下割云、非二本佛一故。
△辨、邪、切下の字アリ△辨、割云、四處ノの字異本ニナシ
△辨、す下割云、何故本覺本佛ナルヲ以テ
△辨、一切下の字アリ、其下割云、ソノ本
△辨、る下割云、十界皆俱ノ本佛ナリ
△辨、も下割云、亦

るにあらず、人坐のおのづから坐佛佛坐に相似なりといへども、人作佛あり作佛人あるがごとし、作佛人ありといへども、一切人は作佛にあらず、ほとけは一切人にあらず、一切佛は一切人のみにあらざるがゆゑに、人かならず佛にあらず、佛かならず人にあらず、坐佛もかくのごとし

【聞解】 然れども、これは未だ、一坐もすわらぬ、人には無い、但其坐する時、坐する人が、やはり打坐佛、其人の手前にあることなり○人の坐臥する……今日人の坐臥が打坐佛では無い、卽心是佛の卷に、未發菩提心之者を、卽心是佛とするにはあらずと云ふこゝろなり○人坐のおのづから……今日人のすわる處は、打坐佛に似たれども、其れが其儘坐佛では無い○人作佛々作人……人の佛と作るもある、佛と作る人もあれど、どちらへいふても同じこと、底意は人が必ず、發菩提心して、佛となる○佛となる人が有りても、其まゝ佛にはなれぬ、一たび菩提心を起して坐佛になる、上の人坐の坐佛なるにはあらずと云ふ、證據に引く○一切人は……一切人が初より其まゝ佛と云ふではない○ほとけは……一切佛は、一切人を其まゝ體では無い、一切佛は一切人では無い、佛は佛で人では無い、ゆゑに、人と云時は人で、佛では無い、人は人ぎり、坐佛も如ㇾ是、人の上に、佛を重て見ぬ、坐すれば其まゝ佛で、向ふから佛を作では無い、人は人ぎり、佛は佛ぎり、坐佛も如ㇾ是人の上に、佛を重ねて見ぬ、坐すれば其まゝ佛で、向ふから佛を持て來て、物を二つ並べて見ぬ。

【私記】 とは　この道とは、南嶽の道取をさす、すべて上來一段の大解脫をさすなり、非達其理の脫落は、坐外のものの消息にあらず、坐中の妙用なり、ゆゑにあり、あり、あり、といふ」ただ人の坐臥する坐のこの打坐佛なるにあらずとは、似て非なるをえらぶなり」すでにえらびぬれば、眞箇の坐佛放光せり、ゆゑに人坐のをのづから坐佛佛坐に相似なりといへども、人作佛あり、作佛人あるがごとしといへり、なりといへどもは、なるがゆゑになり、例の語勢なり」佛坐に人坐をのこさざるをもて、人作佛、作佛人あるなり、人作佛とは、人の佛坐となるなり、作佛人は、ただ翻覆していふのみ」作佛人ありといへども、一切の人は佛にあらずとは、作佛人の獨立周行なり、能所彼此の現成にあらず」ゆゑに佛は一切の人にあらず○佛かならず人にあらずといふ、これ、一人にあふ一人もなき、ただ坐佛の活計のみ現成なり」ここをもて坐佛もかくのごとしと結するなり、これ坐佛の亦如是なり」

【御抄】 是如文、實今の坐禪の理にもるゝもの不可有、然而坐せざる物には實此道あるべからず、打坐時打坐人打坐佛學坐佛等の上の道理あるべしと也。

是は人の坐臥する坐と云は打任たる人の坐を云なり、此坐は打坐佛なるに非ずと被嫌也、非坐佛故也、人坐のをのづから坐佛佛坐に相似也と云へども、人作佛あり、作佛人あるが如しと云は、坐の姿は似たれども、此道理を參學する人に取てこそ、作佛人人作佛とは云はるれと云心也、此理を得ずして、只いたづらに坐する人の上には實にも一切人は作佛にあらずと云はるべき也、佛は一切人にあらず、一切佛は一切人のみにあらざるがゆへにとは、佛は佛人は人の心地也、人かならず佛にあらず、佛かならず人にあらずと如前云、但如此云へばとて、一向非すべきにあらず、人が佛佛が人と云道理又此下には有るべき也。

【辨註】 辨曰、只人の坐臥する坐の、この打坐佛なるにはあらずして、然も亦經行若坐臥の坐なり、

如前言學の字是辨道の眼目、邪正兩岐の差路なり、審細に究取せよ、然も今時の坐禪僧の爲體は、打坐佛にはあらず打坐屈なり。

辨曰、上所謂圖作佛は、幾許の作佛を葛藤すとかせん、葛藤更纏葛藤べし、此時盡十法界作佛、條々無他界一佛界の圖なり、故に此一圖を廻避すべからず、然も磨塼の力究なきものは、佛を見るに佛を知らず、會せざるがごとく、水を見るをも知らず、山を見るをもしらず、眼前法は佛道に通路ありがたからんと、倉卒なるが故に見て見ざるなり、前云ごとく、誰か是を磨塼と見ざらん、誰か是を磨塼とみんと云是なり、坐禪の作佛を待にあらざる道理を知れ、作佛の坐禪にかゝはれざる宗旨不隱、現成公案なり、今時彫僞人の坐の、自ら坐佛佛坐に相似なりといへども、人の坐臥する坐の此打坐佛なるにあらず、何者人作佛あり、作佛人あるがごとく、非本佛故佛となる人ありといへども、一切の人は作佛にあらず、佛は一切の人にあらず、一切の佛は一切の人のみにあらざるが故に、人必非佛佛必非人、莫作篇を九紙の表可見、坐佛の佛坐に相似たるも如是、行佛篇所謂或云只人道のみに諸佛出世す、更に餘方餘道には出現せずとおもへり、如云則佛在處皆人道なるべきか、是は人佛の唯我獨尊の道得なり、さらに天佛もあるべし、佛々もあるべきなり、諸佛は唯人間のみに出現すと云んは、佛祖の圖奥に不入なりと、乃至行佛の設化する處に、四生にあらざる衆生あり、天上人間法界等にあらざる處ありと云云、類之不齊混則知處、執坐相はたとひ玲瓏なりとも非達其理、同而異々而同、全不似他、他是阿誰、古佛曰非定相佛なるが故に、坐佛更廻避しがたしと、故に老僧云、一切の佛は一切の人のみにあらず、威儀を彫僞するなき、非定相の佛なれば、角のあるもあり尾のあるもあり、唯是佛は其佛の佛なるのみ、他佛にあらず、人の坐臥する坐の、非此打坐佛亦復爾、坐佛は其坐佛の坐佛なり、故若學坐禪則坐佛なり、無住の法にをきて誰か佛なり、佛にあらずと取捨せん、取捨先より脫落せるに依て、坐すれば坐佛なり、頭々に威儀を現則行佛なり、困則眠臥如來なり、此坐佛行佛臥如來を參究して、坐臥行住の諸相を不執則殺佛現成なり、殺佛の相好光明、非定相佛の相好、光明如何と、尋んとするに、神頭鬼面戴角せる坐臥佛もあり、鬼面戴角せる行住佛もあり、この坐佛更に何處に廻避せん、馬祖未了恁麼佛祖正傳宗乘坐禪故、南嶽磨塼の爲人方便を以て、馬祖を接すること速なり、磨塼作鏡ことを了ずる時馬祖作佛す、馬祖作佛時馬祖速作馬祖、眉毛下目あり鼻あり、是佛祖正傳直指なり、此宗旨は行佛篇に示誨し玉ふ、六度萬行都て行佛の佛行なることを通達、則汝日用行住坐臥別佛にあらず、行佛の佛行なり、猶行佛篇可併考、最澄法界心體論云、一切衆生皆是佛菩薩本有無作之分身、又諸佛菩薩者一切衆生無始自然の分身也、分一如心體故云分身十界也、是教人棄極之玄談也、猶未到得祖門向上宗乘中事在、雖然今時一物相似客人達、如是事也未夢見在而已、猶又成佛見佛事、長者論第六十五窟可併見、繁多故略之。

【那一寶】　前段に已に坐禪するにはとあり、爰に未曾坐者とあり、照考べし、只人の坐臥する坐のこの打坐佛なるに非ずして、然亦經行若坐臥の坐なり、如前言學字是辨道の眼目、邪正兩岐の差路なり、審細に究取せよ、這般の眼目なくしてたとひ一生打坐するも、打坐佛には非ず、打坐屈なり、未曾生人と異なることなし。

此章は難解なり、上所謂此一圖いくそばくの作佛を葛藤すとかせん、此葛藤さらに葛藤を纏ふべし、此時盡十方界條々の圖にして全無他世界一佛界なる故に此一圖を廻避すべからず、然ども磨塼の力究なきものは佛を見るにも不知不會、山を見水を見るにも不知、故に此人の坐の自ら佛坐に相似な

△拂、那、り。下劃云、人人ノ坐佛卽作佛ナリト證ス

△拂、那、な。リ。下劃云、箇々ノ作佛卽坐佛ナル道理ヲ舉セ玉フ

りといへども、人の坐臥する坐の此打坐佛なるに非ず、何者人作ㇾ佛あり、作ㇾ佛人あるがごとく、生佛異見あるは非ニ本佛一ゆゑに執坐相は非ㇾ達ニ其理一、これ卽同中異なり、然あればたとひ人作ㇾ佛作ㇾ佛人の道理ありといへども、一切人は只是一切人本來人にして、人作ㇾ佛と換面するに非ず、一切佛は只是一切佛本成佛にして、作佛人と回頭變易するに非ず、直心なり直身なり、直佛祖なり、是故に人必非ㇾ佛、佛必非ㇾ人、更道佛非ㇾ佛、人非ㇾ人、同而異、異而同、明月蘆花、全不ㇾ似ㇾ他、他是阿誰、古佛曰非定相佛なるが故に、坐佛更難ニ廻避一と、識得すれば神頭鬼面披毛戴角、掉ㇾ臂行作ㇾ寃底なし、錯會勿ㇾ陷ニ入凡聖無差別之深坑一、作ニ落空亡之外道一去。

南嶽江西の師勝資强かくのごとし、坐佛の作佛を證する、江西これなり。作佛のために坐佛をしめす、南嶽これなり。南嶽の會に恁麼の功夫あり、藥山の會に向來の道取あり、しるべし佛佛祖祖の要機とせるは、これ坐佛なりといふことを、すでに佛佛祖祖とあるはこの要機を使用せり、いまだしきは、夢也未見在なるのみなり

【聞解】 坐佛が作佛と示すは南嶽なり。

【私記】 とは 南嶽江西の師資、おなじく坐佛の命脈なるがゆゑに勝强なり、師資の證示、みな坐佛なり、坐佛作佛、おなじことばなり」この要機は、坐佛なり」使用はわれにうるをいふ」いまだしきは、使用することあたはざるをいふ」

【御抄】 是は如文、坐佛を作佛と證するは、江西作佛を坐佛としめす南嶽是也 云云 只同事を打ちかへられたり、抑又南嶽江西は祖師にて此詞を被示と可心得歟、今の南嶽與江西のあはひ、坐佛なるべし、如此可心得なり。

恁麼の工夫とは南嶽の詞を指し、藥山の會とは最初の兀々地思量什麼思量箇不思量底等をさす也、是以下詞如文佛祖の光明に照臨せらるゝと云は此坐禪を光明と云ふ也、日月珠火等の光を光明と不可心得也。

△拂、那、れ。下劃云、佛祖ノ

おほよそ西天東地に、佛法つたはるといふは、かならず坐佛のつたはるなり、それ要機なるによりてなり、佛法つたはれざるには、坐禪つたはれず、嫡嫡相承せるは、この坐禪の宗旨のみなり、この宗旨、いまだ單傳せざるは佛祖にあらざるなり、この一法あきらめざれば、萬法あきらめざるなり、萬行あきらめざるなり、法法あきらめざらんば、明眼といふべからず、得道にあらず、いかでか佛祖の今古ならん、ここをもて佛祖かならず坐禪を單傳するとの一定すべし、佛祖の光明に照臨せらるるといふは、この坐禪を功夫參究するなり、おろかなるともがらは、佛光明をあやまりて日月の光明のごとく、珠火の光耀のごとくあらんずるとおもふ、日月光耀は、わずかに六道輪廻の業相なり、さらに佛光明に比すべからず、佛光明といふは、一句を受持聽聞し、一法を保任護持し、坐禪を單傳するなり、光明にてらさるるにおよば

△辨、し下劃云、因ニ句語問ニ莫ニ錯解一、坐禪を坐禪なりとしれる少しとハ、其意如何ト究理參學セヨ、坐禪ハ非ニ坐臥一ノ語ナリ

△辨、なし下劃云、屈足ヲ坐禪ト云コトハ、鷺鳥沙彌ノ所知ナリ、古佛等ニ什麼ノ如し是ノ玉フヤ檢看セヨ

△辨、禪下の字アリ

△辨、邪、銘下も籠も三字アリ（辨、其下劃云、長本三字ハ誤スルアリ）

△辨、邪、ず下劃云、銘に坐臥ノ自己ナルコトヲ知ラズ

△辨、邪、な下劃云、可ノ悲歟

△辨、邪、に下劃云、也

△辨、ず下劃云、襲練蒸修者法界次第云、八背捨等名爲ニ觀禪一、九次第定名爲ニ練禪一、師子奮迅三昧名爲ニ蒸禪一、超越三昧名爲ニ修禪一

されば、この保任なし、この信受なきなり、しかあればすなはち、古來なりといへども、坐禪を坐禪なりとしれるすくなし、いま現在大宋國の諸山に甲刹の主人とあるもの、坐禪をしらず學せざるおほし、あきらめしれるありといへども、すくなし、諸寺にもとより坐禪の時節さだまれり、住持より諸僧、ともに坐禪するを本分の事とせり、學者を勸誘するにも坐禪をすすむ、しかあれどもしれる住持人はまれなり、このゆゑに古來より近代にいたるまで、坐禪銘を記せる老宿一兩位あり、坐禪儀を撰せる老宿一兩位あり、坐禪箴を記せる老宿一兩位あるなかに、坐禪銘ともにとるべきところなし、坐禪儀いまだその行履にくらし、坐禪をしらず、坐禪を單傳せざるともがらの記せるところなり、景德傳燈錄にある、坐禪箴、および嘉泰普燈錄にあるところの坐禪銘等なり」あはれむべし、十方の叢林に經歷して一生をすごすといへども、一坐の功夫あらざることを、打坐すでになんぢにあらず、功夫さらにおのれと相見せざることを、これ坐禪のおのが身心をきらふにあらず、眞箇の功夫をこころざさず倉卒に迷醉せるによりてなり、かれらが所集は、ただ還源返本の樣子なり、いたづらに息慮凝寂の經營なり、觀練蒸修の階級におよばず、十地等覺の見解におよばず、いかでか佛佛祖祖の坐禪を單傳せん、宋朝の錄者あやまりて錄せるなり、晩學すててみるべからず

【聞解】 佛法つたはれざるには坐禪つたはれずとは、坐禪は正法眼藏涅槃妙心なるゆゑに、坐禪の傳るは佛法不ル傳なり○萬行明めざるは法から出た萬行ゆゑに○法々……とは一法と萬法とを明めざるなり○得道とは菩提の道を得たとはいへぬ○佛祖の今古……古の佛祖今の佛祖ともいへぬ○佛祖必……非思量の境界を得た佛祖は坐禪を單傳す○如來の光明に照臨せられてこの坐禪を承け取り功夫するは光明に照臨せらるゝなり、これ坐禪は正法眼藏なるゆゑに○あらんずるとは、あらんとすると云ふこと○日月の光明はちよつとした業相轉廻の相と云ふもの○光明にてらさるゝにおよばざれば、この保任なしとはこの坐禪作佛の光明の及ばざる人には本分の事業保任はなきなり○勸誘は勸發誘引の刹文字なり○老宿の宿大也と注す○景德傳燈……景德年中入ル藏故名ク○嘉泰は人名也○打坐すでになんぢにあらずとは打坐が我物にならぬと云ふこと○還源返本……本より源本を蹈み出さぬもの故に還ると云ふことも無い、又本より無住にして家と名る無ければ、どこへかへるべきぞ故に還源と云處に住するは錯なり○息慮凝寂は煎り豆に花の咲かぬと云ふ樣な二乘境界なり○觀練……天臺止觀の法に四品ある、觀禪練禪等なり。

【私記】 とは　打坐すでになんぢにあらず、功夫さらにおのれと相見せずとは、功夫打坐に親切ならざるをいふ、餘文しるべし」

【御抄】 是等は皆不可用と被嫌也。

是は彼等が所集とは、右に所出之坐禪銘、坐禪儀、坐禪箴等、傳燈普燈兩錄に所載の事也、彼所集の心地は六塵の妄を止ぬれば、息慮凝寂坦然として還源返本する也と云へり、此心地を被嫌也、佛祖の坐禪非爾、實にも錄は俗の錄する也、然者錄も强不可決定事歟。

【辨註】 辨曰、今時徒に屈足窟坐するを坐禪と謂へり、坐は四儀之一なり、禪は六度之一なり、此云二靜慮一、靜慮といへば紛飛の動念を止めて靜寂ならしむと思ふ、是は凡夫二乘の禪なり、須レ知止レ動歸レ止、止更彌動、吾門元古佛の示し玉ふ單傳の坐禪は、非二坐臥一と單傳するの眼目なり、是謂二坐禪宗旨一如今の禪宗と云ふ義にはあらず、坐禪の宗乘玄旨と云んが如し、不レ可二錯解一、明見佛性眼目開發時、行住坐臥一切時、一切處單行獨步、百丈獨坐大雄峯、青原聖諦尙不レ爲、藥山一切不レ爲、間坐卽爲也皆是なり、如今は坐の一行を以て云、夫坐は不動の義をとる、一切處不レ動二於本處一ことを知る是を坐禪と云、法華所レ謂常在二於其中一、經行若坐臥、只能了レ在二於其中一、今時殊勝を賣弄する規矩の日儲とりをば除く、日儲とり坐禪は、眞箇坐禪にはあらず、故云坐禪は坐臥にあらずと單傳してより、無限の坐臥は自己なりと、猶又坐禪坐佛殺佛の工夫精究すべし、皆是自己の單傳なり、他人にあらず。辨曰、今此叢林を經歷馳走する、黑暗死坐の臭飯袋、字海自負の瞎癡生、共に屈足算香を坐禪とのみ知て、眞箇の工夫なく、一生を空過して、如レ是古佛悲愍の語を輕忽するは、人乎畜乎不レ知何物ぞや。

【那一寶】 此段は、南嶽馬祖鐵鎚交打して、坐禪坐佛を鍛錬ありし旨を擧揚し玉ふなり、所レ謂一法不明なれば萬法不明なり、萬法不明なれば萬行不明なり、法行圓滿せざれば佛祖單傳の坐禪の宗旨にあらざるかゝり、坐は不動の義、一切處不レ動二於本處一、是單傳の兀坐常在於其中經行若坐臥なり。屈レ足を坐禪と云ことは、驅烏の沙彌も所レ知なり、古佛爲二什麼一如レ是の玉ふや、因二句語同一莫二錯解一、坐禪を坐禪なりと知る少しとは、其意如何と究理參徹せよ、次下古佛悲愍の語等を欽で聽取せよ。考二諸燈一、有二佛眼遠坐禪銘、五雲逢坐禪箴、佛心戈坐禪儀、天台大靜坐禪銘一、觀練薰修者、法界次第云、八背捨等名爲二觀禪一、九次第定名爲二練禪一、師子奮迅三昧名爲二薰禪一、超越三昧名爲二修禪一。

坐禪箴は、大宋國慶元府大白名山天童景德寺宏智禪師正覺和尙の撰せるのみ、佛祖なり、坐禪箴なり、道得是なり、ひとり法界の表裏に光明なり、古今の佛祖に佛祖なり、前佛後佛、この箴に箴せられもてゆき、今祖古祖、この箴より現成するなり、かの坐禪箴はすなはちこれなり

【聞解】 慶元府は日本から行くに入口なり、太白は開山義洪和尙に大白星が童子となりて、つかへたことあり故に名く○景德年中に開けし寺故に曰二景德寺一○佛祖なりとは佛祖の道理にかなふ○道得是とはこれ斗り坐禪のことを道得て是なり、それじや○光明なりとは佛祖正法の坐禪光明をえられたと云ふこと○堅には古今の佛祖を敎ゆる佛祖なり○箴せられもてゆきとは、をしへられつしもてゆくと云ふことなり。

【私記】 とは　文みなしるべし」

【御抄】 已下如文、只宏智の坐禪箴を被讚嘆なり。

坐禪箴　勅諡宏智禪師正覺撰

佛佛要機、祖祖機要、不レ觸レ事而知、不レ對レ緣而照、不レ觸レ事而知、其知自微、不レ對レ緣而照、其照自妙、其知自微曾無二分別之思一、其照自妙曾無二毫忽之兆一、曾

△邪、杳下割云、此句ニ雙ニ押ス支微篠嘯韻ノ詩話所謂遠退韻之體也

△辨、邪、り下割云、節目ハ禮記字木理之別曰レ節、木理之情曰レ目

△邪、なり下割云、潙山大師沙門行答話也

△辨、師下に字アリ、其本に字ナシ

△邪、り下割云、光孝鼎芳覺語出ニ禪類第四ニ

△辨、亟下割云、機要二字脫乎、解ニ機要二字ニ則下ノナリノ點所ナリ△邪、割云ノ機要

△辨、そ下割云、日用光中

△辨、の下割云、各々ノ

△辨、なり下割云、坐臥經行

△辨、の下割云、箇々ノ

△辨、り下割云、佛々祖々非ニ他人ニ、莫ニ諸哩ニ好

無分別之思、其知無偶而奇、曾無毫忽之兆、其照無取而了、水清徹底兮魚行遲遲、空濶莫涯兮鳥飛杳杳。いはゆる坐禪箴の箴は、大用現前なり、聲色向上の威儀なり、父母未生前の節目なり、莫謗佛祖好なり、未免喪身失命なり、頭長三尺頸短二寸なり」佛佛要機、佛佛はかならず佛佛を要機とせる、その要機現成せり、これ坐禪なり、」祖祖機要、先師無此語なり、この道理これ祖祖なり、法傳衣傳あり、おほよそ囘頭換面の面面、これ佛佛の要機なり、換面囘頭の頭頭、これ祖祖の機要なり

【聞解】佛々要機……この二句は、正しく正法眼藏涅槃妙心を指し、證據に取りていふ言葉、佛々祖々證する能の體なり、要機々要は證せらるゝ用なり、先づ佛々とは、横十竪三の果德圓滿の諸佛を云ふ、祖々とは上佛々の附屬を受けて、其王三昧を修證して、佛々の位に登る、因行圓滿の人なり、この修因の心から、果上まで上る、故に固果一圓で、佛と祖、理體からいへば二つ無し、要機の要字は、元こしと云ふ字で肝要くゝりめの大切なことを云、これは人の形骸の括り目なる故に太切なり、今この要の字は、體について働かぬ字で證に掛る、機は易に出て、註に機は主ニ發動ニ吉凶之所ニ自出ニ也、鐵砲抔を放つに、火繩に火を付けて追付け放たんとして未放處なり吉へ放て出るも、凶へ放て出るも、みなこの機のはたらきにある、故に太切になること、機樞とつゝくも、太切な働きあることなり、こゝでも、機は働きあるゆゑに修に掛る○佛々果上で證し了つた、動は又肝要の處が發機して證上の修に引轉せられて働て出る故に、證が先きなるゆゑに要字を先きに置くなり、祖々は上に佛々を見て、自行を修し、佛位に上るものゆゑに、修の働きが先きなり、このゆゑに機要と置くなり○この要機々要は、坐禪王三昧なり、佛々共にこの坐禪の道理を修證し、祖々はこれを單傳するなり○不ノ觸ノ事……これは、上の二句の法體の働く所を云ふ○この知照の字は、知字は法華に、知見とあり、金剛經に、如是知、如是見とある、この知字と同じ、照字は、如是見の見字と同じ、心經に、皆空と照見るとあるも同意なり○知ると云ふ時は、散亂せず、」照すゆゑに昏沈して居らぬ○事と緣とは二つなり、事は手前にある、緣は向ふにある、且く六塵の中、聲色の二塵を擧げていはゝ、鐘の聲を聞く時に向ふで鳴る、聲は耳に對する緣なり、手前に聞くものは耳の事なり、この向ふの聲の緣が、耳の事に觸れさはりて來る、又花の色を見る時は此方の眼の事がこの色の緣に對するなり、この二で餘の四塵は知れる○凡夫境界では、皆花の色に對して知り鐘の聲に觸れて知る、これは向ふに相手を取る、又これを一頭地超えて不ノ觸ノ不ノ對、全體枯木死灰のごとくなるは、二乘の堺なり、今は凡夫の觸と對とを超え、二乘の不觸と不對とを越えて、耳の事に觸れざれども聲を知り、眼の緣に對せざれども色を照す、これが佛々祖々の要機々要、向ふに相手なし、餘人所不見、唯獨自明了の境界なり、これなら何にを照し、何を知るといふてあらうが、珠發レ光、光還自照す道理で、知を知が照して自ら知自ら照す、行燈が行燈を照す、知は知で知り、照を照で照す、これ相手なし○其知自徹とは、其知は極徹にし、あり來る通りに、自ら幽微で、意識分別も及はぬ○この徹は、極徹と云つて、細極徹塵、畢竟空の異名なり、空といへば、斷滅になると人が怖るゝ故に、名を替へて清淨とも云ひ、極徹とも云ふなり○其照自妙……これも上句と同意、妙は名ニ不可思議ニ、と註す、どうも言語で思ひはかられぬ、了簡の及ばぬ處○分別思毫忽兆は、句意見た通り、兆字は卜から出た字、灸レ龜て吉凶の兆を見るなり、毫忽の字義は、字

彙等に尋ぬべし、すこし計りのことなり○大意は、照の妙處には、迷の悟のと云ふ少しの兆も見へぬ、妙超ニ初念際一と云ふ處○無レ偶……偶は配偶抔と連用し陰爻なり、物の二つあること、奇も易に出で、陽數なり、一つのこと、今は知の相手になり、幷ぶべきもの無し○無取而了……相手無しに、了々として、光明斗りで照して居る、照體獨立と云ふ處、これから下に三昧を手に入れた、人の境界を云ふ○水清……魚と鳥とを、打坐の人にして、水と空とは眞空性水第一義の蒲團上にしていふなり、先づこの要機に要の坐蒲團の法性水は、初より迷ひ悟りの濁り無く、上下清み徹りて、一波不レ起一風不レ動、性水眞空の水じや、この蒲團を打坐佛の魚が遲々と、ゆるり〳〵と行き游で終日水を離れぬ、其如く坐蒲を命として、盡未來際離れぬがよい、この水を離るれば直に死す○第一義空濶くして、有の無の と云浮が無い、そこを終日鳥は自由に飛び廻て、杳々とはるかに心一抔に樂んで、空に觸れず、空を以て命として居る、この空に觸れると、鳥も命は無い、其の如打坐の人も第一義空の蒲團を命として、其れにふれぬ樣に、盡未來樂で暮らすべし○箴は大用也……有に不レ落、無に不レ沈、空に滯らず、これ大用なり、滯る處あれば、自由に働かれぬ、故に大用ではない○聲色向上……不レ對レ緣して坐する故に、六塵の外に飛び超えて、向上に行履する威儀なり、聲色二法を擧て餘り四塵を攝する也○父母……今時に落ぬと云ふこと、同安の語に、豈爲ニ塵機一作繫留上同意、節目は格式と云ふ程のこと、俗に急度したと云ふ意○莫謗佛祖……向レ內執ニ坐相一向レ外捨ニ坐相一は、皆謗佛祖なり、今は其兩頭を超えてすわるなり○未免……坐佛が其儘殺佛じやから、喪身失命を不レ顧すわる○喪身は身に掛り失命は心に掛る○頭長三尺……洞山僧問如何是沙門行、師云頭上三尺……と今用る意はこの人は大悟らしくも作佛らしくもない、眞諦俗諦にも見馴れぬ人じや、この人を知れば、坐上は自ら安穩なり○佛々は……佛々を要機とする外にもて來ぬ、此時要機々要の現成しあらはれ働く處を坐禪とするなり○先師無ニ此語一は、鐵牸覺對ニ法眼問一語也、法眼證明曰、眞獅子兒と、この意が入用で引く也、有と云ふを有と受け取らず、無と云ふを無と一定せず、語脉裏を傳却する氣宇が、獅子返擲の勢なり、金剛經如來終不ニ說法一とあるも、この意、變に應じて自由ある働きなり、これが祖々正傳の肝要機要なり○法傳……身には衣傳、心には正法傳受、これ身心一如の正傳あるなり○回頭……佛々と云つて、佛にゆづることで無い、今迄外に向ひたる頭を、法の坐佛殺佛の方へ回し、今迄脇へ向いて居た面を、坐佛の方へ挽てすわる、面々の手前々々がそれじや、祖々と云ふも、其通り坐禪して作佛するの大悟するのと云ふ頭を、坐佛の殺佛の方へふり返し、面を換る、これ祖々の機要なり。

【私記】　とは　參本いはく、此是箴ニ鞭坐禪卽箴一、故云ニ大用現前一、知レ非ニ其大用現前一者、則滯ニ在色聲塵中一、由ニ父母一生滅、謗ニ佛祖一、其謗佛祖者、認ニ佛祖一爲ニ色塵等一故、而無ニ所依一謂ニ之父母未生前一、故道ニ未免喪身失命一、若弗ニ喪身失命一、則一箇外道兒耳、若能喪身失命、則可レ謂刹那歷劫親養得底、頭長三尺、頸短二寸也、是卽大用現前自受三昧、不レ忘可レ識夫、と」影室いはく、今の用は、以ニ坐禪一爲レ用故大用現前と云なり、と」箴の外邪を對治する能あるがごとく、坐禪の廓落無依なり、ゆゑに大用現前といふ」ここをもて聲色向上なり、父母未生前なり、不存規則しるべし、威儀と節目とは、すがたといはんほどなり」莫謗好は殺佛なり、佛祖をたててはおかざるなり」三尺二寸は、ただ坐禪の人體をいふ」要機は坐禪をいふ、坐禪これ樞機箇要なり、別に機要なし、佛祖これ要機なり、ゆゑに佛佛はかならず佛佛を要機とするなり」その要機現前せりとは、要機の光前絕後なり」これ坐禪なりとは、卽是殺佛なり」先師無此語とは、先師の併却唇吻なり」參本いはく、此道理者、先師無此語是

也、と」祖祖機要をきこえんとして、この道理これ祖祖なりといへり」法傳衣傳とは、法衣の機要を嗣傳するなり」回頭換面の機要なり、執坐相の玲瓏なるなり」

【御抄】　坐禪箴の箴の心地は如右註、用と云は水體を置てあたゝかなるは用也と云ふ、今の用非爾、今の用は以坐禪爲用故大用現前と云也、聲色向上の威儀と云へばとて聲色の上に又別の威儀あるべしと云はず、やがて聲色を以て向上の威儀とゝるべし、父母未生の節目と云は全生の姿是也、則今の坐禪の姿父母未生前なるべし、莫謗佛祖好も坐禪の姿を指なり、未免喪身失命今の坐禪こそ喪身失命なれ、頭長三尺頸短二寸なむと云へば、さる異形なるものゝあらむずる樣に聞ゆ非其義、今の坐禪の上の頭長何程なるべきぞ、三尺二寸の詞、非尺寸、無縫塔の高さ七尺八尺といひ、世界のひろさ一丈なむといひし程の丈尺なり、凡見の寸尺に不拘尺寸道理なり。

機は可發の義也と云、機と云は佛に成べき機を置て、此機萬行萬善を修すれば成佛すと心得也、祖門に機を談するにはやがて以佛爲機也、故佛佛は佛々を要機とせりとはある也、其要機又坐禪なりと云也。

三世諸佛六代祖師不云詞ありとて、如三世諸佛說法之儀式、我今亦如是說無分別法と先師被仰、此文正しき經文也、今御詞大不審に聞ゆ、然而先師被出此詞時は、三世諸佛六代祖師等皆先師に藏身す、ゆへに此道理あり、以此謂先師無此語と被云也、先師祖師等の詞も道理のひゝく所にてこそ此道理は被云とも、今宏智の此詞いでくる時は先師無此語の道理現前する也、法傳衣傳ありと云云、先師無此語の道理に同也。

是は回頭換面、換面回頭只同事也、打ちかへたる許也、佛佛要機祖々機要は、只回頭換面換面回頭程の理也と云也只同事也。

【辨註】　辨曰、此箴の宗旨は、大用現前なり、今時屈ㇾ足兀坐、强て規則を彫僞し、炷香を算る坐禪にはあらず、聲色より已下の五句は、著語の格なり、聲色向上と云は、聲色より向上と云にはあらず、日用聲色に觸向するの上、卽是佛々祖々の要機三昧、回頭轉腦すべからず、父母未生前の節目、曾不ㇾ墮ニ今時一なり、莫ㇾ謗ニ佛祖一好、到ニ這裡一假令學ニ坐禪一、禪非ニ坐臥一、故若有ㇾ孰ニ坐相一則不ㇾ達ニ其理一、早是佛祖を謗するになんぬ、雖ニ然如一是又於ㇾ茲也、多未ㇾ免喪身失命、作ニ有氣息死人一、又義に這裡に於て不ㇾ顧ニ喪身失命一單刀直入せよ、上の十九葉を可ニ併見一、頭長三尺頸短二寸、若識ニ得此人一則坐處安禪ならん。

辨曰、要機、孝經至德要道、注疏云、窮ㇾ理之至、以ㇾ一管ㇾ衆爲ㇾ要、又機說文、主ㇾ發謂ニ之機一、蓋佛々の要道機智なり、故に要機現前せざるは坐禪にあらず、不知何をか要機現前と云や、諸人者何の劫にか忘却し來るや、點檢して看よ。

【那一寶】　坐禪箴、要機者、孝經至德要道注疏曰、窮ㇾ理之至、以ㇾ一管ㇾ衆爲ㇾ要、又機說文主ㇾ發、謂ニ之機一、大用已下著語の格なり、此箴の宗旨は、十二時中不ㇾ存ニ規則一、聲色堆頭觸向無方、圓陀々孤迥々なる卽是佛々祖々の要機三昧、各自妙有の大用現前なり、回頭轉腦すべからず、如ㇾ是の風流不ㇾ墮ニ今時一、父母未生前の節目なり、到ニ這裡一若欲ㇾ爲ニ作佛作祖一學ㇾ坐禪一、則非ニ但不ㇾ達ニ其理一、却謗ニ儞佛祖一なり、是故多人不ㇾ免、喪ニ失本命元辰一、作ニ有氣息死人一去、畢竟如何、頭長三尺頸短二寸、識ニ得此人一則坐處安禪ならん、向上の字は聲色に觸向する上と云義なり、未免の未字調ㇾ不可也、詳按海篇未猶ㇾ不也。

△辨、那、下割云、是同互ノ語ナリ
△那、なり。下割云、風化振鈴語也
△辨、那、生下割云、面

佛々の要道機智なり、佛々の外に要機なく、要機の外に佛々なし、要機現前せざるは坐禪にあらず、不ㇾ知何をか要機現前と云ふや、諸人者何の劫にか妄却し來るや、點檢して看よ。

如ニ覺鐵觜一不ㇾ認ニ言句之迹一、開ニ自己口一好師子吼是祖々の機要なり、此處に法傳衣傳の家訓あり、此要機は大都日用光中、回頭換面左之右之、物々上頭々上、現前而曾無ㇾ有ニ間隙一、佛々祖々非ニ他人一莫ニ瞎睡一好、本文要機機要とある別義なし、次句の韻聲に叶はしむるのみ。

不觸事而知、知は覺知にあらず、覺知は小量なり、了知の知にあらず、了知は造作なり、かるがゆゑに知は不觸事なり、不觸事は知なり。遍知と度量すべからず、自知と局量すべからず、その不觸事といふは、明頭來明頭打、暗頭來暗頭打なり、坐破孃生皮なり

【聞解】覺知は相手がある故に小なり○造作は氣力をつひやす○遍知は涉ニ衆緣一自知は居ニ陰界一なり○明暗來なれば明頭を打却して、今時に落ちず、暗頭が來れば暗頭を打却して久遠に滯らぬ、八面が來れば、連架打と、つゞけ打に打つ、一切に滯らざる境界なり○走する處が孃の生付てくれた皮を坐却し身心脫落の結跏趺坐なり。

【私記】とは　小量は、わが情謂のおよぶばかりで度量して知るなり」造作の法は生滅に屬す、なんぞ不變異の而如ならん」影室いはく、一知現前のとき事として可ㇾ觸なしと」明頭暗頭は、不觸事なり、百草頭の明明なり」坐破孃生皮とは、四大五蘊不壞身なり、今この皮髓の坐禪となり去るなり、ゆゑに回頭換面の機要なりといふ。

【御抄】知と云事打任は、世間には能知所知を置て是を談ず、境を不置して知と云事は不被談也、今の不觸事而知の知は非爾、ゆへに知は覺知にあらず、覺知は小量也、了知の知に非ず、了知は造作也と被嫌也、今の知は不觸事を以て知と談ず、ゆへに不觸事は知也と被釋也、遍知と不可度量、自知と不可度量と是を被制也。

此詞は普化禪師と云し人、此文を誦して鈴をふりてありきし也、其詞也、此文の心地は明の時は法界悉明、暗の時は法界悉暗也と云也、此法文の所談一切皆此道理なるべし、坐破孃生皮の心地は母の生たる皮を破となり、今の坐禪の姿坐破孃生皮の道理也、父母未生前なむと云詞同心也。

【辨註】辨曰、蒲團上の坐知は、覺知了知等にあらず、其知は不ㇾ觸ㇾ事なり、不ㇾ觸ㇾ事知は、遍知と度量すべからず、自知と局量すべからず、不ㇾ觸ㇾ事とは、明頭來明頭打、暗頭來暗頭打、朝三千暮八百、事々上物々上、無觸無背而知、是所ㇾ謂佛祖妙者、知見解會なり、坐破孃生面皮なりとは、一切明暗共に打著して、坐ニ破孃生一面皮一時の知、如ㇾ是なるなり、其知の宗旨は、不ㇾ觸ㇾ事無ㇾ知而知之知、又觸ㇾ事知而無ㇾ知之知、是を兀坐上の妙知と云なり、如ㇾ是の知は、坐禪に由て、今始て出頭現成するとにはあらず、孃生の面皮坐破の時節にあるなり、必ず坐をしも云はんや。

【那一實】不ㇾ觸ㇾ事而知は、蒲團上の坐知は覺知了知等の心意識の運轉に非ず、遍知自知と度量造作すべからず、故に知は不觸事なり、不觸事とは明頭暗頭朝三千暮八百、事々上物々上無ㇾ觸無ㇾ背、知而無ㇾ知之、知無ㇾ知而知之知、是を兀坐上の妙知と云ふ、所ㇾ謂佛祖妙者知見解會なりと、是也、如ㇾ是知は坐禪修力に由て出頭現成するとには非ず、必孃生の面皮坐破の時節にあらざれば、顯現せざるなり、坐破とは卸ニ却臭皮袋一拈ニ轉赤肉團一眼目なり。

△鈔、那、あり。リナなリニ作ル、△那、其下刪云、あり。ニ作本モアリ

不對緣而照、この照は照了の照にあらず、靈照にあらず、不對緣の照とす、照の緣と化せざるあり。緣これ照なるがゆゑに、不對といふは、遍界不曾藏なり、破界不出頭なり、微なり、妙なり、回互不回互なり

【聞解】 照了にあらずとは照了は心外に流るゝなり○靈照は內に沈む疾○不對緣……上を承けてなせには、六塵の緣に對せず照斗り獨立て居る、此方の照が向ふへ出て緣と化し、替たでは無い○緣これ照なるとは、向の緣は此方の照が向ふへ出て緣と化し替たでは無い○般若の照なり目前無法の意、遍界不曾藏とは、本無いものは、藏のものが無い、何にも外の物が無いゆゑに○破界不出頭……これは不曾藏の裏なり、十界を破て、一切の物が頭べを出さぬ、山非ㇾ山、河非ㇾ河と、回互して無差の圓融門なり、上は山是山、河是河と、不回互にして行布門なり、回互の時は、これが其儘、其れ、不回互の時はこれがこれでない○この照の般若は幽微なり玄妙なり言語でばかり知られぬ。

【私記】 とは　參本いはく、照了、猶ㇾ言ニ分別一、亦是小量也、雖ニ靈照非ニ慮知一、猶能所存也、と」不對緣を照すとは、森羅萬象を照と談ずるなり、能照所緣を超越するがゆゑに、照の緣と化せざるあり」緣これ照は、東方照なり」破界不出頭とは、世界崩壞寧無我身なり、天地撲落して出頭の餘地なし、微妙回互不回互の兀々地なり。

【御抄】 此照又能照所照と談一物をも不置して、照すと云事難談、ゆへに照了の照にあらず靈照にあらずと被嫌、靈照なむど云へば神變なむどにて照す樣なる事もありぬべけれども、いかにも談せよ今の照のぎには、にるべからず、今の照は不對緣を以て照と談ずる也、緣これ照なるがゆへに、照の緣と化せざる有とは被釋也。

遍界不曾藏の道理不對也、破界不出頭まことにも謂あり、破界の上何の出頭する物かあらむ、微也妙也とは微妙の言也、遍界不曾藏のすがたか如此いはるゝなり、回互不回互も同心なるべし、是能所なり解脫の上につかはるゝ詞なり。

【辨註】 辨曰、一切時處の緣に遇ふ、卽自智慧照なり、照の爲に緣となる、能所あるの緣にはあらず、一切時處の緣に遇ふ、卽自智慧照なり、照の爲に緣となる、能所あるの緣にはあらず、辨曰、遍界不曾藏は、不回互の句なり、破界不出頭は、回互の句なり、藏さざれども顯れず。辨曰、本文不觸事而知、其知自微、不對緣而照、其照自妙、の四句を、微なり妙なりの上に可ㇾ書、恐くは筆人の脫誤とみへたり、言は不ㇾ觸而知、不ㇾ對而照、其知其照、非思量不可測、是を幾微神妙と云、易繫辭云、幾者動之微、又云陰陽下測謂ニ之神一、說卦傳云、神也者妙ニ萬物一而爲ㇾ言也、以ㇾ此觀ㇾ之、門門一切境、回互不回互、回而更相涉、不ㇾ爾依ㇾ位住、是儞日用光中現行三昧、微なり妙なり、回互不回互なり。

【那一寶】 一切時處の緣に遇ふ卽自智慧照なり、照の爲に緣となる底の能所の緣には非ず、一切時處の緣これ智照なり、如ㇾ是の道理實に身心脫落の時節なくんば、爭でか通ずることを得ん。脫體現成遍界不曾藏は、不回互の句なり、緣これ照なるが故に、空界物なし、破界不出頭は回互の句なり、照の緣と化せざる故に朕兆未萌なり、是を藏さざれども顯れずと云なり。本文不觸事而知、其知自微、不ㇾ對ㇾ緣而照、其照自妙、二句を微なり妙なりとの上に書すべし、恐は筆人の脫誤なるか、或涉ニ重說一、故に省玉ふ、文章の弄處か、言は不ㇾ觸而知、不ㇾ對而照、其知其照

△辨、恩下割云、人々日用百千ノ
△辨、那、の下割云、日用現前ノ
△那、り下割云、如ヽ是
△辨、す下割云、盡界山河ヲ拈來シ盡力スルノ自知
△辨、那、る下割云、汝ガ自心上ニ
△辨、那、は下割云、能作所作ノ

非ニ思量分別之所ニ能解一、是を機微神妙と云ふ、易繫辭云、幾者動之微、又云陰陽不測謂ニ之神一、說卦傳云、神也者妙ニ萬物一而爲ヽ言也、以ヽ此視ヽ之、所ヽ謂門々一切境、回互不回互回而更相涉、不ヽ爾依ヽ位住、是諸人日用光中現行三昧微なり、妙なり、回互不回互なり、實々に究理せよ。

其知自微曾無分別之思、思の知なる、かならずしも佗力をからず、其知は形なり、形は山河なり、この山河は微なり、この微は妙なり、使用するに活鰖鰖なり、龍を作するに禹門の內外にかかはれず、いまの一知わづかに使用するは、盡界山河を拈來し盡力して知するなり、山河の親切にわが知なくば、一知半解あるべからず、分別思量のおそく來到するとなげくべからず、已曾分別なる佛佛、すでに現成しきたれり、曾無は已曾なり、已曾は現成なり、しかあればすなはち曾無分別は、不逢一人なり

【聞解】 思の知なる……思量して知らうが儘よ、知ると云ふは、必ず外の他力を借りぬ、自己の心かで知る、底意は思量の知が、其儘、非思量の知で、二つ物なく、般若の智光斗りと云ふこと○其知は形體がある、其形體は山河なり、目前に無ヽ法、みな此方の智から、建立するゆゑに、山河は智の形體なり、これ盡十方が般若の智光の光明なることを明す○この山河は微妙不可思議なり、これを使用する時は、知の正報、山河の依報、自己目前一枚にして、衆生も如ヽ是使用し、佛も如ヽ是使用す、其ありさまは、活鰖と、いきて働く、そこを今そつといはゞ、龍は禹門を越えてから、龍になると云ふ

でない、不ヽ圖ニ作佛一、不ヽ待ニ大悟一、やはり依報正報を微妙に使用して居る、活鰖々なるゆゑに○今不ヽ觸ヽ事の知は、わづかに使用するは、ちよつと〻思ふが、やはり山河を拈來して、山河不ヽ殘の盡力で知るなり、塵一本知るも、此方の心は、盡界を知るの心で知るなり、一知半知が小で無く、山河を知るのが大でも無い○山河の親切なるに……外の山河と手前とが、わかれぬ親切なるに、然るに吾が山河○わが知なくばとは山河と我と、親切に能所無いと知る知が無くば、其れは一知半解も無いと云ふもの、然れば山河と吾知と、自己目前一枚なり○分別……上の山河と吾知と二つ無いと知る分別思量の到來することがおそらく待ち久いと、なげくな、なせなれば已曾、分別なる……已は已來の義に取て無ヽ終なり、曾は從本之意にて、いつのころから無ヽ始なり、これ分別は無始無終なもので、人々今日朝から晩迄、作す分別が、これ佛々を現成する處なり、然れば、佛々の上では、早く分別が到來し、凡夫ではおそい抔となげくことは無い○曾無は已曾なりとは、曾無ニ分別一、已曾分別なりと云意なり、これは維摩經分別亦非ヽ意、と云語意で、已曾を曾無の上へ上げて見れば早くすむ、大意は從本已來の分別が無分別の分別じやと云ふことなり○現成なりとは……已曾は從來なり、從來は久いこと、現成は近いこと、久遠今時同一時なり、故に從本已來、日々夜々の分別が本無分別之分別で、思量箇不思量なり、其分別は、形山に秘在する、現成の山河大地なり○不ヽ逢ニ一人一なり……洞山大師、鳥道の答話の語なり、今の宗意は、鳥道の行履にして、能作所作の上に相手無い境界なり。

【私記】 とは 思の知となり去るがゆゑに他力をからざるなり」四大五蘊の形貌も、山河大地縱橫も、其知の擧頭せるなり、ゆゑに其知は形なり、形は山河なりといふ」この山河は、慮知測度にあらざるがゆゑに微妙なり」使用するとは、その微妙をわがものにしてつかふなり」活鰖鰖は、ものかくれざ

るなり、そこばくの諸法の家具となるなり」禹門の內外は、諸法の內外なり、諸法の內外は、活龍の頭角なるを、內外にかかはれず作するといふなり、この龍は兀坐の不動著なり」いまの一知わづかに使用するはとは、舉足下足これを使用といふ、この使用すなはち一知の進步退步にして、坐臥經行の玄路なるなり、わづかに使用するとき、盡界山河のありたけを拈來して知するなり、これ山河の自己に親切なるによりてなり、一波纔動萬波隨なり、わがゆくは山河のゆくなり」盡界も微塵も其知の親切なるがゆゑに、山河の親切にわが知なくばといふなり、山河大地わが知に疎遠ならば、一知半解もあるまじきとなり、まことに不觸事而知なり」分別思量のおそく來到するとなげくべからずとは、分別思量の去來遲速にあらざるをいふ、思量の兀々地なるがゆゑに」已曾分別なる佛佛すでに現成しきたれりとは、參本いはく、佛佛現成、則已曾分別、一時也矣、と」よし、已曾分別は、全分別なり、已曾は、過去のことばなり、とくに分別のあとのこらざるを已曾分別といふ、佛佛の出現せる、山河大地の頭煥なる、みなこれ已曾分別の玲瓏通暢なり」曾無は已曾なりとは、とくにそれにてあるとなり、一念萬年あれども、佛來祖來あれども、とくにそのことの現成なるをもて、已曾は現成なりといふ」神頭鬼面あれども、三頭八臂あれども、唯老僧一著なるがゆゑに、不逢一人なり。

【御抄】 此詞は曾無分別の思なき心地を知とするぞと心得て、分別の思と云へば、嫌べき詞なしと云へば、此思をのぞきたるよき知と心得ぬべし、非爾、思の知なる必しも他力をからずと云ふ、分別の思を知と談ずる上は、取捨の詞に非ざる條顯然也、此思知なる道理の上は、又他力をかるべからざる條勿論也、此知の形は山河なりとあり、山河を以て今は知と談ず、佛性の草子にも一山河大地、二山河大地を以て、佛性と談せしかば、此知の形の山河なりとある、初て非可驚、此山河は微なり、微は妙也とあり如文、使用するに活鱍々也とあるは、使用とは此道理をつかうにと云ふ道理なり、使用する時は、活鱍々也と云ふ、活鱍々とはいきたる心地、解脫の心地也、いづくまでもとをりたる心地也。蛇は禹門に登てうつる時必蛇となる也、のぼりはつしつれば、龍とはならずして死するなり、今の坐禪は蛇なる時も坐禪、龍なる時も坐禪、禹門に登時も不登時も、皆共坐禪也、ゆへに禹門の內外にかゝはれずとはあるなり、今の一知を使用するは、盡界山河を拈來し、盡力して知する也とは、所詮盡界山河を以て知と談ずると云心地也、山河の親切に我知なくば、一知半解不可有とは、山河を以て知と談ずる間、此道理が山河の親切とは云はるゝ也、我と云ふ我は山河也、知也、此外は一知半解不可有也。

是は知の外に一知半解不可有と上には云ふ、然而此上は分別思量はあるまじきかと覺ゆる所を、分別思量はなどなかるべぎぞなれば、尤分別思量有べき也、其分別思量はいかなるぞと云へば、已曾分別なる佛々すでに現成しきたれりとあり、已曾分別とは今始ていできたる義に非ず、無始無終なむど云心地也、所詮以佛々已曾分別とは云也、曾無と云へば無の詞かと聞ゆるを曾無は已曾也とあり、現成の詞也、曾無分別は不逢一人とは曾無分別の外、又まじはる物なき所を、不逢一人とは云也。

【辨註】 辨曰、清淨本然云何忽生山河大地、佛性篇云、山河大地皆佛性海なり、皆依建立と云は、建立せる正當恁麼時、是山河大地なり、すでに皆依建立と云、可知佛性海形如是、此意を以て見るべし、盡十方世界無非自己光明也、是下の句と隔句對なり。

辨曰、曾無は已曾なりとは、文略なる故に難見、曾無分別之思の曾無と云は、已曾の從來より日用種々の分別、すなはち曾無分別の分別、其形、形山に秘在するなり、故に前に云其知は形なり、形は

山なりと。

辨曰、已曾は從來の義、現成なりとは、已曾のそのかみよりの、種々の思量分別、卽自の佛知見の現成なり。

辨曰、洞山僧問如何是鳥道、師曰不逢一人、曰如何行、師曰直須足下無關去、曰只如行鳥道莫便是本來面目否、師曰闍黎因什麼認奴作郎、曰如何是本來面目、師曰不行鳥道、當知曾無分別は、沒蹤跡處、莫藏身なり、不行鳥道、本來の面目なり。

【那一寶】 思の知なるとは、人々日用百千の思量、其の知本然不生の妙智なる故に、覺知了知等の造作他力をからず、所謂思量箇不思量なり、微妙と云へば、昭々靈々たるものと認著する故に、其知形段は山河なりと、是知不知情無情の局量を超越するなり、佛性篇云、山河大地皆佛性海なり、皆依建立と云は、建立せる正當恁麼時、是山河大地なり、すでに皆依建立と云ふ、可知佛性海の形は如是○字書、形有現也、訓其知不借分別而自現形、其現處は山河大地なり、盡十方世界無非自己光明也、可以此意併看。

今此山河は、自ら微妙にして雖無思量分別、可著、不可得中只麼に使用して、活鏇々地なり、龍の禹門の階級を超過して、化作するに非ず、觸處現前なり、而今日用の一知も盡界山河を拈來するの盡力道にして、蓋天蓋地の智光明なり、然れども如是山河の親切なるは、吾知見なくしては一知半解あるべからず、山河を拈來する盡力の自知分別思量の晩く到來と嗟くこと勿れ、絲毫も己見を存せば却て不可親切、己見を不存ときは已曾の從來の分別、直に佛々現前し來る是學道の要なり。

曾無は已曾なりとは、文略難見、曾無分別之思の曾無は卽已曾の從來日用の種々分別卽曾無分別の分別なり、已曾は從來の義現成なりとは、從本己來種々の思量分別、已曾自佛知見の現成なり、故に前に云く其の知は形なり、形は山河なりと、這裡何の所存ぞ分別と說き、無分別と說ん。

傳燈洞山章云、僧問師、尋常敎學人行鳥道未審如何是鳥道、師曰不逢一人、曰如何行、師曰直須足下無絲去、曰只如行鳥道莫便是本來面目否、師曰闍黎因什麼認奴作郎、曰如何是本來面目、師曰不行鳥道、當知曾無分別は沒蹤跡處莫藏身なり、不行鳥道本來の面目なり。

△辨、光下割云、曾無分別之思、其知無偶而奇、曾無毫忽之兆、其照無取而了、此四句亦擧人脫說也、光字下可書△那、割云、本文此處有曾無分別之思其知無偶而奇曾無毫忽之兆其照無取而了之句是擧人脫說乎、參見三文圓覺奇無取而

其照自妙、曾無毫忽之兆、毫忽といふは、盡界なり、しかあるに自妙なり、自照なり、このゆゑにいまだ將來せざるがごとし、目をあやしむことなかれ、耳を信ずべからず、直須旨外明宗、莫向言中取則なるは、照なり、このゆゑに無偶なり、このゆゑに無取なり、これを奇なりと住持しきたり、了なりと保任しきたるに、我却疑著なり

【聞解】 毫忽は盡界なりとは、極小同大、大小邊表の立たぬ處、こゝを妙とも、照の般若とも云ふ、かうしたことゆゑに、毫忽盡界大小の兆を見ぬから、何でも將來せず○目を怪んで見へぬといへば背く、疾になる、耳を信じて聞くはずとすれば觸の病なり、この背觸の兩頭を離れば、將來する法なし、かうなるにはどふじや○直須……旨外なれば不觸なり、明宗なれば不背なり、言中なれば不背莫取則は不觸なり○奇なりとは、上を承て、無偶無取の處は、奇にして無第二人○了なりとは、明了、決了して、住持保任するなり○我却……上の知と照とをば、是何物ぞと、眼を著くるに、どふ

了語ニ界ヲ玉フ也
△辨、那、し下割云、不レ見ニ毫忽脱処ニ也
△辨、は下割云、恒なりノ二字脱スルナラン△那割云、知ナリ
△辨、に下其知二字アリ
△那、割云、其知
△辨、に下割云、其照二字アリ△那、割云、其照

も、名狀が無いから、手が著かぬ、ゆゑに疑著するなり。

【私記】　とはこの盡界、すなはち兀坐の自受用なるがゆゑに、たとひもち來るもつくるにところなし、一物不將來しるべし、盡界に客塵なき、これ自妙なり、自照なり、清淨本然なる山河大地なり」この毫忽盡界に多少廣狹の煩累をなすことなかれと誡勗するがゆゑに、目をあやしむことなかれ、耳を信ずべからずといふ、ひごろの耳目を脱離せよとなり」言旨は、葛藤なり、この葛藤を直截するがゆゑに明宗すべし、取則することなかれといふ、これ不對緣而照なるがゆゑに、照なりといふ」參本いはく、無偶無取也、是卽盡十方世界解脱門開、無偶之謂レ奇、豈非ニ孤坐ニ乎、無取之謂レ了豈非ニ癡兀ニ乎、と」しるべし、無偶はあひてなし、兀坐の前後際斷なり、無取は、たゞそれ照ばかりなるをもて、なにをかとるべし、住持保任は、われこの奇了とならざるをいふ」こゝをもて我却疑著なり、この疑著は、當人なり、兀坐面なり。

【御抄】　毫忽と云は、わづかの少分のことに思習はしたり、毛端なむど云て、すくなき事に思ひならはしたるを、今は毫忽とは盡界也とあり、大に舊見に相違す自妙也自照也とあり、此照いづくよりいかに來れりと云事なし、ゆへに將來せざるが如しと云也。

是は所詮我我が目を用、耳を信ずべからずと被嫌詞也、げにも此坐禪所談の前、今の照の道理の上に、爭我等が六根六境を用る事あらむ、此直須旨外明宗莫向言中取則なるは、照也とあり、莫向言中取則の詞、被嫌たるに似たり、只旨外明宗も、莫向言中取則も、皆照の道理也ととるべき也、此道理が無偶なり、無取也、奇也と住持しきたり、了也と保任しきたるとは云なり。

此疑著の詞、うたがふにあらず、什麼物恁麼來の疑著なるべし、說似一物卽不中の道理なるべし、坐禪とやいはむ坐佛とやいはむ思量とやいはむ非思量とや云はむ佛性とや云はむ蚯蚓とやいはむの疑著なるべし、此下には坐禪にも坐佛にも思量にも非思量にも佛性にも蚯蚓にも皆あたるべし、ゆへにうけらるゝ詞とこゝろうべし、我々が物を置きて是非取捨する非疑著、直須旨外明宗莫向言取則は古き詞也。

△辨、遇下割云詩行レ道遇々長遠也、又遇徐行也、△鄙、割云、詩行レ道遇々徐行也又長遠也
△辨、那、祖下割云、水深也
△抄、澄下割云、水ノ深キヲクナリ
△辨、那、の下割云、哲字乎

【辨註】　辨曰、奇異也、了決也、我また疑著して、更に這裡に、染汚住在せざればなり。

【那一寶】　毫忽と盡界と、大小の量を超越して、自妙自照なる故未ニ將來一が如く、毫忽の朕兆を見ず於ニ此處一耳目の內外を取捨することなく、直下旨外に宗を明めば、聲色堆頭脱體顯、是れいはゆる無偶の知無取の照なり、是を奇なりと住持し了なりと保任し來るに、我却疑著なりと、此處黃頭碧眼須ニ甄別一、古佛舌頭太密、宜ニ昭顧一、奇異也了決也、字彙云、凡數雙曰偶、隻曰レ奇也。

水清徹底兮魚行遲遲、水清といふは、空にかかれる水は清水に不徹底なり、いはんや器界に泓澄する、水清の水にあらず、邊際に涯岸なき、これを徹底の清水とす、魚もしこの水をゆくは行なきにあらず、行はいく萬程となくすすむといへども、不測なり、不窮なり、はかる岸なし、うかぶ空なし、しづむそこなきがゆゑに、測度するたれなし、測度を論ぜんとすれば、徹底の清水のみなり、坐禪の功德、かの魚行のごとし、千程萬程たれか卜度せん、徹底の行程は、擧體の不行鳥道なり

【聞解】　清水といふは……天からふる水は底に徹りて清水と云ふでは無いと云ふと徹は通也と註すと

をる義に取る○器界は世間のこと泓（ひろし）澄（ふかし）と訓ず、大意は世間に廣大にすみわたりたる水は清水で無いと云ふこと○徹底の清水と云は邊際涯岸なし、楞嚴ある隨二衆生一應二所知量一と云ふは、この眞空性水のと、この水は從レ生至レ死行ねばならぬ本無二涯岸一水ゆゑに、幾萬程すゝむとも不測なり、底が知れぬ、又向ふが不窮できはまらぬ○うかむ……空亦空なるゆゑに浮ぶ空なし、これは高うして無レ上を明す、沈む底なきは下に向ひて甚深なるを明す○測度のたれなしとは能所無きを云ふ、水は所なり測るは能なり○徹底清水のみとは眞空の性水斗りと云ふこと坐禪の功德も彼の前に云ふ、性水の魚行の如し、千萬程も誰れでも度ることならぬ、この水を底に徹りて行には擧體……擧レ體は全體と云ふこと、不行鳥道とは沒縱迹處莫藏身と云ふ意、鳥道なれば今時に不レ落、其鳥道をも不レ行なれば久遠にも不レ滯、久遠今時共に超過したる境界。

【私記】　とは參本いはく、羅二空中一猶依二稀物一泓二澄器界一、則方隅定局也、と」空にかゝれる水は、能所あり、つかへあり、ゆゑに不徹底なり」器界に泓澄するは、ここはすめども、かしこはにごれりといふ、かぎりあるをもつて水清の水にあらず」徹底の清水は、澄目不見底なり」ゆゑに魚もしこの水をゆくは、行なきにあらずといふ、魚のこの水をゆくとき、徹底水の派脈なり、あとあることなし、たゞ水の活計のみ現成するなり、行なきにあらず、徹底行なり」いく萬程となくすゝむといへども、不測不窮なることは、水魚の親切なるをもつてなり」影像なきがゆゑに、測度するたれなし」非思量不思量といはんとすれば、すなはち兀々地の擧頭のみ、ゆゑに測度を論せんとすれば、徹底の清水のみなりといふ」坐禪の功德魚行のごとしとは、心迹をあらはさゞるなり、千程萬程たれかト度せんとは、いく萬程も、坐禪の徹底水なるがゆゑに、ト度するたれなきなり、しかあれば日用の左之右之は、徹底水の渾然なるがゆゑに、頭角あらはさゞるなり、こゝをもつて徹底の行程は、擧體の不行鳥道といふ、はやく拈花顏に破顏するものなり」

△辨、那、杳下制云、杳々寬敞寂也又同レ杳々深遠貌

△辨、界ヲ空ニ作リ其下制云、異本作レ界

【御抄】　如文可心得、打任て日來我々が心得つる水を、水清の不徹底とは不可心得、その徹底の清水とはいかにあるべきぞと云へば、邊際涯岸なきを清水の徹底と云べし、魚の水を行は、まことに行なきにはあらずたゞしこの行いく萬程なくすゝむと云へども不測なり不窮なり、はかるきしなし、うかぶそらなし、しづむ底なきがゆへに、測度するたれなし測度を論せむとすれば、徹底の清水のみなりとあり、是則水與魚一體なる心地也、皆文に聞えたり、故坐禪の功德彼魚行の如しと云なり。徹底の行底を云はゞ、擧體の不行と云ぬべし、この行は不行の道理あり、擧體は全體の義也、行程の不行は會不會程の心なり、鳥道は無跡なり、解脫の心地に仕なり。

【那一寶】　空にかゝれる雨露、地に泓澄する河海は、徹底の清水に非ず、無邊際にして不可測なるを徹底の清水とす、魚行も亦游泳浮沉の行に非ず、盡法界不染汚の魚行なる故に、外に測度する誰れでも、徹底の清水のみとは、餘物の無レ可レ見、坐禪の功德も亦復如レ是、若有二邊際一有二所住一非思量の兀坐に非ず、徹底清の行程は不レ動二本處一、擧體不行鳥道なり。

空闊莫涯兮鳥飛杳杳、空闊といふは、天にかかれるにあらず、天にかかれる空は、闊空にあらず、いはんや彼此に普徧なるは、闊空にあらず、隱顯に表裏なき、これを闊空といふ、鳥もしこの空をとぶは、飛空の一法なり、飛空の行履はかるべきにあらず、飛空は盡界なり、盡界飛空なるがゆゑに、この飛

△絲、絲ヲ私ニ作リ、其下側云、長本作レ絲

いくぞばくといふことしらずといへども、卜度のほかの道取を道取するに、杳杳と道取するなり、直須足下無絲去なり、空の飛去するとき鳥も飛去するなり、鳥の飛去するに、空も飛去するなり、飛去を參究する道取にいはく、只在者裏なり、これ兀兀地の箴なり、いく萬程か只在者裏をきほひいふ

【聞解】　彼此普遍とは虛空は家の內にも家の外にも彼にも此にも一杯にある、これ等は濶い空ではない、濶空と云ふは隱の時は裡での顯の時は表でのと云ふ有無出沒を離れたものじや、この三昧を修する參學の鳥が此空を飛ぶは有とも無とも測られぬ飛空の一法なり○飛空は靈界なりとは、飛處も飛ぶ者も、空々の飛ぶは、やはり靈界の飛處の空なり、この靈界の飛處は、いくばくと云ことを不ノ知、卜度も及ばぬ處の道取を、道取して、杳々といはれた、この空を飛には直須……洞山のいはれし樣に、足下無私にし去て、有の無のと云ふ二途に繫れぬ樣にありたし○虛空の飛去する時、鳥も飛去し、鳥と空と二つ無い、故に鳥の飛去する時に、空も飛去して、鳥と空と一枚じやから、鳥の飛去する時は、空はない、鳥斗り、空の飛去する時は空斗り鳥はなし、只在二這裡一とは、足下無私の故に、有無に涉らぬ這裡は、飛空の上にある、飛空は空忍と有緣を離れた、正身端坐の這裡のこと○いく萬程……飛空については六度萬行等幾萬程があるけれども只這裡坐蒲上を離れぬことを云ふなり。

【私記】　とは　天にかゝれるにあらずとは、方隅なきなり、方隅あるは、頑空なり、ゆゑに闊空にあらずといふ」ここに普遍し、かしこに普遍するは、隱顯表裡あるなり、ゆゑに闊空にあらず」鳥空の無礙なるがゆゑに、鳥もしこの空をとぶは飛空の一法なりといふ、鳥のとぶとき空をとぶなり、空片片地なるをもて、飛空の一法といふ」參本いはく、杳杳者、不ノ可ノ測謂乎、と」とべどもあとなきか」飛空の外傍觀者なきがゆゑに、飛空の行履はかるべきにあらずといふ」內なく外なし、石霜も西堂もただ片片たるのみ、ゆゑに飛空は靈界なり、靈界飛空なるがゆゑにいふ」この飛のいくぞばくをしらざるは、空飛なるがゆゑなり」卜度のほかの道取するとは、杳杳を註するなり、闊空を兩翼三翼とする宗旨なり」このゆゑに脚下絲線なし、しかあるがゆゑに無絲去と道取せり」空飛鳥飛の親順なる、これすなはち潛行密用の兀坐三昧なり」ゆくさきの只在這裡なり、なにはのあしも、いせのはまおぎも、這裡をまぬかれざるなり、諸法の寂滅道場なり」外邪のこらざるがゆゑに、兀々地の箴なり」無量無邊の邊際は、邊際ながら正身端坐なり、ゆゑにいく萬程か只在這裡をきほひいふといふ」

【御抄】　如文、是又凡見の空闊の見をきらふ心地なり、此坐禪箴の空闊とは隱顯に表裏なき足を空闊と云ふなり、その理分明也。

鳥與空のあはで、さきの水と魚との如く可心得、鳥の空を飛は飛空の一法なり、この飛空の行履、はかりしるべきにあらず、飛空は靈界なり靈界飛空なるが故に此飛空いくぞばくぞと云事をしらずと云へども、卜度の外の道取を道取するに、杳々と道取するとは、只よのつねに遠とも遙也ともなむど云へば、尋常の卜度ににたり、此我我が思慮分別卜度の外の道取を道取するに杳々と道取する也とは、只打任て邊際なきなど云道理を超越したる、杳々なるべし、故に如此云也。

是は解脫の詞に仕なり。

此詞にて飛去の道理も空鳥の道理も能々可心得、空の飛去するとは、此空を空といふ、鳥の飛去とは此飛去を鳥と云ふ、此道理にて鳥の飛去するに、空も飛去する也とは云なり。

飛去とはこゝよりかしこへとび、かしこよりこゝへ去を云ふ、此飛去の道理は、只在這裏也、只在這裏とはたゞこのうちにありと也、飛去ともいひ盡界也、飛空とも云ふ只々在這裏の道理也、只在這裏と云へばとて、只我々が思が如くなる、此裏なむどとは不心得盡十方界只在這裏也、故に、いく萬程か只在這裏を、きほひいふとあり、如文可心得。

【辨註】辨曰、所レ言の水と空とを、或般は眞水性空、性水の經文、又は法性海水般若の眞空等と云は、此坐禪の玄旨を知らざる、敎師等の妄解なり、魚の水を行き鳥の空を飛は、心用の比喩なり、法性と云ひ般若と云は、魚の鰭鳥の翎の碍りなるぞ、實々に參究せよ。

【那一寶】世空の彼此に普遍して無礙なるは、闊空に非ず、隱顯表裡なきを闊空とす、盡界飛盡界空共に非ニ卜度一、是上句と同調なり、併照見よ、遲々如何如レ不レ行の形容、杳々は幽冥深遠貌、俱是不可思議不可思量の用處也、或般此水と空とを眞水性空性水眞空の經文、又は法性の海水般若の眞空等を將來て揑合す、似則似是則未レ是、法性と云ひ般若と云は魚の鰭鳥の翎の礙りなるぞ、此魚行レ水鳥飛レ空只心用の比喩なり、一篇主意實ニ歸于茲一、此處を魚行似レ魚魚飛如レ鳥との玉ふ、至ニ宋句一幾萬程只在這裡一競云と、這裡是何處、如ニ鳥不レ離レ空如ニ魚不レ出ニ水、人々箇々雖レ未ニ曾離ニ這裡一、這裏に回機する者少なるが故に、鳥もし魚もしとの玉ふ、若レ之字密意あることを知るべし、誠に甚深の示誨なり。

宏智禪師の坐禪箴かくのごとし、諸代の老宿のなかに、いまだいまのごとくの坐禪箴あらず、諸方の臭皮袋、もしこの坐禪箴のごとく道取せしめんに、一生二生のちからをつくすとも、道取せんことうべからざるなり、いま諸方

△詩、よの二字ナシ
△詩、邪、なりヲトニ作ル
△詩、山下割云、上ノ字ナラン
△詩、箴下割云、例ニ法智箴ニ而熟解焉

にみえず、ひとりこの箴のみあるなり、先師上堂のときよのつねにいはく、宏智古佛なり、自餘の漢を恁麼いふこと、すべてなかりき、知人の眼目あらんとき、佛祖をも知音すべきなり、まことにしりぬ、洞山に佛祖あることを、いま宏智禪師よりのち、八十餘年なり、かの坐禪箴をみて、この坐禪箴を撰す、いま仁治三年壬寅三月十八日なり、今年より紹興二十七年十月八日にいたるまで、前後を算數するに、わづかに八十五年なり、いま撰する坐禪箴これなり

坐禪箴

佛佛要機、祖祖機要、不思量而現、不回互而成、其現自親、不回互而成其成、自證、其現自親、曾無ニ染汙一、其成自證、曾無ニ正偏一、曾無ニ染汙之親、其親無レ委而脫落、曾無ニ正偏之證、其證無レ圖而功夫、水清徹レ地兮魚行、似レ魚、空闊透レ天兮鳥飛、如レ鳥、宏智禪師の坐禪箴、それ道未是にあらざれども、さらにかくのごとく道取すべきなり、おほよそ佛祖の兒孫、かならず坐禪を一大事なりと參學すべし、これ單傳の正印なり

【聞解】天童上堂に……自餘の漢を恁麼いはずとは外の人をば古佛といわぬと云ふと○天童先師の如

き知人の眼目ある時佛祖をも知音せらるゝなりこの先師の詞に因て知りぬ洞山下にも宏智如き人あることを○佛々要機……二句、先に解す、不思而現とは、要機機要の現前にする正當は、身心脱落して、不思量なる處に、本來の面目が現成しあらはるゝは、思量なればかくるゝ○不回互……六根門と、六塵境とについて、回互と不回互がある、回互と云ふ時は、根境渉入するなり、譬へば鐘が鳴る時に向ふの聲は、此方の耳へ渉入し、此方の耳は向の鐘聲の處へ行て渉入する、これが回互なり、然れども此方の耳は、やはり此方にあり、向の鐘はやはり向ふに在り互に住位居る、これ回互が其まゝ不回互なり、今不回互を用ゆ、六根は六根の位に住して、不動本處、六塵の境に渉らぬ、向ふの六塵も、やはり位に住して、此方の六根に渉らず、ゆゑに根が根で無く、境が境でない、分別を生ずべき相手が無い、其位に居ながら、根境身心脱落して、不回互して、要機々要が現成す○其現自親……造作にわたらずあり來る通、をのがてに、親密に手前に親會○其成……傍觀のはかるべきにあらず、自ら證契證會し、一點も分別をいれぬ○無染汚……悲思量にして現ずる故に文彩にあらはれぬから染汚意に屬する物が無い○無正偏……回互すれば正偏立つけれども不回互にして不動本處正偏有無迷悟なし○無委……委願也、頓壞也、やぶるゝと訓ず、底意は染汚無き故に親密をも、自脱落しやぶらざれども、おのがてに底が脱て居る、この親密を守て居るは、法執の病になる○無圓面功夫、作佛大悟をはからず坐禪一行に掛り餘事をまじへず、相手なしに功夫すれば坐が手に入るなり○水清……空闊この二句は、前箴と同意、魚行似魚、こゝが宏智和尚のとは格別なり、宏智和尚の魚行遲々、鳥飛杳々は、譬喩一通なり、今永祖のは、譬喩で譬喩をぬけた詞なり、これは金剛經三句の意でみるがよい、三句とは、衆生非衆生是名衆生なり、衆生は偏位、非衆生は正位、是名衆生は兼帶、玅應衆縁位なり、宏智和尚のは、第一句の衆生と云ふ處なり、永祖のは似魚似鳥とあれば、似たものは、そではないから鳥でもない、魚でも無い、これ非衆生と云ふ處と云て、又鳥を離れたでもない、兩頭を鯨こへた境界、什麼物恁麼來と云も同じ處、こゝには金剛經の三句の意を含でである、これを合點するが、佛々祖々の要機々要なり○單傳とは、師資以心傳心して、外人に傳へぬを云ふ。正法眼藏坐禪箴卷聞解終

【私記】　とは　文みなしるべし、高祖の箴は、いま略す、不能語ありみるべし、紹興二十七年十月八日は、宏智禪師示寂の年月なり、洞山に佛祖ありとは、洞山下に宏智あることをいふか」

【御抄】　是より以下の文宏智禪師を讃嘆せらるゝ御詞也、無殊子細如文可心得、此宏智禪師は洞山のした也、此宏智坐禪箴は、紹興二十七年十月八日これを被撰、今先師この坐禪箴をみて被撰坐禪箴は仁治三年壬寅三月十八日也、其前後の年記八十五年とあり○先師の坐禪箴を奥に被書、文字少々宏智の坐禪箴と相替許也、其理是同、仍不及問答略之、凡佛禪の一大事尤坐禪を勵いとなむべき事也。

【那一實】　古佛箴例宏智禪師箴熟覽すれば明なるも、句々言々有出身の活路、爲初學添些子字脚。

佛佛要機祖々機要（雖再昭不許）　佛々は佛々を要機とする、祖々必ず祖々を機要とする、各々坐臥經行佛祖の要機各々の機要なり、二六時中不思量にして只麼に現前し、無爲無分別にして只麼に現成す、是沒量の大坐なり、不觸事知と是なり、不思量而現不回互而成、法々法位に住して、不可思量にして物々現し、常自寂滅相、曾て回互すべきなうして、一切事上に回互現前なり、當頭現成せる公案ねじ向くな振り向な、是を菩薩道の壽命とも、三昧王三昧とも云なり、此二句で盡てあるけれども、爲慈悲故に向下文長し猶甚深也。

不思量而現、其現自親、不回互而成、其成自證、其現自親、無分別法、無性の緣起なる故に、現處卽心見聞純眞聲色純眞にして、自親し、其成自證、世間相常住、遣取すべき無くして眼見耳聞味さん、不回互の當體現成を證するなり。

其現自親、曾無染汚、其成自證、曾無正偏、從晝至夜其現成するまゝ十八界上の諸法可二染汚一物なく、洒々落々たる親密の法なり、曾無二正偏一、聲色毫も昧さぬ自證の三昧、本際解脫にして、正偏の功、有無の量に可レ隨なきことを。

曾無染汚之親、其親無委而脫落、曾無正偏之證、其證無圓而功夫、其不染汚之親處、何の委曲迂回に渉ることが有ん、從本有の儘脫落無正偏之證本より有無正偏に落ちぬ、自證法成佛作祖、生死迷悟凡聖の可レ圓なうして闊々地非思量の功夫なる故、隨レ時應レ節洒落なる三昧王三昧なり。

水清徹地兮、魚行似魚、空闊透天兮、鳥飛如鳥、水清と云は如何なる色と可レ知、徹底徹地無二涯畔一ことなり、清水に游泳する魚は去留ねをき唯如レ魚、活鱗無礙なり、空闊透天、一點の曇ない青天に鳥は空を命として常に飛で、縱橫自在悉皆頓と如レ鳥なり、是を日用光中、如去如來無限の坐臥經行、全無二罣礙一、兀々地上の風流と云ふ、只其人にして可レ知○如似字無二天物一而如レ天、不レ容二情見分別一事也、坐禪者佛家一大事、祖宗單傳正印也、欽信二受慈誨一、開二佛知見一、可レ報二祖恩萬一一矣。

【御聽書抄】▲坐禪箴、箴と云は則なり、坐禪の樣也、坐禪箴は父母未生の節目也、やがて今の坐禪をさすなり▲父母未生前と云は、佛向上の義也、下に對する上に非ず、父母所生に對したる未生前にあらず、坐禪之面目、非衆作業之故に、坐禪は人間界にあるべき事ならず、坐禪のときは坐禪の我にてこそあれ、日來の我にてはなき也▲坐禪をやがて坐佛と云が、今の脫落にてはある也、脫落を以て萬

藤しもてゆく爽身失命と云も、我坐禪の時節なり▲この兀坐の思量を以て一切善惡都莫思量と云也、但善惡に對して思量せざるには非ず、兀坐の時の思量は皆都莫思量也、▲坐禪は人の坐禪するに非ず、兀坐に人は被坐禪也、兀坐の思と云は端坐なり、蒲團也手足をかさねてくむ也、一念二念と云、一大地山河をふさねて念と云べき也、此時盡十方界眞實人體とも云也、又坐斷十方とも云べき也▲兀々地思量ひとりに非ずと云ひとりは諸人の見解をあぐる心也、又宗門に付ても非一る心もあるべし、諸人の見解非一と云は、凡夫二乘菩薩等の思量なるべし、又今禪宗と號する輩も非一人也▲宗門の見解に非一と云は、一山河を以て思量とし日月星辰等を以て思量とする也、又磨塼を以ても思量し、作鏡を以ても思量する故なり、此思量等は、雖非各々義、しばらく其一とはあぐるなり▲藥山の道は其一なりと云は、二に對したる一にあらず、獨一也、但獨と云へばとて、又緣覺の獨覺といはるゝ義にてはなし、たとへば不觸事而知の心なるべし▲唯獨自明了餘人所不見と云ふ、此經文非自解義、此自明了は、盡十方界の自己の明了也、可對他人なきゆへに、餘人所不見とは云也、所詮自も不見也、不見これ自なるがゆへに▲思量の皮肉骨髓なるあり、非思量の皮肉骨髓なるありと云は、此詞不審也、但し世間の詞を超越しぬるときに如此談ず▲思量と云は思量を置て、不思量非思量と云心地歟、世間に同ず、しからば不の字も似無詮思量の意識にあらざる事をしる時、皮肉骨髓となる、其時は思量さらず、すてず兀坐の面目は思量也▲坐禪の思量と、世間の思量と各別なるべし、今佛道を談せむには、世間の詞不可用、但思量もあるべし、吾我とも云べし、是は佛法の上の詞なるべし▲思量の非心意識道理よく〳〵可心得、坐禪儀に心意識の運轉を止と云ふ、此心意識世間の心意識と聞ゆ、是をやめむといとなむと心得ば、邪見也、又公按を疑居たる所が、いづくにつくと云事なければ、疑が禪の心にあたるべしと云やからあり、大疑の下に大悟あり、な

むと云證據に引、これまた非爾、坐禪すればやがて心意識を止る也、此時の心意識思量不思量非思量と仕ふゆへに、坐禪の上に心意識ともつかはむずるは、思量不量思非思量を以て可心得、然者不止ともやむとも云べきにあらず、心意識と云詞も、運轉と云詞も、能々心得べきを參學をろそかなるときは、心意識の詞〻、運轉の詞も、日來存じつるが如く、心得て今此證據に引くいはれなき也、凡祖師の言句を無理會語なむど云て、只疑へなむど云ふ、能々可思合事也、○不思量底を思量すとは、不悟大悟すといひ、悟上得悟の漢と云程のことなり▲三世の不可得を敎家に談ずるには、過去已去又見在不住、未來いまだきたらず、仍不可得と云義あり、又三界唯心と云三界を一心と談ずるには、三世あるべからずと、是までは敎に談ず、宗門に談ずる所は、心不可得と云、三世は心に對してこそいはるれ、心不可得と談せむには、三世あるべからず、又心に三世を建立せむ時は、さきに談ずる三世にあらず、過去心と談ずるとき、見在に對するにあらず、去も不變異所なるが故に、見在心と談ずるとき過去未來に對するに非ず、從無住法立一切法なるがゆへに、未來心と談ずるとき、過去見在に對するに非ず、今の坐禪の時節を、父母未生前の節目といふゆへなり、三世の心を以て、思量と仕ひ、三世の心を以て、不思量と仕ふ、此心地は三世をば、心なりと云へども、心には三世なきゆへなり、此三世と云は、世間に常に談ずる三世をさすなり、常の三世と云は、我に對したるなり、我をはなれたるを、佛法と云べし▲思量を皮肉骨髓と宗門には談ずべし▲什麼思量の皮肉骨髓と云はば、答べし今の坐禪の面目これなりと、什麼不思量の皮肉骨髓と云はゞ、答べし今の坐禪の面目これなりと▲不思量底たとひふるくとも、と云は、不思量底をあらためむとにもあらず、やがて不思量を置て思量と仕ふゆへに、ふるくともさらにこれ如何思量なりと云ふ、此ふるくともと云は、古今にかゝはれぬふるさなり、全體のふるきなり▲非思量を使用するに玲瓏也と云へども、不思量底思量するに、かならず非思量を用と云は、心不可得の上のこる一法なけれども三世を置やうに▲皆思量不思量非思量坐禪の面目一なれども、是等の詞あるべきゆへをいふなり▲非思量にたれありたれわれを保任すと云は、非思量の外に誰あるべからずと云へども、不思量並思量ををく、思量不思量を置と云へども、ともに非思量の面目なるべきゆへに、誰我を保任すとは云也、たとへば諸法を實相といはむが如し、誰れ誰を保任す、我れ我を保任すと云はむが如し、不思量と思量とを誰とはさすなり、誰我を保任すといふは、非思量の我と、不思量思量との誰をあはせて保任するなり▲兀々地たとひ我なりとも、思量のみにあらず兀々地を擧頭とすといふは、思量のみにあらず、不思量も、非思量も、兀々地なるゆへに、兀々地を擧頭すと云は、たゞ兀々地ばかりを擧する心地也、坐禪の姿也坐禪坐禪也とも思量のみにあらず、不思量も非思量もともに兀々地の面目なるゆへをあぐゆへに擧頭すなりと云也、たとへば實相すなはち實相と云はむが如し、擧頭と云はあぐと云詞なり、頭の字は無別義なり▲兀々地たとひ、兀々地いかでか兀々地を思量せむと云は、思量不思量非思量ふさねて、兀々地ならむにはいかでか兀々地と思量すべきと云也▲兀々地爭兀々地を思量せむとは、兀々地たゞ兀々地なるがゆへに、兀々地いかでか非思量せむとも、不思量せむとも云也、思量のみにはかぎらず▲塼を磨て塼を得、鏡を磨て鏡を得といはむが如し▲兀々地の思量は卽兀々地也、ゆへに思量と兀々地との面目を、いかゞはとはとくなり、如何ととく道理は、兀々地が思量なるゆへなり▲又一方は敎に談ずる量、無には非と云ふ心地一あれども、實には兀々地いかでか兀々地を思量せむと結しぬるときに、すべて思量不思量非思量いづれも必非可用、又非不可用と云心ともきこゆ、又一にはあらずとあぐる所がやがて、兀々

地の量一にも可心得也、たとへば入の一字も、不用得とは云へども、又入の一字如非棄也▲如此單傳する事すでに釋迦牟尼佛より直下三十六代と云て、するに又如此正傳せるすでに思量箇不思量底と云ふ、是は相傳のゆへばかりをあらはすぎならば、さきの單傳の詞に顯然也と云へども、かさねて正傳と云は、直下は不思量也、不思量の向上は思量也、ゆへに思量は釋迦牟尼佛、不思量は藥山と可心得也、直下向上思量不思量也と云へども、その上下の蹤跡は、直下も三十六代と算ればたゞ思量不思量とあらはるゝ也、向上も三十六代也、百尺竿頭上下する程の三十六代也、思量不思量を佛與藥山にあてゝ、三十六代をば置也、思量箇不思量は、烈焰亙天には佛說法、亙天烈焰には法說佛と云程の義也▲三十六代を非不可算、然而三十六代をさし置て佛與藥山に相傳と云義もあるべし▲以思量爲釋迦牟尼佛と、以非思量可爲藥山、以思量爲藥山以非思量可爲釋迦牟尼佛と不思量を思量すと云事は、以不悟大悟すと云程の事也▲便是平穩地也と云は、得胸襟無事了の上は善惡の法なし、ゆへに平穩地とは云なり、行亦禪坐亦禪語默動靜體安然と云は已上二の詞は上の便是平穩地也は、坐禪の時の意をさす、つきの行亦禪等の詞は必坐禪せずとも行往等皆禪也と云、邪見を被出也、仍共に可不用歟もし是等の詞を題ゆるして心得、坐禪語默動靜等皆佛法の上にをかむ時は此行はありくとは不可心得、事行也佛行なる坐禪也、此坐今の坐禪也、たゞいたづらに坐するを禪也といはず、坐禪なり、語默動靜又皆以佛威儀をさすなり、いたづらに衆生の語默動靜と不可思、默と云も佛の無言說程の事也、動も諸法を動じて實相と云程の事也、靜も實相を實相と云程の事なり、語默と云も其義非一ともいひつべし、然而是等の詞を被引心は彼邪見破せむがためなり、一向用ざらむよし▲意の、止觀口の說默身の威儀なむどたつ、身の威儀に付て、常行常坐半行半坐三昧と云、此行とは心得まじこの坐とは心得まじ、佛行佛坐はるかにことなり、事にわたりて分々あるなり、證をとくにも分證とて一分二分わかつ、初地より十地までも、分々の證あるべし、この證は不可然也▲なにかこれ初心いづれか初心にあらざる、初心いづれの所にかをくと云は、三界唯一心と談じぬる上は、初心後心をかれず、何所とわきがたし、初發心時便成正覺といふ、これ初發心の時正覺の功德を具足すと云ふと、きこゆ然にはあらず、便成正覺は初發心の時也と云ふ也▲入佛入魔の力ありと云も坐禪也、佛祖を超越したるを入佛入魔とつかふ、入之一字は不用得なるべし▲進步退步と云はずすみしりぞくあゆみ也、百尺の竿頭を進步退步する進退異なれども、百尺の竿頭の上の事也、坐佛作佛と云も坐禪の一面の上にとく理、たとへば如此竿頭の上をあゆむにはあらず、やがて竿頭を步とするなり、此道理に落居すべき也▲溝にみち壑にみつ、量と云は入佛入魔と云程の詞なり、所詮みちたる心也▲南嶽問大德坐禪圖箇什麼と云は、この圖は坐禪の圖也、坐禪の向上にあるべきかと問、この圖格外に圖すべき道のいまだしきかと云も、この圖すべて、不可圖歟と云も、此圖當時坐禪にいかる圖か、見成すると云も、此圖箇什麼は、藥山の段に兀々地思量什麼と云ふ同詞也、圖什麼なるがゆへに▲格外と云は內に對したる外にあらず、又たとへ內ととくとも不可對外也、此外字は坐禪の外也、但外と云は坐佛をさすか、恁麼ならば坐禪作佛あひさること如何、坐禪の外とは向上程の事也▲坐禪より向上にあるべき圖のあるか、當時坐禪せるにいかなる圖か現成せると問著するかと云ふ、此歟々と云詞の下に皆坐禪坐禪と云答の詞を付て可心得、非不審之歟也▲彫龍眞龍の雲雨の能を學すればともに彫龍眞龍二の面目がなくなるなり、但是は雲雨につきたること也、又彫と眞とを云にも、雲雨の能あること前蹤あり、ともに雲雨の能ありと云へば、圖個什麼の圖いづれもすてざるが如く、彫も眞も共に雲雨の能ととる也、所詮彫も眞も善惡勝劣な

しと可心得、三界の火宅を出ともいふたゝ三界を猶とも云ふ(二乘の不生なれがふこれなり)三界を一心とも體脫す、彫龍は未脫のとき眞龍は解脫のときなむとはあつべからず、解脫與繫縛たてわけてきわををくまでは更に非正法、三界を一心とも諸法を實相とも云こそ解脫眞實の大乘の法なれ▲耳目貴賤又以同盡十方界眞實人體と談じ、盡十方界沙門一隻の眼なむと云程の耳目なるべし、いかさまにも聲を耳にて聞き、境を眼に見むは世間の法なるべし、眼處聞聲せむこそ佛道のならひと云はむもあたるべからず、耳を眼に取替たらむばかりは無詮、吾我をはなれての上の事なり、相對の法あるべからざるゆへに▲目を輕くする事なかれ耳を重する事なかれと云は、目をも耳をも可心得かたあり、ふるき詞には機見不同聽異聞と云詞あり、但異聞のみならず同聽不同とも云べし、華嚴の會には聞者不聞者齊肩、又見の不同と云は佛にも四敎の佛不同也、又大乘の學者と云物も、かへりてはたゝ應佛を執す、法華經の心地には佛不入滅、靈山には四衆に被圍繞て說法しをはしますと云ふ、淺機のものは不信用、ちからなき事也、梵網瓔珞の戒品を引て大乘戒と云へども說の詞は併ら小乘權門の心地なり、應佛を執するも是程の事也▲耳目をして聰明ならしむべしと云は、三世諸佛立地聽法するぞ今の聰明にてもある▲圖は作佛大德坐禪の圖なり、圖坐禪と云詞のもれたる樣にきこゆ、然而顯然なり、その故は圖は作佛より前なるべし、後なるべし、正當恁麼時なるべしと云ふ、この前後竝正當恁麼時皆禪也と可心得、先々の詞も、皆如此くとかるゝを、參學眼いまだしき時、禪の字のなき心地はあるなり▲打破と云時は未打破あるべしときこゆ、脫落と云時は未脫落あるべき心地あり、然而未打破未脫落の時刻は不可有、もし未打破未脫落をつかふべくは、打破脫落にかさみたる詞につかふべし、未打破未脫落は前後正當恁麼時にかゝはらぬ未打破未脫落なるべきゆへに、凡夫の見には未の字を置つれば、未解脫時刻と思は

迷なり▲葛藤と云詞いできぬれば依倚の心地になる非爾、たゝ葛藤しもてゆくとこそあれ、倚樹ともいはず、たとひ依倚と心得る事ありとも、葛藤葛藤によると可心得也▲圖作佛は脫落にして、脫落なる圖作佛かと云は、何事のいかにてと云事のなきゆへに、圖作佛は脫落にして、脫落なる圖作佛とも云也、世間には多く小乘の心地をひかへて、三僧祇百大劫の修行にて、作佛するを信ず例へば又一聲一念の名號にて成佛すると心得も、作佛のたけなるべし、又三界唯心は心を作佛するか、心に被作佛か但心外無別法と云ゆへに、佛の外に別の佛なからむには如此可心得、悟にさとらるゝを被作佛にてあるべき、さればとて作佛せられぬさきはなにとありけるぞと覺る所を佛を作佛するかとも云也、一面出兩面出と云を聞ては、作佛せらるゝぞ、作佛するぞなむと云を兩面と云ならむと心得、これも猶のきたる見なるべし、兩面の兩の字不用得也、たゝ一佛出なるなり▲南嶽ときに一塼を取て石上にあてゝとぐ、古佛心は牆壁瓦礫と云ふ、然者古佛心を磨すとも心得ぬべし、三界佛身ときく、諸法を實相と云へば三界を磨すとも心得べし、實相を磨すともいひつべし▲誰磨塼とみむと云は佛見にやくす、磨塼の始終にくらきゆへに誰か磨塼とみざらむと云は、衆生の見をさす、磨塼とみるゆへに但如此云はゞ頗る非本意、佛法の談に衆生の見不可用也、故に見と云もみざらむと云も共に佛見を談ずべし誰かみざらむと云ふ義始終の本意也、道理に叶ゆへに佛道には都不見と云事不可有、誰かみむと云も又道理也、磨塼とはみゆべからざるゆへに兀々坐とも、作佛とも坐佛ともみるべきゆへに今は坐佛と見べし、作鏡と見るべし、ゆへにたれか磨塼と見むとはとかるゝなり▲依經解義三世佛怨離經一字如同魔說と云文を、あしく凡夫の了見せむする所を、云ならむとをとしすゆるなり、是は一重の義非本意、佛のあだと云も世間のあだに心得合すべからず、魔說と云も世間の魔にてなし、あだと云も不悟至道す

と談ずる不悟又諸法佛法なる時節の迷或將錯就錯ほどのあやまりと可心得、若至既至不至なむと云分也、魔と云は入佛入魔の魔、鬼窟裏なむと云鬼程に可心得、磨塼見不見にさだまらば、作什麼とは云べからず▲誰か磨塼とみざらむと云心は、磨塼の外誰なきゆへなり、誰かみむと云は誰なきゆへに不可見と云心なり、此二の義あるゆへに、作什麼と被云也、是によりて作什麼なるはかならず磨塼也と云ふ▲萬般の作業に參學すべしとは、作業は作什麼の法をさすなりいたづらに凡夫の作業には非ず、萬般につきたる作業也、自己の所見の徒なる所をあらわすに佛を見るに佛をしらず、水を見をも不知山を見をも不知と云也▲南嶽云磨作鏡この道旨あきらむべしと云は、磨作鏡と見たり、しかれば鏡をといで作鏡と心得るあたらざるにあらず、ゆへに塼はたとひ塼也とも、鏡はたとひ鏡也ともと云ふ、何も磨の力究也、許多の傍樣ありとも如此心得ぬれば、磨塼作鏡とも云べし、坐禪はたとひ坐禪也とも、作佛はたとひ作佛也とも云心なり▲大寂云磨塼豈得成鏡耶と云は成鏡不可叶詞に似たれどもさにはあらず、磨塼と云所にやがて成鏡の道理はある也、ゆへに磨塼の鐵漢なる他の力量をからざれどもと云ふ、磨塼は成鏡に非と云は、やがて成鏡なれば、磨塼にはあらずと云也、ゆへに成鏡たとひ譬也とも、すみやかなるべしと云ふすみやかなると云は、これ磨塼にまたるる成鏡にあらざるゆへ也▲所詮坐禪佛也と談ずる上は、塼が鏡にならずと云べからず、すでに牆壁瓦礫古佛心也と談ず、瓦佛心ならば、鏡になさむとうたがふ所にあらず、磨塼作鏡の道理如此、磨塼は作鏡の圖なり▲坐禪豈得作佛耶と云は磨塼豈作佛せむや、菩提豈菩提ならむやなむと云はむが如し、坐禪豈得作佛やと云は親切の義なり▲南嶽云如人駕車車若不行と云は人の車に駕すると云は、法華經の大白牛車の心なり、是一乘なり世間の車にはあらず▲車若不行の、若の字は佛性の時節若至の若のごとく可心得也、仍ひとへに不行と道取するにあらずと心得なり、不行の行は常の歩に不可准、山流水不流にならふべし、山の行は動せざるを行と云ひつべし、水はながれざるを行と云つべし、佛の行は流轉を止を行とすれば、必行を行とすべからず、祖門の行は東西の馳走を止て、端坐坐禪を行とす車の行不行いまだしらざる所なり▲人の車に駕すと云ふ、人と車とは鏡與塼の如く也、人與車一二の論に不及也、車與牛又是も鏡與塼同程の義なり、ゆへに車を打も是牛を打も是也と云は、塼をとぎて鏡となすと云同程の義也、人與車牛と三を各別せば、坐禪作佛坐人のたとへになるべからざるがゆへ也▲不行ありとも參すべし、なしとも參すべしと云は、參學の參事也、時なるがゆへにと云は、善惡は時也、時は善惡に非ずと云心地也、時々隨がゆへに不行の有無は時々隨べきがゆへに▲車の不行と云へばとてありくべきがありかざるとは不可心得、車の全面始終を行と仕ふ時は行も行也、ありかざるも行也、車に不行を用むときは東西に馳走すとも不行なり、ゆへに打車打牛はゆかしめむが爲にはあらず▲車を打と云は、打と云詞は、世間に打任てなむと云詞にならふべし、杖を以て物を打とのみは心得まじ、牛を打にひとしからざる也、世間に牛を打法あれども、車を打法なし、佛道には車を打、牛を打ともにあり、然而世間に打には異也、世間には打車法も、打牛法も如無、佛道には鞭打を不用、故に佛道の鞭打は異なるべし、世間の鞭とはふちとすはえとの事也▲打車卽是打牛卽是は、坐禪をや貴ぶべき作佛をや貴ぶべきと云が如し、車を打は牛も可進と云ぬべし、張公喫酒李公醉と云詞にも心得合すべし、又張公喫酒李公醉と不可云とも可心得合自他なきゆへに▲坐禪の義を談ずるに藥山與僧問答あり、思量の義也、次南嶽與江西有問答、圖の詞也、次磨塼成鏡の問答あり、次に如人駕車の詞あり、今坐禪の義にたとふるに、人の車に駕すると云詞は、大德坐禪圖箇什麼にあたるべき歟、この義次第に可心得合也、さきの義を以て思には、

坐禪必行也と、不可定今の車若不行の詞は、坐禪行ならずと云、一遍をあぐるか打車卽是、打牛卽是の詞、坐佛作佛程の義也、如何卽是等との詞也、ゆゑに打車も卽是、打牛も卽是なる道理也、磨塼も卽是、成鏡も卽是といはむが如し、思量兀々地、非思量も兀々地、若行も坐禪若不行も坐禪也、このゆへを葛藤すともとくなり▲又車の下には無寸土とも可心得、車の行をもや判ずべからむ、難一定、行の時は車も牛も行すべし、不行の時は車も牛も不行也、ゆへに打車卽是、打牛卽是と云也、又大寂無對は、打車卽是打牛卽是也▲拋塼引玉と云は、磨塼作鏡程の事也、磨塼と云へばとていやしむるに非ず引玉と云へばとて貴ぶに非ず、坐禪の身心脫落すると云も、身心脫落すればやがて坐禪の體也、塼をなぐるはやがて引玉の心地也▲攙奪すべからずと云は、對すべき事のあるを無對也と心得む、則是を攙奪と云べき也、攙奪すべからずと云は、無對なるべきを無對と是するゆへなり▲南嶽示曰汝爲學坐禪爲學坐禪佛是は坐禪がやがて坐佛なる道理をのべられたり▲すべて四威儀は皆佛が、何ぞかならずしも坐を本とするやと云ふ疑ありぬべきを、四威儀の中に坐はこれ大安樂の法也、なむと云ふ事はあたらざる詞也、佛法には善惡勝劣をたて、能所彼此の差別なし、いかでか四威儀の內に勝劣あるべき、坐禪坐佛なりと云時、此凡夫の思が如くの、行住坐臥にはあらねば、無限の坐臥と云也▲若學坐禪々非坐臥と云は、此禪は坐禪の禪なるがゆへに、坐臥にあらず此坐臥は世間の坐臥のゆへに、坐禪の禪にあらず、坐禪は坐臥にあらずと單傳するよりこのかた無限の坐臥は自己也、此無限の坐臥といふは、佛法の上の坐臥なり、ゆへに無親疎無迷悟無智斷也（これ父母未生の心地なり）坐禪の坐臥にあらずとこころえぬさきには、無限の坐臥あらはれざるが如し、若學坐禪々非坐臥と云ふ、いま坐禪にあらずと云へばあしき坐のまた別にあるにはあらざるべし、やがて非定相佛と心得る也、今の坐禪は戒光の如しと可心得、其ゆへは戒光口よりいづ緣あり因なきにあらず青黃赤白黑に非ず非色非身非有非無非因果と云ふ、これ緣ぞ因ぞ、青黃赤白色身有無を劣にしてきらひすつるをあらずと仕ふにてはなし、戒光をやがて、緣とも因とも青黃赤白色身有無ともつかふべきなり、無限の坐臥と云は、世間の坐臥を離たるを無限と云也、自己也と云は、この自己は坐禪の自己也、坐臥無限なるがゆへになむぞ親疎の命脈を尋むと云は、無限の坐禪坐禪の自己となりぬる上は、親疎の命脈すべてたづぬべからずとなり、智斷をもとめむと云は、智慧を發て煩惱を斷ずる事也、今の坐禪には智斷をもとめずと也▲若學坐佛々非定相とは、この佛非定相はたとへば若學大海といはば不宿死屍と云はむが如く、坐禪を學するは、佛非定相といはるゝなり▲坐禪の禪は定なるべし、ゆへに坐禪を坐佛と云時は、佛は定と聞ゆるゆへに、佛かならず定にあらざる所をあらはさむ爲に、佛非定相と云、たとへば四句の不同を云ふに、有門（三藏教）、無門（通教）、亦有亦空（別教）、非有非空（圓教）と立つるを、今は有も無も亦有亦空も非有非空も皆佛ととる、これ有佛無佛、亦有亦空佛、非有非空佛、と云はむが如し、非定相佛と云は、佛にあらずと心得れば、あたらざるなり、たゞ非定相佛なり、佛の名と可心得、定と云をば禪定とのみ人は心得、禪定は外道も修す、天上にも四禪と談ず、是等の禪は今の禪にあらざるべし▲從無住法立一切法と云事あり、道場を不立して威儀を法界に徧すなむど云ふ、これを法界定と云べき歟（佛の定なり）大方は懺悔をとくに、一切業障海皆從妄想生と云ふ（普賢經文）この文を云ふに一切の業障は妄想より生ずと云ふ、妄想は又いづくより生ずるぞと云ふを、生ずる所なければこそ、妄想とは云へとにぐる也、但又端坐思實相と云ふ、實相を尋るに諸法實相と體脫するときに、實相よりさきの本ある可らず、たゞ實相也實相は唯佛與佛也、坐禪これ也、實相は端坐、端坐は坐佛也、又端坐思實相と云へばとて實相の外に思を置事不可

有、欲知佛性義と云へばとて、佛性の外に欲の字も知の字も置事なき也、實相ととくとき唯佛與佛、乃能究盡と云へば、佛の實相と云事をば、知て衆生は不可叶樣に覺ゆ、非爾、諸法實相と云時に、實相より外に、衆生も不可有凡夫外道もある可らざれば、唯佛與佛のみ也と云なり▲一佛二佛と云は、已前に佛の一面出兩面出と云し程の事也、何を一佛と云ひ、何を二佛と云には非ず、全體佛の事也、千佛萬佛とも云べし▲汝若坐佛卽是殺佛と云は、坐すれば佛也、佛を待に非ず、故に殺佛也、磨塼作鏡の詞につくりてみるに、坐佛磨塼なり、磨塼せられて鏡となる可らず、やがて磨塼作鏡也、故に坐すれば佛はころさるゝ也、更に作佛をまたざるゆへに▲殺と云事ものゝをはりに付て云ふ、又殺は生命不殺なむど云時に罪障に付たり、但佛法修行の上には不然、生死輪轉の命を止れば是をも殺とつかふべし、佛は無明塵沙の父母を云べし殺すとも云べし、佛は入涅槃し御はすこれも殺の心なるべきか、又涅槃と云にもまちまちなるべし、二乘の涅槃はまだ可生業のなきを涅槃と云ふ、凡夫の方には死と云ふ、外道は斷とす、大乘の涅槃は生死の二を解脫す、以三界唯心とするこれぞ、佛の涅槃なるべき不可似世間死、殺佛と云事始て聞驚に似れども、卽心是佛と云とき、又非心非佛と云これ殺佛也、めづらしからぬ事也、たとへば一方を證すれば一方はくらしと云も、是程の事にてこそあれ、佛は衆生をころし、衆生は佛をころすとも云ひつべし、此義は實に謂あり、然而今坐禪にむかひて坐佛すれば、則殺佛と云詞がなににつゝきたりともきこえぬ樣に覺ゆ、如何、答曰此義は猶愛惜棄嫌の心地なり、これ佛與衆生を能所と心得歟、たゞ佛は佛を殺、衆生は衆生をころすと云べし、その時は坐禪坐佛殺佛なむどわくべからずと云云▲有什麼形段と云は、この形段三界唯一心也、唯有一乘法なり▲殺人未殺人と云は、いま人をころすと云、人は坐禪人なり、坐禪すれば坐佛なるゆへに、人をかさねべからず、この時人をころすと云ふ、未殺人と云に、坐禪人と云はむとき人現前するゆへに未殺と云ふ、坐人の時は殺佛也、坐佛のときは殺人なり、未殺人とは、一心卽三界なりと云はむ、未殺人なるべし、たとへば殺未殺の相違、三界唯一心と、一心卽三界と程のかはり也▲若執坐相非達其理（この執の詞不可嚴、不悟玉道の悟なるべし、非達の非なるべし、）所詮執坐相を以て坐禪ととく、非達其理を以て坐佛の莊嚴とすべきがゆへに、今の執は執心執着なむど云同文字なり、但殺は執に當る非達は今の未殺人に當る、所詮一方にあつべくは、殺人たゞやがて未殺人なり、非達は又達と體脫すべきなり、此執を捨するにも可仕、觸するにも可仕▲不執坐相と云は、執坐相をきらふに似たれども不執坐相なることを得ざるゆへにとゞくゆへに、執坐相たとひ玲瓏也とも云はるゝ也、非達其理の詞は其理に達せずと聞ゆれば、達其理はとるべきに似たれども、是又しかあらず、非達其理といふは執坐相玲瓏なるに可達、いまだ達せざるがゆへに、非達其理と云にあらず、たとひ玲瓏なる執坐相なりとも、執坐相をきらひて非達其理と云には非ず、たとへば坐佛ひとつかうべに非達其理とも云はむが如し、達其理とも云はむが如し、非達其理とも云はむ、假令ば大悟底人不悟底人なむど云はむが如し、すべてきらふべきなし、非達其理とて劣になさむは、執坐相にてあるべき也▲坐佛佛坐に相似也と雖もと云は、人作佛作佛人と云事を相對したる訓なり、たとへば磨塼作鏡の如し、人作佛と云へばとて、人が佛になるとは不可心得、やがて人が作佛にてある也▲一切人作佛にあらず佛は一切人にあらずと云は、作鏡磨鏡の如し、是は佛與人勝劣を判ずるにてなし、執坐相は作佛をまたずと云が、執坐相にてある也、坐を執して作をまたざるゆへに、其理の外の人なければ、達ぞ非達ぞと云べきことなし▲藥山の會に向來の道取ありと云は思量不思量非思量事也▲還源返本の樣子と云は（本流逆流と云ふ事あり）流轉を返心なり、還作衆生と談ずる義あり息慮凝寂の經營と云は、小乘

に談ず胸襟無事了程の事也（般若には佛果空と云事もあり）▲十地等覺の見解に不及いかでか佛祖の坐禪を單傳せむと云は、息慮凝寂の詞を世間の禪僧といふだけ、觀練薫修の階級十地等覺の見解に不及、但今の坐禪の心地には又觀練薫修の階級十地等覺の見解も不可及也、ゆへは十地の菩薩を立るときをなじ、十地の菩薩ながら、初地菩薩は二地の菩薩の擧足下足を不知と云ふ、況や佛祖の坐禪をや、但し等覺の菩薩等をいたづらにさぐるにあらず、我祖門の義にあらざる所をあけてしやむやと云なり、十地等は地々の階級をつらねて妙覺の位をまつ、無明の惑の不斷あり、法性の現はれざるあり、祖門には行不待證々不待行、位の淺深を不立ゆへに、これを超佛越祖の談となづく、佛向上の事と云ふ▲南嶽問答能々可了見、汝爲學坐禪爲學坐佛と云、是は坐禪がやがて坐佛なる道理をのべらる、若學坐禪々非坐臥と云、是は坐臥とは心得まじ坐臥の自己卽坐佛なるゆへに、若學坐佛佛非定相と云是は定相をきらうにあらずやがて非定相佛也、汝若坐佛卽是殺佛と云、是は坐禪すれば殺佛なるぎなり、若執坐相非達其理と云、是は執坐相をきらひて非達其理と云ふにはあらず、達其理も非達も同かるべし▲宏智禪師坐禪箴、この箴を大用現前と云ふ此大用は大の外に用をもちゐるにあらず、大がやがて用にてあるなり、又大用と云ふはやがて坐禪の用をさすなり、現前と云ふ又やがてあらはるゝ所をさす也、用と云事敎にも談す、但其は大小用をたてゝ日月の光は大用、星辰の光は小用なむど云ふ、今の義には異なり▲莫謗佛祖好と云は別の謗の詞あるべきにはあらず、たゞ坐禪の時節は莫謗佛祖好と云はるゝ也、好はよしと云也▲未免喪身失命と云は、坐禪人は必喪身失命すると心得る也、そのゆへは坐禪すれば日來の身心脫落するゆへに、喪身失命する也▲坐禪すでに坐佛也、人間界にあるべき事にて坐禪はなきゆへに、たとひ聲色と云とも向上の聲色なるべし、日來の見に不可准、父母未生前と云ふいはれなり、人間界をはなれたる坐禪なるゆへに、莫謗佛祖好と云ふ、又其謂あり、今の坐禪佛祖を謗することなきゆへに、莫謗なる所を好と云ふよきなり、未免喪身失命と云ふ、坐禪坐佛なれば喪身失命すと也、頭長三尺頸短二寸と云ふ、これ又かゝる物のあるべきにあらず、今の坐禪人が世間の凡夫にことなる所を云ふとき、如此いはるゝなり、但又頭と云も、頸と云も、世間の人體に相對して云時こそをどろけ、かゝる人のある世界もあらば、其國の人はをどろくべからず、又三尺と云も、二寸と云も、世間の丈尺と不可心得、もし尺よりは寸はながしと知る習もあらば、あながちに不可驚▲佛々祖々の間は、要機々要のかはり程也、佛は佛を要機とする也、要機の現成は坐禪也、坐禪は坐佛也、要機々要は烈燄亙天の心地也、この機は、やがて佛を機とはとるなり▲機は可發を以て機とすと云ふ物のをこるを始をこそ、機とは取を、今の要機は佛の機を佛なりと云ふ、時に可發とも不可云、これ作佛を不待ゆへなり、祖々機要と云ふ機と要と前後し、各別すべきならねば機要とも要機とも云なり▲先師無語と云は、今の坐禪と云事が、師のをしへによりてすることにてはなし、ゆへに師の語なしとは云なり、佛法をとき法佛をとくと云程の義なり▲法傳衣傳と云は、人の傳るにてはなし、法が傳へ衣が傳る也、是は打任ては傳法傳衣と云を打ちかへて、法と傳と能所なき所を、法傳衣傳と云なるべし▲不觸事而知と云は、佛の正遍知也、知は不觸事也、不觸事は知也とかく打ちかへて云はねば、不觸事が猶各別なるやうに聞ゆ、知をやがて不觸とは可心得也、此不觸事而知を達磨宗の如く、談ずるには了了常知と談じて、境にかゝはらざる知也と云ふ、境にかゝはらずといふは、白としり黑としる於境雖有黑白、知の體は一也、故此知境にかゝはらずと云ふ、今はしかにはあらず、一知現前のとき事として可觸なし、たとへば三界唯一心、心外無別法と云ふとき、唯心の道理現前せむときは、三界に觸せずと云はむが如し▲不對緣而照

と云ふ、敎には觀照と云ふ事あり、寂照と云事もあり、但何とも云へ事理の二法を立て云はむは、こなたにはとりがたし、寂にして照也、照にして寂なりと云も、二法を不離なり、不對緣なるを、やがて照と云ふべし▲破界不出頭と云は、頭の字は無別要、只不出なるなり、さかひを定むるとき、入出の義あるべし、世界を坐破しぬる上は不出頭と云はるゝなり▲證は回の義なれども、不對緣の證なるゆへに不回互なり▲龍を作するに禹門の內外にかゝわらずと云は、事に不觸、不對緣なる心地なり、禹門にのぼらざるときも龍なり、禹門には三重の浪あり、これを蛇若は魚類のぼりて龍となると云ふ、さきより龍を作れば、禹門の沙汰あるべからず、坐禪如此▲一知わづかに使用すると云は此知は我等が見かと覺へたれども不然、一知とは不觸事なる所を一と云なり、一知半解と云ふ知はさきの一知をさす也、凡夫の慮知に非ず、全體知より外に物なきゆへに一知と云ふ▲分別思量をそく到來すると云は、日來の分別思量には非ず、山河盡界をさすなり、ゆへに已曾分別なる佛々の現成也、曾無分別と云無は、已曾なり、ゆへに已曾現成すれば、曾無分別也、すべてあふべき物なし、不逢一人と云ふ、已曾分別とは山河を以てする也、曾無已曾也、不逢一人は、大用現前也▲其照自妙曾毫忽の兆なしと云は、毫忽則山河也、盡界なるゆへに兆なしとは云ふ▲いまだ將來せざるが如しと云は、將來とはもちきたるとなり、不對緣なればもちきたるものあるべからず▲直須旨外明宗莫向言中取則と云ふは旨外明宗とは、世間の旨外あきらむべしとなり、旨外は佛法なるゆへに、向言中取則することなかれと云は、言語にとゝこほらざれと云心地なり▲我却疑著也と云は、日來の執見をはなるゝと云事也、うたがふべき事のあり て、うたがふにはあらず、坐禪を坐佛とうたがふ程の事也、此疑著は如何是佛と云程の事也、如何是佛の詞は、問に似たれども、やがて答となる、如何是大用現前と云はむ同かるべし、こゝの疑著は、其照妙なる所を疑と云べし、自妙なるべし、疑煩惱と云事あり、今疑にはことなるべし、不悟至道程の疑なるべし▲水清徹底と云は、そこなくきしなきを云也、物に對して論ずべきに非ず、ゆへに坐禪也、徹底の行程擧體なるゆへに、魚の行ことをそきなり、魚の行事をそきと云ふ心地は、坐禪人喪身失命する義也●魚行急なりとも云べし▲徹底の行程は擧體の不行（擧體の不行とふ時に今は行なき也）鳥道也と云は、所詮徹底清水は、やがて徹底清水ながら行なり、不觸事不對緣を以て清水徹底と也、知與照を以て鳥魚といはむが如し、ゆへに魚の行ことをそしとも、また不行鳥道とも云也、擧體は全體の義也擧はこぞつてと云義也、のこさざる也、たとへば世こぞつてなむど云心地也、不行は、あまりにひろくきはなくなれば、行ともいひがたきを不行と云ふ▲清水無魚と云ふ、俗の詞あり、清水を談ずる時、珠を入れば水澄む、象入れば水にごるなむど云事あり、是等は世間の事也、底に泥あつまるゆへに象入ばにごるなり、今の清水徹底は、底なしきしなし、にごり何の所より來べき、我却疑著ぞ、徹底清水なるべき也、此清水には徹底と云ふ詞も無詮とも、不行鳥道と結するゆへに如此云也、法身遍法界、三界唯心、徹底清水をなじかるべし▲空闊莫涯兮鳥飛杳々と云ふ空與鳥は、坐禪坐佛程なり、飛鳥は飛鳥なり▲足下無絲去と云は、足の下にふむ所なきを云ふ、ゆへに不觸事而知不對緣而照と云なり▲只在這裏をきをい云といふは何事をいはむも只在這裏の道理に不可背、此う、にきをひいふと云ふ、不觸事も只在這裏（這裏は坐禪裏なるべし）不對緣も只這裏●父母未生前とは佛向上の義也、下に對したる上にあらず、父母所生に對したる未生前にあらず、坐禪の面目は非衆生々々は作業の故に坐禪は人間界にあるべき事ならず、坐禪の時は坐禪の我にてこそあれ日來の我にてはなきなり、坐禪をやがて坐佛と云ふ今の脫落これなり、脫落を以て葛藤しもてゆく喪身失命と云も今の坐禪の時節也、この兀坐の思量を以て一切善

△部、同以下ノ文字ナシ△仁以下ナシ

惡都莫思量と云ふこれ善惡に對して思量せざるにはあらず、兀坐の思量を都莫思量とは云なり、山の行は動せざるを行と云つべし水はながれざるを行と云つべし、佛の行は流轉を止るを行とすればかならず行を行とすべからず、祖門の行は東西の馳走を止て端坐に行とすべし●行亦禪坐亦禪語默動靜體安然と云事　二の詞ある爾、平穩地也は坐禪の心をさす、行亦禪等の詞は必坐禪せずとも行住坐臥皆禪也と云ふ邪見なり、仍二ながら不可用之、不可用と云は平穩地也の詞行亦禪坐亦禪の邪見とを云ふしばらく行亦禪坐亦禪の詞をゆるして心得は坐禪の語默動靜等皆佛法の上にをくべし、佛法の上の詞をば可用也●行（この行いたづらなるあゆみのありくことは不可心得佛行也佛行なるがゆへに禪なり）坐（今の坐禪是なりいたづらに我等が坐するにあらず）●語默動靜　是皆佛威儀をさすいたづらなる衆生の動靜等にあらず默も佛の無言說程事也、動も諸佛を動じて實相と云程の事也、語默と云も其義一にあらず、こゝろの止觀口の說默身の威儀なむど云を身の威儀につきて常行常坐半行半坐なむど云ふ行とは心得まじ、佛行佛坐はるかにことなり、ことはわたりて分々あるなり證をとくにも分證とて一分二分をわかつ初地の菩薩より十地まで分々の證あるべし今の證はしかあるべからず●入佛入魔と云事是も今の坐禪の義也、坐禪盡界なるゆへに佛祖を超越したる所を入佛入魔と仕ふ入の一字不用得なり、みぞにみちたにゝみつと云ふぞやがて入佛入魔の詞にあふべき界をつくすゆへに●坐禪事　早辰黃昏、掛袈裟、後夜晡時不掛袈裟、早辰坐禪法、粥罷小頃、掛牌鳴板、掛袈裟入堂、後夜坐禪、大衆不掛袈裟、住持人袈裟者掛、倚子坐禪也、洗面之後、歸入雲堂、不掛袈裟。坐禪箴終

正法眼藏坐禪箴

仁治三年壬寅三月十八日記興聖寶林寺

同四年癸卯冬十一月在越州吉田縣吉峰精舍示衆

却退一字參

正法眼藏坐禪箴　抽解經行參却退一字　高祖玄提天童箴、爛焉如日裡看山、而今且述予短見、謂、坐禪卽箴、箴外坐坐、非唯箴不坐、及邪禪者耳、思量箇不思量、非思量、卽是坐禪箴、故最初舉之、次舉磨甎、而後舉箴文、親玄提之者也矣、二三子者、其愼勿異求。

●藥山弘道大師坐次、有僧問、兀々地思量什麼、師云、思量箇不思量底、僧曰、不思量底如何思量、師云、非思量。本文凡諸錄中言辭、多分俗語、而其意味、終不屈雅俗、須眞實參究耳、世有一位不逼參老、吐自鄙陋言、此思量箇不思量底者、無它、唯是思量箇箇是不思量底也耳、吁是何言歟、鼓如是鄙野舌頭乎、若不參則已矣、苟參究不可恁麼道、汝不參底、須自修理草鞋、雖童男童女、而有眞實知之、則崆峒其懷以問訊古人妙則、莫錯認己見以爲是、咄咄衆身在內。

●證大師道如是、可參學兀坐、兀坐可正傳、兀坐之傳佛道參究也。本文證大師道如是者、猶言證據、而幾乎馬鳴古佛、謂唯證相應耳、何者自受用三昧、固證上妙也、恁麼信順、是兀坐參學也、若能如是、可謂兀坐正傳兀坐、更謂兀坐之傳佛道參究也者、言在使吾人知佛祖兀坐非道外駢拇而是異中神藥耳、於是乎知藥鄉孤坐妙藥、則不可得支持祖師遺寄、煖皮肉也、南北東西歸去來、雪中一點少林梅、習禪不著眞龍

躍、今日新疑傾客盃、還自誠莫錯被酒、

●兀兀地思量、雖非獨、而藥山道者其一也者、使雲孫知大師道親切七佛向上事的、是兀兀地之思量也、而謂藥山道者其一也者、明夫七佛祖宗、皮髓、一齊師資不傳也、血滴滴地、于深于遠、撲兒孫鼻孔、腥臊之甚矣、

●所謂思量箇不思量底也、有思量、皮肉骨髓有不思量、皮肉骨髓也、道得千載未開口、道得者誰、纏于汝得吾皮肉骨髓葛藤、與聖寶林爾、厥思量箇不思量底、非唯在火焰裡轉大法輪、皮肉骨髓、亦爲思量箇不思量、轉大法輪、思量箇不思量底、而今兀兀地聽法、我却疑著、玉殿生苦寂寥不去、醒覺隨來囚、華發枯木兮電轉死灰、

●僧曰、不思量底如何思量、誠不思量底、雖舊、而更是如何思量也、兀兀地無思量耶、兀兀地向上因甚不通、非賤近愚、可有問著兀兀地力量、可有思量矣、本文誠不思量底、雖舊、而更是如何思量者、道得問處道得、不思量底、言、雖舊于耳聞、而復進步於如何思量、與麼進步豈疎不思量底乎、是卽前道兀兀地思量也而已、故云無思量于兀兀地耶、厥兀兀地思量也、在兀兀地向上、不思量、若不參究不思量底如何思量、則可謂不通兀兀地向上、故徵詰道因甚不通、前後參學、自非賤近愚、無間著之力量思量乎、是使遠孫不差過問處、而牢實己脚跟之白毫光也矣、勿徒作聲色看、

●大師云非思量、雖使用所謂非思量之玲瓏、思量不思量底、則必以非思量、非思量有誰、誰保任我、本文須知兀坐、誰我、友于兀坐也、所以道雖使用非思量之玲瓏、

道本更有地字、今從原水寫本

思量不思量之地、必以非思量、於是乎知、曰道非思量有阿誰、則是思量箇不思量底也焉、此誰保任非思量我、而更翻身轉腦則非思量、亦爲誰于思量箇不思量底、保任無自它、唯友于雪庭也而已、所以雲巖山既已道、欲得恁麼事、須是恁麼人、吉祥、坐禪儀、亦示誨久爲恁麼、須是恁麼、誰兒孫可不獻唯然、

●兀兀地雖我而非思量已、擧頭兀兀地也、兀兀地雖兀兀地、而兀兀地爭思量兀兀地也、然則兀兀地也、非佛量、非法量、非悟量、非會量也、本文於是方始知兀兀地也、不爲諸量之量所量、更進步參終不依倚非量、唯擧頭兀兀地、此箇擧頭、無縫塔、見還難非內外、忒團圞鼻孔氣通、山嶽低、眼睛電轉、亦誰謾還會麼、卽日窮冬徹骨寒而非悟、下、其離僧量、此非三量、全是透體、謂諸兀兀地思量乎、若兀兀地爭冥恁麼道、若非兀兀地、爭解恁麼道、爲是超脫諸量、故而已矣、

●藥山如是單傳、既釋迦牟尼佛直下三十六代也、討自藥山向上、三十六代有釋迦牟尼佛、如是正傳、己有思量箇不思量底焉、而近年疎漏杜撰曰、功夫坐禪、得胸襟無事了、便是平穩地也、此見解猶不及小乘、學者、劣於人天乘、爭道學佛法、漢見在大宋國、多恁麼、功夫人矣、祖道荒蕪可悲也、本文此所貼文、自分二段、底焉以上、佛祖單傳、放大光明也者、吉祥、雲孫沐此光、正宗、兀坐止亡羊、泥盤一路茅圍闔、少室、赤心曾面牆、曾面牆、根塵四大自當陽、而近至可悲也、拈金剛杵、點荳草眹、服之稟承須端正鼻孔、

●又有一類漢、坐禪辨道、是初心晚學、要機、非必佛祖、行履、行亦禪坐亦禪坐亦禪、

語默動靜體安然也、勿唯拘今功夫而已、稱臨濟餘流曹多此見解也、憑佛法正命傳蹤、恁麼道也（本文）佛祖千古、於轉法輪、曾無人情、只在欲相見厥祖、汝曹宗祖、爭肯恁麼見解、今問、南嶽十五年消息、汝何爲歟。

●何是初心、孰非初心、初心安什麼處（本文）單傳宗門、有初心不、是初心、非初心、有什麼處、說似一物卽不中、爲什麼人身心麼。

●須知學道之定參究、則坐禪辨道也（本文）此一言也、少林單方耳、是謂之新醫、非外道梵志邪見昧著也、九十六種之邪禪、則不可同年論焉、二乘惡見之習禪、不可亦同日談耳、雖然胡爲忘汝等所行是菩薩道也藥草味乎、勸汝置毒乳傾半盂、是爲兀兀地于行佛、故爾。

●其榜樣宗旨、有不求作佛、行佛矣、行佛非更作佛故、公案現成也、身佛非更作佛、打破羅籠、則坐佛不更礙作佛、正當恁麼時千古萬古、俱固有入佛入魔力、進步退步、有親塡溝塞堅量也（本文）打破羅籠者、猶言冲而用之、或不盈乎、所以道公案現成、行佛今何形段、未知何形段、而坐禪辨道于七尺單前、固信兀兀地三昧不求作佛也、此兀兀地非更作佛、是公案現成、謂之皮髓身佛、礙塞什麼處、豈非是冲用乎、或不盈故云坐佛不更礙作佛、假或不盈時、道正當恁麼、能如是冲而用之者、之顏貌、今在什麼處、謂、千古萬古下、赤心片片、千古萬古者、非但彼使十二時、亦是使得十二時也、故云俱有固入佛入魔力焉、進步退步者、謂、欲知山下路、須是去來人、祖佛陷圓相、竿頭忝轉身、所謂是有親塡溝塞堅量也、如是力量有何所困窮乎。

●江西大寂禪師、因參學南嶽大慧禪師、密受心印以來常坐禪焉、南嶽有時、行大寂所問、大德、坐禪圖箇什麼、此問可靜工夫參究、其所以者、可向上自坐禪圖之有乎、可自坐禪格外圖道之未乎、不可都圖乎、問著當時坐禪如何圖之現成乎、須審細工夫也（本文）言工夫者譬如工匠士夫善攻堅木先其易者後其節目及其久也、手得之心應而作樓臺、吾人參學亦復如是、今欲造營三德祕藏之自受用三昧大寶樓閣、最初辨道至後脫落似有前後、更無階差、而成三菩提及三德殿也、由是名之參學參究亦猶眼目異名同體、密語卷云、可不遺忘參學也、參學者、不欲一時會取焉、可百回千回審細工夫猶經營斫硬物焉也、不可思有語人、則立地應會取之、此是密語可謂賜與無價寶珠於吾人而已矣、可靜工夫參究之言、是示誨廣大發無上道心者、我等兒孫、何欲大早計而得小利耶、雖然非謂惰慢勤修、其意唯在歷劫操持、成法身的地、而須如競其寸光分陰也、相陪二乘志操耳、其所以者者、是自徵詰、謂、於其坐禪圖箇什麼、有何意味、而勸發兄弟乎參究耶、而自釋之、所謂圖者、向上自坐禪乎、又有坐禪格中、而可更圖的、方外道、未道得乎、又有不可奈何圖、宗旨乎、又問著正當恁麼坐禪之時、有何色圖而現成耶、此是光明、遠爲兒孫、不對緣而照大慧禪師語似髻中寶珠、雖百千、影像顯現、而絲毫染汚、不亦曾黏則宜深、工夫切參究耳、今謂、南嶽當時將原坐水脈恁麼問取乎、進步則此是一問、蓋天蓋地而虛空迸裂也、二三子直饒恁麼十成也焉可向箇裡不覓轉身一路耶、所以佛祖道、

疑著也、凝固於金剛、融柔於乳水、故道、一九二九、相對相逢、疑著道著、春雨春風、誰容暇隙于審細、工夫者乎、咄、

●與愛彫龍、可進愛眞龍、焉彫眞龍、共有雲雨能、須學習矣、此箇光明、親是照破、圖箇什麼、無滯礙于一邊、所以道、未嫌伎倆、不如人、觸處生涯、隨分足、然則可知、不是此竹有之彫龍、宜愛彼松無之眞龍、狗子尙不繫累佛性、有無、豈滯貓兒、道得道不得乎、共有雲雨能者、萬物自有功、當言用及處、加之利根鈍根等、雨法雨、孰之取舍諸、無黨無偏、是學習眞乎、淵淵乎信、佛德祖翁、祇識其一、不知其二矣、

●勿貴遠、勿賤近、可慣熟于近、勿賤近勿貴近、可慣熟于近、勿輕目勿重目、勿重耳勿輕耳、可令耳目聰明矣、是光向所謂信佛德宗祖、祇識其一、不知其二也、夫遠近也、貴賤也、輕重也、耳目也、等是二也、慣熟聰明豈非其一乎、故曹谿古佛言實相非名、唯然祖翁、光也雖不敏、請從事於斯矣、吟案一枚字、寒風忘徹身、時時多黏縛、念々轉車輪、咄咄、是非交結處、蘿蔔待油油、卽今問二三子、箇裏敲推什麼、一字請猜一猜、

●江西云、圖作佛、此道須明達、道取作佛者、應何如也、見作佛于佛之道取作佛歟、作佛佛之道取作佛歟、佛一面出兩面出之道取作佛歟、圖作佛則脫落、而脫落圖作佛歟、作佛雖萬般也、而葛藤于此圖將來之道取圖作佛歟、須知大寂之道者、坐禪必圖作佛也、坐禪必作佛圖也、圖者、應前于作佛、應後與作佛、應作佛之正當恁麼時也矣、此道、須明達者、兀坐之圖現成也、而此圖作佛、幾乎世希有首楞嚴王、所以者何、佛祖向上、癡坐、則爲親切衆生快便、難逢于悉有中也、而見道取道取作佛者、應何如也者、須知八方歌有道君、四海樂無爲化、的一竅八面、手眼千千、魚躍淵底、鳶翔萬天、焉、三箇道取作佛歟也、一齊是脫落上、行李、而泥多佛大、水長船高、今時、兀坐、古佛、白毫、而已、雖七佛列祖有恒沙三昧、而不有一兎、此孤坐圖者、則葛藤葛藤于此圖將來之道取圖作佛歟、是大宋道、光明照也爾、而圖也應前等下、親切向上宗乘中事、是未實兀坐圖作佛、兀坐者、不可知取之也、雖然如是子也丑也、渾淪有時、雖有前後、無拘識知、啞、一住不易今洞廊大疑、

●且問、此一圖、爲葛藤幾許作佛、此葛藤可更纏葛藤、斯時、盡作佛、條條葛藤、必盡作佛、端的、皆共條條圖也、不可廻避一圖、廻避一圖、則喪身失命也、喪身失命、則一圖葛藤也、文本　坐佛一圖也太奇、雪庭倒起雪團獅、大仙曇蘂馨香遠、南嶽江西海印象、夫一圖也、不曾見量千今萬古量、則一大法界海恒沙、總不中一圖、全量、何者、爲無有固必一圖之量故也而已、而無量無數作佛作祖、葛藤于此一圖、無有始終、又此葛藤、還纏葛藤、譬如帝網珠無央數、而縱橫斜角相映、映映無盡無盡重重、珠映映珠、此箇映珠珠映宛、爾重重無盡全同異映、其中一珠、映映珠珠、珠珠映映一珠、一珠多珠、全映半映、不移其位、常住一位、而其一位、全相映映于恆沙珠、位位、一多互遍、無礙羅列、厥不動珠、映映珠珠、展轉無窮、則似敗壞不安、之相終不犯虛冲位、此一茅圍上、圖作佛也、癡兀孤坐、亦復如是、自七佛向上、兀坐來、兀坐渾七佛、七佛位位、同兀坐正傳來、而此土西天、齊等切此兀坐、此是圖